

「徐霞客遊記」目次

卷一上

遊天台山日記 .....

遊雁宕山日記

遊白嶽山日記

遊黃山日記

遊武彝山日記

遊廬山日記

遊黃山日記 後

遊九鯉湖日記

卷一下

遊嵩山日記 .....

遊太華山日記

遊太和山日記

閩遊日記 前

閩遊日記 後

遊天台山日記 後

遊雁宕山日記 後

遊五台山日記

遊恒山日記

卷二上

浙遊日記 .....

江右遊日記

卷二下

楚遊日記 (1) .....

楚遊日記 (2)

卷三上

粵西遊日記一

卷三下

粵西遊日記二

卷四上

粵西遊日記三

粵西遊日記四

卷四下

黔游日記一

黔游日記二

卷五上

滇遊日記一 (缺)

游太華山記

游顏洞記

滇遊日記二

卷五下

滇遊日記三

卷六上

滇遊日記四

卷六下

滇遊日記五

卷七上

滇遊日記六

卷七下

滇遊日記七

卷八上

滇遊日記八

卷八下

滇遊日記九

卷九上

滇遊日記十

卷九下

滇遊日記十一

卷十上

滇遊日記十二

滇遊日記十三

盤江考

溯江紀源

卷十下

滇中花木記

隨筆二則

永昌志略

近騰諸彝說略

麗江紀略

法王緣起

山中逸趣跋

## 徐霞客遊記卷一上

### 遊天台山日記「浙江台州府」

癸丑の年 万曆四一（一六一三）年

#### 「浙江台州府寧海県域」

#### 《1》寧海から天台山へ

〔三月三十日〕

寧海県を西門から出発する。雲もなく晴れ渡り太陽が輝き、人の心情も山の姿も、喜んでいられるかの如くである。三十里進むと梁隍山に至った。聞くところによれば、この地では虎が跋扈しており、月ごとに数十人に被害を与えているという。そこでここに宿泊することとする。

#### ◆梁隍山に泊。

〔四月一日〕

朝は雨。十五里進むと分かれ道がある。馬首を西に向け天台山へ向かう。空が次第に晴れてくる。

また十里進むと、松門嶺に至る。山道は険峻で路面は滑りやすい。そこで馬から下りて歩くことにする。奉化よりこのかた、幾重もの山道を越えてきたが、どれも山麓をめぐるものであった。それがこの地に至って、迂回したり、谷川に臨んだり高い所に登ったりすることになってきた。すべて山の尾根である。雨が上がったばかりで晴れ渡り、美しい山の景色の中に溪流の音が聞こえ、繰り返す新しい景勝が出現する。緑の草むらの中に杜鵑花が赤く映えており、山を登る苦しさを

忘れさせてくれる光景である。

また十五里進む、筋竹庵で昼食とする。山頂ではあちこちで麦を植えている。筋竹嶺より南に行けば、国清寺へ向かう大路である。たまたま国清寺の僧侶で雲峯というものと食事をもにすることになる。彼が言うには「ここから石梁に至るには、山道は険しく、且つ長い。荷物を携帯していくのは大変であり、軽装で行き、重い荷物は（人に運ばせて）国清寺で待たせているのがよい」と。私はその意見に同意し、担夫に雲峯とともに国清寺に行かせ、自分は蓮舟上人とともに石梁への道をたどることとする。

#### 「浙江台州府天台県域」

五里進むと筋竹嶺を過ぎる。嶺の旁らには背の低い松の木が多い。年を経た幹は屈曲し、根の辺りは葉が青々と茂っている。まるで下界の我が家にある盆栽のようだ。

また三十里進むと弥陀庵に至る。上下ともに高峻な山嶺であり、奥深い山で荒涼としている〔自注1〕。溪流の音が鳴り響き、強風が大を揺るがしており、山道を行く人は他にはいない。弥陀庵は重なる山々の中の平地にある。これからの道は厳しくかつ長い。またちようど道程の半ばにあたる。ここで食事にして宿をとるのがよい。

#### ◆弥陀庵に泊。

〔四月二日〕

#### 《1》天台山へ（続き）

朝食を終えると、雨がやむ。そこで道を蔽う水たまりを越え、山嶺をよじ登る。溪流と岩石とが次第に薄暗くなっていく。

二十里進む、夕暮れに天封寺に至る。寝床で、明朝の山頂への登攀

のことを思いやり、縁があつて、晴れの天気にならないかと考える。というのも連日夜になってようやく晴れており、朝から晴れることはついぞなかったからだ。午前四時頃、夢うつつの中で、満天に星が出ているとの話し声を聞く。うれしくなつて眠れなくなる。

◆天封寺に泊。

〔四月三日〕

## 《2》天台山華頂峯

早朝に起きる。果たして太陽が燦々と輝いている。そこで華頂峰の頂に登ることに決める。

数里登ると華頂庵に至る。更に三里行くと、山頂近くに太白堂がある。どちらも鑑賞に足るものは何もない。しかし次の話を聞く、「太白堂の左の下に黄経洞という洞窟がある」と。そこで小道を下つてみる。

二里行くと、下にひとつの大きな岩が突出しているのが見える。とても美しいと感じた。ところがそこへ至ると、一人の有髪の僧侶が洞窟の前に庵を結んでおり、洞窟から風が吹いてくるのを避けるために、石ころで洞窟の門を塞いでいる。誠に残念に思った。

再び登ることにし、太白堂を経て、山道に順つて華頂峰の山頂に登る。山頂は荒れた草地で風に吹かれて草がなびいている。山の標高が高く風は寒冷で、草の上には霜が一寸ばかりもおりている。周囲を見下ろすと山々が四周に展開しており、宝玉のように美しい花々や木々が、細やかに目の限りに広がっている。山麓では花が盛んに咲いているのに、山頂では花が開いていない。山が高く寒冷なためであろう。元の道をたどつて華頂庵に下る。池の畔の小さな橋を過ぎて、さら

に嶺を三つ越える。谷川がめぐり山々が重なり、木々が生い茂り岩石が美しく輝いている。一箇所をめぐるたびに新しい奇景が展開し、まったく望むところを満足させる。

## 《3》方広寺

二十里行き、上方広寺を経由して石梁飛瀑に至る。曇花亭で仏を礼拝する。子細に飛瀑を鑑賞する暇も無く、下つて下方広寺に至り、そこから石梁飛瀑を仰ぎ見る。たちまち天の果てにいるかのようである。

「断橋と珠簾が最も優れた景勝だ。」と聞く。僧侶が「昼食後でも往復できる。」と言う。そこで仙筏橋から山の後に向かい、嶺を一つ越える。

## 《4》断橋

溪流に沿つて八九里行くと、滝が石の門のようなところから流れ落ち、ぐるぐるとめぐつて三段をなしている。一番上の段が断橋である。二つの石が斜めにもたれかかっている。滝の水がその石の間に砕け散つてほとぼしり、またひとつに合わさつて淵に入る。真ん中の段は二つの石が門のように対峙している。滝の水は門のために束ねられ、勢いが甚だ激しい。最下段は淵の口がとても広い。水が注いでいるところは門の敷居のようで、水が窪みから斜めに下っている。三段の滝はいずれも高さが数丈あり、それぞれが神奇を尽くしている。しかし流れは段々に下つており、湾曲したところは滝に遮られており、全部を一度に目に収めることはできない。

## 《5》珠簾水

また一里ばかりで珠簾水がある。水が流れて下るところは平らで広々としており、水勢はゆったりとしていて、蕩々と水音を立てて流れている。私は足をむき出しにして草むらを跳ね、木につかまって崖を

登った。しかし蓮舟君はついてこれなかった。夜のとばりがあたりに立ちこめてきて、ようやく還る。

仙筏橋に足を留め、石梁が虹のように掛かり、飛瀑が雪のような飛沫を吹き上げているのを眺める。まったく睡るのが惜しいくらいだ。

◆方広寺に泊。

〔四月四日〕

### 《6》石梁飛瀑

天空も山々も黛のごとく青緑に輝いている。朝食をとる時間も惜しんで、すぐさま仙筏橋に沿って曇花亭に登る。石梁飛瀑は曇花亭の外になる。梁は広さが一尺あまり、長さが三丈あまりで、兩岸のくぼみの所に架かっている。二筋の滝が亭の左から流れてきて、橋（石梁）に至って合流し、下へ流れ落ちている。雷や河が決壊するかのような轟音が鳴り響いている。滝の高さは百丈を下らない。

私は石梁の上を歩いてみて、深い淵を見下ろしたところ、ぞつとして鳥肌が立つほど慄然たる思いであった。石梁を渡り終えたと向こう側に大きな石が聳えていて、向かいの岸に登ることはできない。そこで引き返した。

曇花亭を通り過ぎ、上方広寺に入る。寺の前を流れる溪流をさかのぼれば、さきほど隔壁となっていた大きな石の上に出る。そこに座って石梁を眺める。下方広寺の僧侶が食事を促すために声をかけてくれるまで、ずっと眺めていた。

### 《7》万年寺

昼食後、十五里進んで万年寺に至る。蔵経閣に登る。閣は二屋で、南北経の両方を蔵している。寺の前後には杉の古木が多くあり、三抱

えほどの太さがある。鶴が巢を懸けており、美しく清らかな鳴き声を聞かせている。これもまた深山における雅やかな響きである。

この日私は、桐柏宮に向かい、さらに瓊台や双闕といった景勝を尋ねたいと思っていた。しかし、分かれ道が多く、迷いそうになったため、そのまま国清寺に向かうこととした。国清寺は万年寺から四十里ほどで、中程で龍王堂というところを通過する。嶺を一つ下るたびに、私はもう平地に着いたのかと思ったが、その下に更に幾重もの嶺があつて、下りの勢いは中々やまない。そこでつくづく実感した、華頂峰の高さと言えば、天からさほど遠くないのだ、と。

### 《8》国清寺

日が暮れて国清寺に到着した。雲峰和尚と再会したが、あたかも久方ぶりに会うかのような気がした。これからの奇勝の探訪について相談する。雲峰和尚が言うには「天台山の名勝では、寒岩と明岩に及ぶものはない。遠いところにあるが、馬に乗っていけばいい。先ず寒岩・明岩を見て、後に歩いて桃源に至り、そこから桐柏宮に至るルートを取れば、碧壁や赤城も一望にすることができると。」

◆国清寺に泊。

〔四月五日〕

### 《9》寒巖・明巖へ

雨模様であるが、気にせずに出かける。寒巖・明巖に至る道をたどる。国清寺の西門で乗る馬を求め、馬がやってきたが、同時に雨も降り出す。

五十里進み歩頭に至ると雨がやむ。馬も返す。

二里進み、山に入る。周囲をめぐる峯々が溪流に映えており、樹木

が生い茂り奇岩が重なっている。とても心地よい。東陽県から一筋の溪流が流れてきているが、水勢がはなはだ急で、川幅（流量）は曹娥江に匹敵するほどである。辺りを見渡したが渡してくれる筏もなく、従僕に背負われて渡る。深さは膝ほどである。渡りきるのにほとんど一時を要する。

#### 《10》明巖

三里進むと、明巖に至る。明巖は寒山と拾得が隠棲したところで、二つの山が曲がっている。《大明一統志》にいう「八寸関」である。関に入ると、四周に崖が城壁のように切り立っている。最も奥に、数百人が入れるほどの深さ數十丈もの洞窟がある。洞窟の外の中には、二つの巖があり、どちらも石の壁の半ばにめりこんでいる。洞窟の右には石筍が突き立つように聳えている。その先端は石壁と同じ高さにまでなり、一筋の線ほどしか離れていない。石筍の上には青い松や紫の花が盛んに茂っており、左側の両巖と相對しているかのごとくである。誠に奇勝であるといえよう。

八寸関を出て、再び岩山を上ると、左にまがる。初め来た時に、下から仰ぎ見たときは、わずかな隙間程度しかないように見えたが、実際に登ってみると、数百人も人数を収容できる広さがあることに気づく。巖の中に井戸がひとつある。仙人井という。浅いが見つかることはない。明巖の外にまた大きな岩塊がある。高さは数十丈、高く聳える様が（上の部分が二つに割れていることから）二人の人間が立っているかのようなのである。僧侶たちは、指さして「寒山と拾得だ」という。寺（寒巖寺）に入る。夕食後雲が晴れ、新月が天に昇る。めぐらせた崖の頂上にあつて、月に向かえば、美しい光が岩壁にあふれている。

#### ◆寒巖寺に泊

「四月六日」

#### 《11》寒巖

早朝に寺を出発する。

六七里進むと寒巖に至る。石が壁のように垂直に切り立っている様は、あたかも刀で切り取ったかのようなものである。振り仰いで高い所を見ると、洞窟がとても多い。巖の半ばに一つ洞窟があり、広さは三十歩、深さは百歩余りもあり、洞内も平らで広々として明るい。巖に沿って右に進み、岩の狭い小径を上に登る。巖の低くなった窪地に二つの石が向かい合つて聳えている。下の部分は分かれているのに、上の方でつながっている。これがあの「鵲橋」である。この滝は、あの方広寺附近の石梁飛瀑と奇を争う名勝であるが、ただ、瀑布がまつすぐ落ちていた点が、やや魅力を欠く。

引き返し、僧侶の宿舎で昼食をとる。

#### 《12》桃源へ

のち筏を求めて溪流を下ることとし、谷川に沿って山の下を進む。この一帯は、切り立った壁のような険しい崖が続いており、草木がその上にはびこつて垂れている。海棠樹や紫荊藤が多く、その翠が溪流に美しく映り、香しい風が吹き寄せるところでは、玉蘭花や香草がどこにでも広がって、絶えることがない。

一つの山の突端に至ると、石の壁が溪流の底から直立している。川は深く流れは速く、しかも川岸に通れる余地はほとんどない。岩壁の上に穴をあけ、そこを行くのだが、穴は僅かに足の半分しかない。岩壁に張り付くようにして通るのだが、魂魄を多に恐ろしがらせるものである。

寒巖より十五里進むと、歩頭に至る。(往路とは異なり) 小道を通って桃源へ向かう。桃源は護国寺のそばにある(はずである。しかし)。護国寺の廟宇は既に廃棄されており、土地の人でも知る人はいない。雲峰和尚に従って草ぼうぼうの曲がりくねった道を推し進むが、太陽は沈み、宿とするところもない。かくしてまたも道を尋ね、ようやく坪頭潭というところに至る。潭は歩頭より僅かに二十里なのだが、今回は小道を通ったがため、迂回することになって三十里あまりの道のリだった。ここで宿す。桃源は訪れようとする人を惑わすというのは、本当のことだった。

◆坪頭鎮に泊。

「四月七日」

《13》瓊台へ

坪頭潭を出発し、曲がりくねった山路を行くこと三十里余り、溪流を渡って山に入る。

さらにまた四五里進むと、山の口が次第に狭くなっていく。「桃花塢」という館がある。深い淵に沿って進む。淵の水は澄み切っていて青々としており、滝の水が上から注ぎ込んでいる。鳴玉澗という場所である。澗の水は山沿いに流れて行き、人はその澗に沿って進む。澗の兩岸の山は全てむき出しの岩石で、重なる山並みは随所に緑の木々を擁している。目に見えるものは全て觀賞に堪えるものであり、そのすばらしさは、おおよそ寒巖・明巖に匹敵するほどである。澗が行き詰まると道もなくなる。一条の滝が山のくぼみから流れ落ちており、水勢は縦横無尽である。

昼食後、館を出発し、山の窪地に沿って東南へ進み、二座の山嶺を

越える。有名な「瓊臺」「雙闕」を尋ねようとするが、どこにあるのか知る人がいない。

《14》瓊台

さらに数里進む(人に尋ねたところ)、その山頂にあることが分かる。雲峯とともに山道をよじ登り、ようやくその山頂に到達する。下を俯瞰すれば切り立った崖が四面を囲んでおり、まったく桃源郷のような風景である。しかし緑なす岩壁が万丈も続く様は桃源郷を上回っている。山峰の頂上部分が真ん中から裂けて分かれているところがあつた。これが双闕である。双闕に向かい合つてぐるつと囲まれているものがある、これが瓊台である。台は三面が絶壁で、その一方はそのまゝ双闕につながっている。私は双闕に相対する位置におり、日が暮れてきたのでそこに登ることはできない。しかしこの辺りの景勝については既に一日満喫した。そこで山を下り、赤城山の後を通って国清寺にもどる。だいたい三十里の道のりである。

◆国清寺に泊。

「四月八日」

《15》赤城山

国清寺を離れ、山の裏側の道を五里進んで赤城山に登る。赤城山の山頂は円形の岩盤が空に聳えており、城郭のように見え、岩石の色は微かに赤い。岩穴があるが、僧侶どもがでたらめに居を構えており、天然の景勝を台無しにしている。有名な玉京洞・金銭池・洗腸井も、これとって見るべきものではない。

## 徐霞客遊記卷一下

### 遊嵩山日記 「河南河南府登封縣」

癸丑の年 天啓三（一六二三）年

#### 〔序〕

私は、幼い頃から五岳に対する志を抱いていた。しかし玄岳太和山（武当山）は五岳の上にあるものであり、それへの思慕の念は五岳よりも高いものがあった。ずいぶん前から、先ず先駆けとして湖北省の襄陽府と鄖陽府との間にある太和山を訪ねて、更に北上して陝西の華山に登り、次いで劍閣にある連なる雲棧を通って、四川の峨眉山へ行く、という大旅行を心に描いていた。しかし母親が年老いてきたため、志を変更して遠距離の遊行は避け、太和山までの旅行を先ず行い、親への孝行を優先させることとした。ただ、長江や漢水などの流れを遡及するのでは日数がかかりすぎるので、陸行して進み、帰路を船で下ってくる方が時間が短くてすむのでよいと考えた。また、南側の襄陽から鄧州・汝州を通って嵩山に至る陸路の道のりは、北側の開封から嵩山を経て陝州に至るものとはほぼ同じくらいである。加えて、開封經由の陸路を取れば、嵩山・華山のどちらをも訪問した上で、最後に太和山にご挨拶できる。かくして嵩山から始める陸路を取ることと決し、天啓三年二月一日を以て旅を始めた。

〔二月十九日〕

〔河南開封府滎陽県域〕

#### 《1》黄宗店から密県へ

十九日かかって、河南省鄭州の黄宗店に至った。まちの右から石畳の坂を上り、聖僧池を鑑賞する。清らかな水を湛えた池が、緑なす山の半ばに留まっている。山から見下ろせば、深い谷川が縦横に伸びて重なりあっているが、一滴の水もない涸れ谷である。斜面を下って涸れ谷の底を進み、香爐山に沿って、曲がりながら南へ向かう。香爐山の形は、三つの峯が聳える様が鼎を逆さまに伏せたかのようで、たくさん山々がこれを取り囲んでおり、その美しい様子は見る人をして喜ばせるものがある。谷底は、乱立する石でいっぱい、紫の玉の如き姿を現している。両側は石の壁がうねうねと続いているが、その膚はやや精密で湿潤な感じがする。ここを清流があふれ流れていたときのことを想起してみると、泡立つ水しぶきが珠玉のように輝き、黛のように青々とした淵が満々と水を湛えていたのであろう。どのようなすばらしい景色だったのだろう。

十里進み、石仏嶺を登り越える。

#### 〔河南開封府密県域〕

さらにまた五里で、密県の県域に入る。遙か嵩山を望むに、まだ六十里以上もある。分かれ道から東南に二十五里進み、密県城を通り過ぎて、天仙院に至る。

#### 《2》天仙院

この院には天仙を祀っている。天仙とは黄帝の三女である。白い松が、祠の後ろの中庭に立っている。言い伝えによれば、天仙がここで肉体を脱して昇仙したとのことである。松は大人で四抱えほどもあり、根本はひとつながりの幹に分かれ、それぞれが空に向かって雲に入らなばかりに伸びている。樹皮はなめらかでまるで脂肪を凝らした

如く、白粉で装ったような美しさがある。枝は龍のように曲がって蟠り、馬のたてがみのような緑の葉は風に舞い、頭をあげ、胸を張るように、天空へ向かってすつくと美しく立っている。誠にすばらしい景観である。松を石の欄干が取り巻いている。北に一棟の長廊が延びており、そこには詩や聯を記したものがたくさん並んでいる。しばらくそこを参観したのち、下の方へ下り、滴水を見る。溪流はここで急に下へ落ち込んでおり、崖がその上を覆い、水が落下する音が聞こえる。

### 《3》密県から登封県域へ

密県域に引き返し、さらに西門に至る。

### 〔河南河南府登封県域〕

そこから三十五里進み、登封県の県域に入る。ここは耿店という。ここから南へ向かうのが石淙への道である。今日はここに泊まることとする。

### ◆耿店に泊。

〔二十日〕

### 《4》景勝地石淙

小道に沿って南へ進む。二十五里の間、丘や不規則な高地が続く。しばらくして、小川に行き当たる。これを渡り、更に南に、丘の尾根を進む。そこから下を俯瞰すれば、石淙が見渡せた。

私は開封の方からやって来たので、この間の土地は平らで広々としており、古来より「陸海」と称されるのもよくわかった。平地の上には、河川があまりなく、あったとしても岩石があるものではなかった。それが嵩山に近づいて来て初めて、うねうねと起伏のある山々を見る

ことになった。かくして北流するものには景溪や須溪などの諸溪があり、南流するものに潁水がある。ただしこれらの諸河川は、いずれも土や砂利などの堆積物の間をうねうねと巡りながら流れている（のであまり見えない）。その中で、登封県の東南三十里のこの石淙は、嵩山の東の谷からの流れが、下って潁水に合流しようというあたりである。ここまで道筋は高低があり、くねくねと曲がっていたが、河川はどこでも陸地面から下位にあった。それがここに至って、流れが湧き上がるような岩々にぶちあたることになっている。それらの巨石群は、高い岸边と深い谷の間に聳え立ち、一夫が関所や枢要の地を守っているかのような赴きである。川の水は、それらの巨石の根元あたりに至って沸き立っており、ここから水と石とが融和した世界が始まり、その美しさは様々な変化を見せている。

川の水を巡る兩岸の崖は、あるいはカササギが屹立するかのよう、また雁が並び飛んでいるかのよう。水中にわだかまる巨石は、あるいは水を飲む水牛のよう、また伏せる虎のよう。低く小さいものは小島をなし、高く大きいものは平らな台をなす。石が大きくなれば、それだけ水面から高く遠ざかる。更にまた、その岩の中空には穴が穿たれ、石窟や石洞をなしているものもある。石と崖との距離を測ってみれば、わずか八尺ほどしかないが、蛇行する川の両端の最高距離を測れば、数十尺もある。

水が渓谷の中を流れ、石がその上に屹立している。石の姿は露出した骨のようであり、それに注ぐ水の流れは、骨を覆う皮膚のようであり、水と石とが調和した美しい景観を窮め尽くしている。全く予想もしなかったことだ、茅や葦の茂る水辺にあつて、一瞬で眼の塵埃を洗い流すような、すばらしい光景に出会えるとは。

## 《5》告成鎮から中岳廟・盧巖寺へ

高い丘に登り、西に十里行くと告成鎮である。ここは昔の告成県の場所である。測景台がまちの北にある。

西北に二十五里行くと、中岳廟である。廟に東華門から入ったとき、既に太陽は沈もうとしていた。しかし、私は盧巖寺へ行くことを渴望していたので、すぐさま廟の東北へ山沿いの道を登っていった。幾重ものアップダウンがある山路を十里ばかり行き、転じて山に入ると盧巖寺に行き着いた。

盧巖寺を数歩出ると、ごうごうと音を響かせながら、せばまった石の間を落ちる瀧があった。兩岸の峡谷の様は、水蒸気が充滿していて、霞に被われているかのよう。瀧の流れを遡って寺の後ろ側へ行く。そこは谷底から崖がそそり立っていて、前面を半円形に取り巻き、上から覆い被さるようなしかかって、下の方は削られて引っ込んでいるかの如くである。流れ落ちる瀧の水は、空を飛んで落ちてきて、美しい彩絹が舞い、たなびいているかのようであり、細かな飛沫が谷中に充滿している。その様は、武夷山の水簾洞にも劣らないものがある。ここでは水を得ることで奇勝をなしている。そして水はさらに岩石を得ることでよくなり、岩石も水のよさを助けている。水のよさを妨げることなく、さらに水を飛ばしているわけで、つまり武夷山よりも優れていると言えるのではないか。瀑布の下を徘徊していると、盧巖寺の梵音和尚が、お茶と点心でもてなしてくれた。(その後)急いで中岳廟に戻ったが、既に夜も更けていた。

### ◆中岳廟に泊。

〔二十一日〕

## 《6》太室山概説

早朝に、中岳廟に参る。

大殿を出て、東から太室山の頂上へ向かう。思うに、嵩山は「天地之中」と称されるところにあたっていて、祭りの等級としては五岳のトップである、だから「嵩高」と称される。少室山と対峙しており、山下には洞窟が多くある。そこで「太室」とも呼ばれている。この両室山が向かい合っている様は、まるで一對の眉のようであるが、少室山がでこぼこ高低があるのに対し、太室山は雄々しくすつくと聳えていて、自らの高い位を誇っているようであり、その厳めしきは屏風を背負って諸侯を謁見する帝王の趣がある。緑がかかった山脚より上は、連綿と崖が途切れることなく横たわり、並んだ屏風や伸展された旗のようである。そこでことさらに厳めしさを感じ取るのだろう。嵩山が尊崇され封建されるのは上古よりであり、漢の武帝は「万歳」の声が起ったという奇瑞により、新たに祭祀都市を建設した。宋の時代は、首都の開封に近かったこともあって重視され、祭祀の典礼が完備された。今でも、嵩山の頂上には、鉄梁橋・避暑寨の名が伝わっている。これにより、最盛期の様が想起されるであろう。

### 《7》太室山に登る―黄蓋峯・天門峯・登高巖・白鶴觀跡・頂上真武廟

太室山の東南に延びる支脈があり、その端を黄蓋峯という。その峯の麓が中岳廟になる。廟は規模が広々として壯観である。庭中には石碑が多く立っているが、いずれも宋・遼以来のものである。

太室山に登る本道は、万歳峯の下にあつて、太室山の真南に当たる。私は昨日、盧巖寺に行ったとき、先ず黄蓋峯(の側)を通り過ぎたが、その道中で秀でた峯を見た。それは中程から門のように裂けており、ある人が「金峯玉女溝」だといい、ここからも頂上に登る路があると

教えてくれた。そこで樵夫を備い、ガイドとして案内してもらおうよう  
手配をしておいた。そして今、その道から登るのである。峯の秀でて  
いるところに近づいていくと、道が次第に切れ切れとなってきた。そ  
こを避けようとするが、険しく切り立っていてそのまま越えることは  
できない。そこで北へ向かい土の山に取り付いてみれば、やっと登る  
手がかりを得られるほどの小道があった。二十里ばかりも進んで、よ  
うやく黄蓋峯を越えた。そこは先に見た金峯玉女溝の上に出ていた。  
西へと狭い尾根道を越え、絶頂を目指して進む。

この日は濃い雲が墨を散らし塗ったようであったが、私は山行をや  
めなかった。それがこのころになって山中の霧が少し沈静し、やや開  
けると眼下に彩絹を連ねたり、玉を削ったような、重なる絶壁が見え  
たが、また霧が合わさると大海の中を行くのと同じような状態になっ  
た。

五里で天門峯に至った。その上の方も下の方も、重なる石の崖が続  
いており、路には多く雪が積もっている。ガイドが最も険峻なところ  
を指さして、大鉄梁橋だと教えてくれる。そこから折れて西に三里行  
き、峯を廻って南に下ると登高巖である。いったい幽深さを帯びた岩  
はすつきりとしていないものが多いし、すつきりとした岩は曲がった  
り、ぼんやりとしていたり、それぞれが映え合うという趣を持ったも  
のは少ない。しかしこの岩は、上は重なる崖によりかかり、下は絶壁  
に臨んでいる。また開いた洞窟の門は重なる山々が守っており、左右  
には台や屏風のような峯々が取り巻いている。

岩のあたりに入ると、深く大きな洞窟がある。洞窟は斜めに口を開  
いている。数歩入ってみると、崖が突然途切れて五尺ばかりの穴が出  
現した。足を置く間もないほどである。ガイドは古老の樵夫であるが、

その身の軽さは猿のようで、体を傾けて躍り上がって対岸に飛びつき、  
そこにあつた二本の木の枝を取って、臨時の橋としてくれる。そこを  
渡ると、ドームのような岩が上からのしかかってくる。その中に乳泉  
・丹竈・石榻などの名勝があつた。

登高巖の側らからよじ登ると、またひとつの平台があつた。谷の中  
に突き出していて、三面が空に懸かっているかのような絶壁である。  
ガイドが言うには「ここから下へは登封県城が見え、遠くは箕山や穎  
水が見える」と。しかしこの時は濃霧があたり立ちこめ、全く何も  
見えなかった。巖を離れ、転じて北に二里で白鶴観の址に出た。そこ  
は山の窪地にあつて、険峻なところからは離れていて、平らな場所  
であり、一本の松がすくと立っていて、ひろびろとした清らかな趣が  
あつた。

また北に三里登り、やっと頂上を極めた。三棟からなる真武廟があ  
つた。側らに井戸があつた。水は甚だ清らかで透明である。御井と言  
う。宋の真宗が避暑で訪れた際、掘らせたものだという。

#### 《8》太室山を降る

真武廟で昼食を取った。下山の道筋を問うと、ガイドが言うには「本  
道は万歳峯から麓に至るもので、二十里である。もし西の谷を滑り降  
りれば、路程は半分にできる。けれども路は険峻を極めている」と。  
私はうれしくなった。というのは、「嵩山に奇勝が少ないのは、険峻  
の地が少ないから」と思っていたからだ。（だから険峻の地を得られ  
れば奇勝もまた得られると考えた。）そこで速やかにその道を選び、  
杖をつきながら進むこととした。始めはまだ岩に取り付き、石を踏み、  
密集した藪を開きながら下る程度であつた。まもなく両側から石が迫  
っている間を真っ直ぐ下り始め、振り返って仰ぎ見れば、両側の崖壁

が天を被い塞がつかという様である。これまでは、峯の頂上では霧の滴が雨のように垂れ込めていた。それがここに至って次第に開け、景色もだんだんとその奇異さを表してきた。けれどもずっと、急ですべり易い溝が続いていて、階段のような足がかりになるものはなく、自分でコントロールしながら進めないのはもちろんのこと、立ち止まることもできない。下れば下る程、崖の形勢はいよいよすこいものとなり、ひとつの峡谷を窮めたと思ったら、また次の峡谷が始まっているありさまである。あたりを見回す余裕はなく、一瞬たりとも足を止めることもできない。こんな調子が十里続き、やっと峡谷を抜けて、平地に至って、本道に出た。

#### 《9》太室山―法王寺

無極洞を通り過ぎる。西へ向かって山嶺を越え、草ぼうぼうの中を足を急がせること五里にして、法王寺に至った。寺には金蓮花があり、特産で、他所には無いものである。雨が急に降ってきた。そこで僧人の小屋で雨宿りをする。東の方に石の峯が門のように向かい合っているのが見えるが、新月の度に、その門の間から月が昇るのである。これが、嵩山八景のひとつ「嵩門待月」である。振り返るに、私が出た来た峡谷は、見えている峡谷の上にあたる。今、麓で座って眺めてみると、ただ雲気が入り込んでいるだけのように見え、我が身がそこから降りてきたことなど想像のしようもないほどだ。

◆おそらく法王寺に泊。

〔二十二日〕

#### 《10》太室山南麓―嵩陽宮・嵩福宮・啓母石

山を下り、東に五里で、嵩陽宮の遺蹟に至る。三本の將軍柏だけが

山のように鬱蒼と茂っている。漢代に將軍として封ぜられたものである。最も大きいものは大人七抱え程の太さがあり、中くらいのもは五抱えほど、最も小さいものでも三抱えほどである。將軍柏の北に、三間の室がある、程明道程伊川両先生を祀る。柏の西には昔の建築物の柱が一本残っているが、あらかた地面に埋もれている。宋代の人の題名が書かれているが、判別できるのは、范陽の祖無擇・上谷の寇武仲及び蘇才翁ら數人のみである。柏の西南には雄壯に聳える石碑があり、四面に彫られた龍の彫り物が誠に精巧である。これは唐代のもので、裴迥が文章を撰述し、徐浩が八分体で揮毫したものである。

また東に二里行き、崇福宮の遺蹟を通る。ここはまた万壽宮とも言う。宋代に宰相が業務を行った場所である。

さらにまた東に、啓母石がある。數間の家屋程の大きさである。そばに、砥石のように平らな石がある。

また東に八里進み、中岳廟に帰り着いて昼食を取る。ここでは宋代元代の石碑を鑑賞する。

西に八里で、登封県城に入る。

#### 《11》会善寺から少林寺へ

(県城を抜け) 西に五里進み、小道を西北に行く。

また五里で、会善寺に入る。「茶榜」の碑が寺内の西の小屋にある。元代の刻である。その後ろに、壁の下に倒れている石碑がある。唐の貞元年間の「戒壇記」である。汝州刺史の陸長源が文章を撰述し、河南の陸郢が揮毫したものである。

また西に戒壇の遺蹟がある。残る石材に彫られた彫刻は精巧を極めていたが、いずれもバラバラになって地面に遺棄されいている。

西南に五里行くと、大きな道に出た。

また十里で、郭店に至る。ここから西南に折れば、少林寺への道である。

五里で少林寺に入る。瑞光上人の宿坊に泊まる。

◆少林寺瑞光上人の宿坊に泊。

〔二十三日〕

《12》少林寺から少室山へ

雲も霧もすべて散って消えた。少林寺の正殿に入り、仏を礼賛し終えてから南寨に登ることにした。南寨は、少室山の絶頂で、高さは少室山と同じくらいであるが、尖った峯が高く抜きんでている。「九鼎蓮花」の名を冠されている。少室山の後ろを低く取り巻くのが九乳峯である。うねうねと伸びて東の太室山まで続いている。その北に少林寺がある。

少林寺はとても荘重秀麗であり、庭院には新旧の石碑が荘嚴に立ち並び、全くすばらしい。台の部分の両側に二本の松があり、高く雄大に伸びていて整っており、寸法を測ったかのようなのである。ここから少室山が目の前に横たわっている。振り仰いでも頂上を見ることができない。遊覧に来た者は、壁に向かって立っているようである。そこですぐに思った「少室山は遠景こそ勝る」と。

私は昨晚少林寺に着いたとき、すぐに少室山への道を聞いたところ、誰もが「雪が深く道も途絶えており、行くのはよくない」と言った。確かに一般には、山に登るのは晴朗の時がよい。しかし私が太室山に登ったときは、雲や霧が立ちこめていた。あるいは「山の神が遊客を拒んでいるのであり、この山の雄偉高さを知らせたくなかったのだ、ただ山の半面だけを見せた」ということなのかもしれない。しかし

しも少室山が、その優美さを映えさせることに優れていたならば、少々の雲があつたとしてもその美を損なうことはできないだろう。まして今はとても晴れており、最高のチャンスである。どうして行くのを阻めようか。そこで寺の南から山澗を渡って山に登る。

《13》少室山に登る―二祖庵・煉丹台・大峯・南寨（頂上）

六七里で、二祖庵である。山はここに至って急にすっぱりと土気がなくなり、石だらけとなる。石の崖が下に落ち込んで堅穴を成している。堅穴の middle に泉があり、その水が湧き出して岩石を突き破って飛び、流れ落ちている。ここも亦た「珠簾」と命名されている。私はただ一人で杖をつきながら進んだが、下れば下る程道がなくなり、しばらくしてようやく崖の底にたどり着いた。この岩の高さ大きさは盧巖にはかなわないが、その幽深さ険しさはこちらの方が勝っている。岩の下には青々とした深い淵があり、その四周には積雪が固まっている。

再び岩に登り、煉丹台に至る。台の三面は絶壁をなし、一面だけが青々とした崖よりかかっている。上に亭があり、小有天という。これまで探幽の客で、ここに至ったものは誰一人いない。ここから先は、石の尾根上を、振り仰いで石にかじりつき真つ直ぐに登る。左右両側は万仞もの切り立った崖で、その接合部分が尾根であるが、その幅は一寸ほどもない。手の力が尽きたら足を用い、足の力が尽きたら手を用いと、全身の力を振り絞って、ようやく登ることができた。

七里ほどで、ようやく大峯にたどり着く。大峯の地勢は平らでひろびろとしており、先ほどまで険しい岩がごつごつしていたのが、突然変わって一面が土に被われている。草や荊が茫々と生い茂る中を南に登ること五里ばかりで、ようやく南寨の頂に着く。岩を被っていた土もここでは全く無くなった。

南寨は実は少室山の北頂である。少林寺から言えば、「南の寨」となるということだ。おおよそその頂は、中頃から裂けており、南北二つの部分に横ざまに断裂している。北側の頂は広げた屏風のように、南側の頂は矛戟を並べて対峙するかのよう。両者の間は八尺から一丈ほどしかなく、そこは深い崖谷となつて、断ち切つたように険しい。両側の崖に挟まれた谷底から、一座の山峯が突起して、他の諸峯から高く抜きんでている。これがいわゆる「摘星台」である。少室山のまさに中央である。その絶頂は北側の崖とつかず離れずの形勢で、両者は断絶して渡ることはいかならない。しかし絶頂の下あたりを見下ろしてみると、糸一筋くらいで北の崖とつながっているところがあった。そこで私は衣を脱いでそこよることにし、台の絶頂に登つた。すると南側の頂である九つの峯が目の前に森林のように立ちふさがり、後ろには北側の頂が屏風のように横様に広がり、東西はどこまでも深い堅穴となつていて見下ろしても谷底が見えない。そこへ神仙が乗るような強い風が吹き寄せてきたが、あたかも羽毛を借りて飛び去らんかのようであつた。

#### 《14》少室山を降る―龍潭溝を経て少林寺へ

南寨から東北に転じ、土に被われた山を下ると、にわかには升ほどの大きさの虎の足跡を見つけた。草ぼうぼうの中を更に五六里いくと、茅屋があつた。そこで宿を借り、火をおこして持参した米を炊いてお粥を作つた。三四杯すると、飢えや渴きがずっと消え去つた。庵の僧侶に、龍潭へ至るの道を質問する。

一座の峯を下る。峯の背(尾根)はだんだん狭くなり、土と石とが交互に交じり、其の上を荊が伸びて被っている。そんなところを枝に手を掛けながら進んでいくと、突然一万丈もの崖が出現し、渡れそう

もない。そこで道を転じて登っていく。峯の勢いがうねうねと伸びているところを見上げながら走り下ると、先の所と同じように石の崖が削られている所に出た。行ったり来たりを数里以上も繰り返して、やつと窪地を迂回できた。更に五里で道路に出ると、そこが龍潭溝である。振り仰いで、先に道に迷つた所を眺めてみると、険しい崖や斜めに飛び出した石が万仞ほどの切り立った高い障壁の上にあつた。清流が其の中から吹き出し迫り、鬱蒼と緑が茂る険しい石の壁に降り注いで、色彩豊かな美しい霞を形成している。峡谷は谷川を挟みながら曲がり、両岸に建つ僧侶や道士の庵が、蜂の巣や燕の巣のように見える。おおむね五里ほどで、深くまた緑の濃い一龍潭がある、その深さは丈の単位では測りきれない程である。更に二つの龍潭を経由して、ようやく峡谷を出る。この日も少林寺に泊まる。

#### ◆少林寺に泊。

「二十四日」

#### 《15》少林寺西北の名蹟―初祖庵・初祖洞・甘露台・藏經殿

少林寺から西北に行き、甘露台を通り過ぎ、さらに初祖庵を通り過ぎる。北に四里で、五乳峯に登り、初祖洞を探索する。洞は深さが二丈、広さはそれよりも少し減じる。達磨大師が九年間壁に向かつて座られたところである。洞の門は、下の方では少林寺に臨み、遠く少室山と向かい合っている。ここには泉水がない、だから今は棲む人もいない。

下つて初祖庵に戻る。庵の中に達磨影石が供えてある。石は高さ三尺もなく、表面は白の中に黒い模様があつて、莊嚴な胡僧の立像である。庵の中殿に六祖が手ずから植えられた柏がある、その大きさは

すでに大人三抱えほどもある。石碑によれば、慧能が鉢に入れて広東から持ってきたものだという。台を夾んで立つ二本の松は、少林寺に於けるそれに次ぐものである。少林寺の松はすべて真つ直ぐ高く伸びていて、中岳廟の松が倒れ傾いたり、曲がったりしているのとは異なる。ここ初祖庵の松も、直立して中岳廟のものとは異なる。

庵を下って甘露台に至る。土の丘が盛り上がり、その上に藏経殿がある。台から降りて三層の殿宇を廻る、碑刻があちこちに散在していて、見て回る時間が足りないくらいである。その後は千仏殿である、その雄壮華麗さは比すべきものがないほどである。

殿を出て、瑞光上人の房で昼食を取る。

#### 《16》登封を出て西へ

そして出発し、馬を急がせて登封県からの大道を走る。

#### 〔河南河南府偃師県域〕

轅轅嶺を通り過ぎ、大屯で宿泊とした。

#### ◆大屯に泊。

〔二十五日〕

#### 《17》龍門

#### 〔河南洛陽府洛陽県域〕

西南に五十里行くと、山が突然途切れた。こここそ伊闕である。伊水が南から流れてきて、この下を流れるが、水深は数石の穀物を積んだ船を浮かべられるほどである。伊闕は山が連なっているが、東西に横にまたがるように、伊水の上に木を編んだ橋を架けている。この橋を渡ると、崖が更に険しく聳えている。一座の山がみんな削られて崖状になり、崖いっばいに仏像が彫られている。大きな洞は數十あり、

それぞれの高さは数十丈もある。大きな洞がある外側の崖壁は、そのまま頂上まで続いており、頂上付近にも小さな洞が彫られており、それぞれの洞に、すべて仏が彫られている。僅かな表面でも彫られていないところは無く、眺めるととても数え切れるものではない。洞がある左側に、山から流れ落ちる泉水があり、貯まって四角い池をなし、あふれた水は伊水に流れ入る。山の高さは百丈にも及ばないのに、清流はさらさらと途切れることはない。これこそこの場所が得難いものである点である。ここ伊闕の地は、人車の往來の激しいところで、湖北と河南を結ぶ大道にあたり、西北に行けば関中・陝西へと通じる。私はここから西岳への道を取って行く。

(終)

## 徐霞客遊記卷二上

### 浙遊日記

丙子の年 崇禎九（一九三六）年

#### 【第一部】

##### 《序、旅立ち》

〔南直隸府常州府江陰県域〕

〔九月十九日〕

私がかねてより西南への旅行を志していたが、延び延びになって二年が過ぎてしまった。老いや病いがしのびよりつつあり、このまま先延ばしにすることは難しいと考えた。黄齋齋先生が来てくれて会うのを待っていたが、先生からの音信は全くない。族兄の徐仲昭と別れの挨拶をしようと思うのだが、彼も南からここへやって来ない。そこで昨晩、土瀆莊へ赴いて彼に会った。今日出発する計画だったが、ちょうど杜若叔父が尋ねてきた。一緒に夜中まで酒を酌み交わす。酔いのままに舟に乗り出発する。同行は静聞禪師である。

◆江陰から無錫への船中泊。

##### 《1》蘇州へ

〔南直隸府常州府無錫県域〕

〔二十日〕

空がまだ明けないうちに、無錫県域に着く。明け方くらいに、先ず人をやって王孝先に通知させ、自分は王受時に会いに行ったが、彼は

もう外出していた。そこですぐに王忠紉のところを訪ねる。王忠紉は私を引き留め、ともに酒を酌み交わして午の時に至った。そこへ王孝先がやって来て、ほどなく受時も帰って来た。私はとくに酔っていたが、更にまた王孝先と一緒に王受時のところへ行って酒を酌み交わす。王孝先は顧東署の家族への手紙を私に託す。「自注1」深夜まで飲み、やつと舟に入る。

◆無錫で船中泊。

〔自注1〕当時東署は、蒼悟道で長官をしていた。その手紙は、息子の顧伯昌が寄託したものである。

〔二十一日〕

再び無錫県域に入って王孝先に会い、再び少しばかり酒を酌み交わす。

〔南直隸蘇州府常熟県域〕

〔同 吳県・長州県域〕

午前船を出発させ、暮れには蘇州の虎丘を通り過ぎ、半塘に泊まる。

◆蘇州に泊。

##### 《2》蘇州

〔二十二日〕

早朝に仲昭のために半塘で竹の椅子を買う。

昼過ぎに文文老の息子に会いに行き、あわせて閭門で買い物をする。晩に封門に含暉兄に会いに行く。顔を合わせるやいなや、彼は泣き出し、涙が顔中をおおった。私は思わず憐憫の情に駆られた。思うに、

含暉はこの蘇州の地に隠棲すること十五年になろうとしており、私と仲昭とでしばしば訪ねたものであった。故郷を離れてさすらい、更に家は破産し子どもも死んでしまったのだが、それでもなお詩文を楽しんで悲しみを慰めていた。それがここに至って以前とは異なることになっていった。孫が彼から無心をするこゝやまず、加えて逆らい悖るといふ不孝者となったからである。そこでまた私の小舟まで一緒に戻り、少し酒を酌み交わす。彼は私のために諸楚璵への手紙を書いてくれた。

◆蘇州呉県泊。

〔自注1〕 諸は横州の長官であった。

〔二十三日〕

再び閩門に行き、染色を依頼していた紬と表装を依頼していた書帖を受け取る。

午前中に船を出発させる。

《3》余山へ

東に七十里進み、晩に崑山県に至る。

〔南直隸蘇州府崑山県域〕

また十里あまりで、内村に出、青洋江を南へ下る。(呉淞江への入り口に着き) 江を横切つて渡り、東岸の小さな橋の傍に泊まる。

◆青洋江と呉淞江の合流地点あたりで船中泊。

〔二十四日〕

夜明け前に出発する。

二十里進み、綠葭浜に至ったところで、やっと夜が明ける。

〔南直隸松江府青浦県域〕

正午ごろ、松江府青浦県城を過ぎる。

〔同 華亭県域〕

午後、婁県の余山の北に到着する。そこから静聞とともに上陸し、山中の塔凹の道を選んで南へ進む。最初にひとつの荒れ果てた園庭の側を通り過ぎる。ここは八年前の中秋節に歌舞をしたところである。いわゆる「施子野の別荘」である。この年、子野は美しい園庭に歌手を召し出した。陳眉公は私と一緒にここを訪ね、妖艶な宴を楽しんだのであった。その後三年たないうちに、私は長卿と一緒にここを訪ね、再びその景勝を尋ねようとしたが、施設設備は残っていたが、住む人は風雅を解する人ではなくなっており、つまらないものになってしまっていた。もはや持ち主が替わったかの感があった。〔自注1〕そして今は壊れた台と崩れた垣が残るばかり。三度訪れて、三度その姿を変えている。滄桑の変というが、全くその通りだ。塔凹を越えると、寺があるが、門がもはや無くなっている。ただ大きな鐘が、木々の間に懸けられているばかりである。そして山の南側にあった徐氏の別荘も、持ち主が替わっている。そこで(心配になって) 急いで眉公の頑仙廬へと足を急がせる。眉公は客が来るのを遠くから眺めると、先ずは走つて家の中に逃げ、避けようとした。ところが、人に問うて、客が私であることが分かると、再び家から出てきて、私の手を引いて林に入る。ともに酒を飲み、深夜に至った。私は暇を告げようとしたが、眉公は私のために雞足山の二人の僧侶〔自注2〕に手紙を書いてくれることとなり、もう少し留まるよう、強く求めた。そこで舟を出すことができなかつた。

◆余山泊。

〔自注1〕 実際兵部侍郎の王念生という者の手に渡っていた。

〔自注2〕 名は弘弁と安仁。

〔二十五日〕

早朝、眉公はもう、私のために二人の僧侶への手紙を書いてくれた。更に礼物を私に調べてくれた。また引き留めて朝ご飯を振舞ってくれた。さらに王忠紉の母親の長寿を祝う詩を二枚の紙に書いてくれ、加えて紅香米を使ってお経と仏画を描いて私に贈ってくれた。午前に、やっと出発する。思うに、これまでは東へと迂回する道のりであり、ここからが西へ向かう旅の始まりである。

《4》杭州へ

三里で、仁山を過ぎる。

さらに西北に三里で天馬山を過ぎる。

さらに西に三里で横山を過ぎる。

さらに西に二里で小崑山を過ぎる。

さらに西に三里で柳湖に入り、河を西に横切り、柳寺のそばを掠めて進む。寺は川の中州に立ち、重なりあって高く聳える台閣を誇り、まさしく五層の仏塔であり、層をなす波の光と映え合っている。これもまた水郷の景勝地であるといえよう。

西に慶安橋をくぐる。

十里で章練塘である。〔自注1〕

〔浙江嘉興府嘉善県域〕

さらに西に十里で蔣家灣である。ここは既に嘉興府嘉善県である。夜を押して行こうとしたが、群集する舟を驚かせてしまった。そこで速やかに丁家宅で泊まることとする。〔自注2〕

◆蔣家灣に泊。

〔自注1〕 ここは長洲県の南の境で、ここもまた一万戸の大商業都市である。

〔自注2〕 ここは嘉善県の北に三十五里の地にあつて、とりもなおさず尚書の改亭公の故郷である。

〔二十六日〕

二つの沼沢を過ぎ、十五里で西塘である。ここも亦た大きな鎮である。ここで夜が明けた。

西に十里で下圩蕩である。

さらに南に二つの沼沢を過ぎる。

西に五里で唐母村である、ここで初めて桑があつた。

さらに西南に十三里で、王江涇である、この市はたいそう盛んである。

ここから真つ直ぐ西に二十里ほど進み、(一旦蘇州府呉県に入って) 瀾溪に出る。

(瀾溪を) 西南に十里進むと前馬頭である。

さらに十里で師姑橋である。

さらに八里行くが、まだ太陽は沈んではない。しかしここから烏鎮まではまだ二十里はある。盗賊に遇うのを警戒し、十八里橋の北の呉店村浜に泊まることとする。〔自注1〕

◆呉店に泊。

〔自注1〕 ここは呉江県に属す。

〔二十七日〕

夜明けに出発する。

〔浙江嘉興府桐鄉縣域〕

二十里で烏鎮に至る。舟を降り、町に入って程尚甫を訪ねる。(ところが)彼はちよと虎埠に遊覧に出かけていて留守であり、二人の息子が出てきて挨拶してくれる。持参した金銭を渡し、この数年間に借りていた書籍代を返した。かくして出発した。

〔浙江湖州府歸安縣域〕

西南に十八里で、連市である。

さらに十八里で、寒山橋である。

〔浙江湖州府德清縣域〕

さらに十八里で、新市である。

さらに十五里で、曹村である。まだ晩には間があったが、泊まることとした。

◆曹村に泊。

〔二十八日〕

〔浙江杭州府仁和縣域〕

南に二十五里行くと、杭州府仁和縣の唐樓に至る。風向きが舟行に便であった。

五十里で、北新関に入る。

さらに七里で錢塘縣の櫻木場に至る。わずかに昼を過ぎたところである。私は召使いを遣って杭州城に入城させ、曹木上君のところへ行って黄石翁(道周)の行跡を尋ねさせた。しかし彼はまだ南から来ていなかった。当時木上自身も、南京に国子監として出ており、

石翁の行跡を問うすべもなかった。そこで船中で手紙を書いて、曹木上の家に投じ、返事は舟に返してもらおう手立てを取った。それはこの後、私の行く先は遙か遠くとなり、手紙を届けてもらうのも難しくなるからである。

晩に昭慶寺を訪問し、舟に戻って泊まった。

◆杭州に泊。

《5》杭州

〔二十九日〕

仲昭兄と陳木叔に手紙を書いた。静聞君は浄慈寺と吳山に遊びに行つた。この日も、舟に泊まった。

◆杭州に泊。

〔三十日〕

早朝に城内に入り、手紙を自宅へ届けてくれる人を傭い、寄託した。お昼に、一旦船に戻り、荷物のうち重たくかさばるもの(余山で陳眉公から贈られた仏画などであろうか)を選び分け、自宅へ送る手配をする。私はといえば、静聞君とともに西湖を渡り、湧金門から城内に入つて銅の炊飯俱(鍋)や飲料水を入れる竹筒などの旅の諸道具を購入した。

晩になり、朝天門から昭慶寺まで歩いて戻り、そこで入浴して泊まることとする。

この日はまた湛融師から十両の銀を借り、旅費の足しとすることができた。

◆杭州に泊。

〔十月一日〕

天氣が最高に明朗で爽快であるが、西北の風がとても厳しい。

私は静聞君と一緒に寶石山の頂に登った。山頂に巨石が積み重なっているものがある、これが落星石である。峯の西側の岩山が最も険しく聳えている。南には西湖の湖面の光を望み、北には阜亭や徳清県の諸山を眺め、東には杭州城内から立ち上るたくさんの人家の烟を見る。すべてがはつきりと明らかに見える。

山を五里ほど下り、岳飛の墓を過ぎる。

さらに（西に）十里で飛來峯に到る。市街で昼食を取り、その後峯下の洞窟群を巡る。

おおよそ飛來峯は楓木嶺から東に延びてきて、靈隱寺の前で屏風のように並び立ち、この場所ですべて石がむき出しになっている。この石には皆穴が空いており、表玉のように照り輝いている。三つの洞窟が並んでいる。それらの洞はともに混じり合って区別が付かなくなっており、奥深さを表していることはない。かつては楊和尚の彫刻によって破壊され、いまや乞食どもの喧噪に汚されている。しかしちやうどこの時だけは、乞食どもが静かにしていた。山間に見える石はさわやかで、猥雑な喧噪も全く聞こえない。あたかも青山がその内部をきれいに洗い、蒼天がその外側を洗い流したようであった。私は洞の下を経めぐっては、山の頂に登った。洞頂の靈妙な姿の石は天に向かつて集まるように屹立し、奇怪な格好の樹木は風に吹かれてその姿を動かしている。洞頂に座って辺りを眺めれば、かの西王母の住まいだという群玉山にも劣らない趣であった。〔自注一〕

山を下って谷川を渡ると靈隱寺である。一人の老僧がいて、法衣を

まとって台の上に黙座し、空を仰いで太陽の光を浴びながら、長い間一度も瞬かないでいる。

次いで方輪殿に入る。殿の東に新しく羅漢殿を建築しているが、五百羅漢のうち半分しかできていない。おそらく残りは西側に設ける羅漢殿に作るであろう。

ちやうどこの日は、美しいご婦人たちの集団が二三、相次いでこの寺を訪問していた。ただよってくる女性の香がまことに艶麗であった。このご婦人がたの来訪と、先にみた老僧が太陽の光を浴びながら黙座し続けている姿とは、どちらも滅多に出会えないものである。そこでしばらくこの寺でぐずぐずと過ごす。

午後、包圍から西に行つて楓樹嶺に登る。そこを下つて上天竺寺に到り、さらに中・下の二つの天竺寺に出る。再び下天竺寺の後ろに順い、西に後山に沿つて進み、「三生石」のところへ到る。この石は、ただ姿がごつごつしているだけではなく、表面が清く潤っていてすばらしい。この場所は、靈隱寺の向かいの屏風の様な山峯の南麓で、その嶺はここから東に延びて飛來峯で終わつているところであった。優れた景勝を独占するものである。

下天竺寺から五里で毛家歩に出、そこから湖を渡る。太陽は既に西の山に落ち、昭慶寺に帰り着いたときはすっかり宵闇に包まれていた。

◆杭州に泊。

〔自注一〕飛來峯はかつては靈隱寺に所属していたが、今は張某の所有となつている。

《6》臨安を経て洞山へ

〔二日〕

午前に櫻木場を出発し、(北に)五里で観音関に出る。

(ここから)西に十里進むと女兒橋である。

さらに十里進むと老人舗である。

〔浙江杭州府余杭県域〕

さらに五里で余杭県の倉前である。

さらに十里進む、余杭溪の南に泊することとする。何樸庵の家を訪ねたところ、彼は一日違いで、杭州城に出かけたところのことであった。

◆余杭県域に泊。

〔三日〕

余杭県城の南門橋で、担夫を傭う。西門から城外へ出て、苕溪の北岸沿いに(西へ)進む。

十五里で丁橋舗である。

さらに十里進む、馬橋を渡ると、余杭県と臨安県との境界である。

その北は、徑山に達する。

〔浙江杭州府臨安県域〕

さらに二里で、臨安県の青山である。市街はとても賑やかである。

溪流と山とが次第に近づき、また二つの尖った峯が向かい合って聳えている。〔自注1〕

さらに十五里で、再び山が開け、十錦亭に到る。亭の北から来て西に行く一路は、於潜県から徽州へ行く道である。亭の南を通って西に行く一路は、つまり臨安県城への道である。

亭の西から南へまた一里で、ひとつの石橋が溪流の上に跨っていた。長橋という。

橋を渡り、南にまた一里で、臨安県城の東関に入る。

そのまま西関を出ると、〔自注2〕その外は呂家巷である。その市街は臨安県城よりも却って盛んである。

さらに二里で皇潭である。その市街地は呂家巷と同じくらいである。

その西で道が南北に分かれる。北への道はこれもまた於潜県への道で、南の道が新城県へ到る道である。

(そのどちらも選択せず)ほどなく再び山なりに西南に向かって進む。

さらに八里で高坎である。ここからやつと筏を浮かべて通れる水流がある。

さらに三里で南に曲がって梟柳塢に入り、再び山間に入る。

五里で下圩橋である。橋の南から溪流を遡って西へ上がる。

二里で全張村である。村中の人の姓が張の家族である。分水県に向かう者は、新嶺を脇道とし、全張の道を回り道とする。私が聞いたところ、新嶺の道は狭く、泊まる所もない。そこで結局全張の白玉庵に泊まることとする。庵主の意という僧侶は余杭県の人であった。私が旅遊を好んでいると聞き、深夜であるにも関わらず、灯火をともし、お茶を沸かしてくれ、私に彼が日本に旅遊したときのことを語ってくれた。そのことはとても詳細であった。

◆全張に泊。

〔自注1〕ひとつは紫薇峯で、もうひとつは大山である。

〔自注2〕臨安県は城壁がとても低く、県署もぼろぼろである。

〔四日〕

〔その一〕

夜明けに食事を作り、黎明に西に出発する。

二里で橋を過ぎる。

そこを南に折れ、さらにまた六里で乾塢嶺を上っていく。この山路は甚だ平坦である。思うに、於潜県の山々は西からやってくる山脈である。東西には高峻な山嶺があるが、ただこのあたりは峡谷となって低くなっている。山の背を越えるあたりも一丈ばかりの中しかないが、南北両面には棚田が重なりあつて広がっており、水田を形成している。ここから北への流れは下圩橋に到り、青山鎮から茗溪に注ぐ。南への流れは沙岩に到り、新城県から錢塘江に注ぐ。こんな低い丘が分水嶺となつてゐると思ひもよらなかつた。この山脈は更に東に進み、ついには天に向かつて突き立つような、五尖山となる。「自注1」

五尖山の西麓沿いに進み、さらに五里で唐家橋を過ぎると、新城県の北の境域である。

#### 〔浙江杭州府新城県域〕

#### 《7》洞山

白い石の崖が南に壁のように立ちはだかつており、そこで川の流れに沿つて西南に進む。

五里で華龍橋である。西の塢から流れてきてここで合流する川がある。

橋を渡り、南へ小さな峠を一つ越える。

二里で沙岩に到る。前に石橋がひとつあり、川を跨いでいる。趙安橋という。ここを渡れば、新城へ向かう道である。

(しかし渡らず) 橋の北を西に、小川を遡つて進む。三九山の北麓に沿つて進み、後葉塢に入る。「三九」という名は、山の東側を趙安橋から南へ下ると朱村に至り、北側を趙安橋から西南に行けば白粉牆に至り、南側を白粉牆から東南に行けば朱村に至る。この三面の道のりが、いずれも九里だからの命名である。

後葉塢より九里で白粉牆に至る。このあたりは三九山から北へ延びた山嶺である。ただその山嶺もとても平坦である。東の流れは後葉塢から趙安橋に出、西の流れは李王橋から朱村に流れ、そこで合流する。これも「三九」という山名の由来であり、水流が山をあますところなく廻っているからである。

白粉牆の西に二里で羅村橋がある。北から流れてくる川がある。枝分かれして北へ向かう道もある、これも新城県へ至る道である。

川沿いに南に一里程行くと、鉢孟橋である。西の龍門龕から流れてくる川がある。龕には四仙傳道嶺があり、鉢孟橋の西に四里の所に在る。そこが於潜県との境である。

橋の北から東に転じ、一里ほどで南に折れる。ここは東が三九山、西が洞山で、円形の山塢を形成しており、東西にはごつごつした岩山が見える。その石の黒さは漆を塗つたようで、その間に赤い楓や黄色い銀杏、さらに緑なす竹や松がまじり、彩絹のようである。その中で岩壁から浸みだした滝が、雪のように白くなり、石を洗つて落ちていく。現在は水流が乏しく滞留するほどのものはないが、黒い崖や白い溪谷が、あちこちに練り絹を懸けたように見える。私はすばらしい景勝であると感心した。

二里で李王橋を渡る。ついに洞山の東麓に達した。急いで荷物を呉氏の先祖を祭る祠に預ける。召使いに食事のできる店を探させたが見つかからない。すると二人の呉姓の人達が来て、ひとりはお食事のしたくをしてくれ、もうひとりはお灯火を用意して洞窟に案内しようとしてくられた。私は魚公が書いた扇をお返しにプレゼントした。洞山は、龍門龕の南からうねうねと東に伸びたもの。その石質は角が尖り、重なりあう紋がある。東南の山の半ばにふたつの洞が口を開けていて、そこ

から李王橋の下を眺めることができる。私はそのまま静聞君と一緒に西に向かって山を登った。

〔自注1〕五尖山に東北が、新嶺である。

## 〔その二〕

小さな溪流に沿って登る。その石は峡谷に蹲ったり、崖から飛び出してきているかのように、そこに清流が注ぎ、せせらぎの音を立てている。溪流の兩岸に踊り出でている石片はまるで田畑の畦のようで、斜めに立っているものは畦のようで、突起しているものは平らな台のようである。竹が石の中から生えていて、枝は石の上に聳えているのに、根の部分は見えない。その幹は岩の頂を覆はんばかりで、隙間も見えないほどである。

（しばらく見物した後）再び登攀を開始すると、忽然として大きな岩が溪流を塞ぐように立っている。まっすぐすつきりと独立していて、表面にある微細な石紋は風に吹かれて波打つ縮緬のようである。靈妙奇異の極みである。

（しばらく鑑賞した後）再び登れば、丈の長い竹藪の中に、新築の睥陽廟があった。雪峯をまつる石室がそこにあった。〔自注1〕庵の後ろは切り立った岩壁が空に向かい、屏風のように重なりあつて青々と聳えている。

その屏風の南が明洞である。楼閣の軒がそこで開いているかのようで、外には五本の脊柱が突き立っている。まさに四明山の「分窗」のようである。ただし、四明山のものは石の色がやや劣っており、この石柱が巻くようにまがっているのには及ばない。その中の一本は、上に伸びているが軒の庇には至っておらず、庇からも石が垂れている

が下の柱までは至っていない。上下にあい対していて、その隙間は二十雫以下しかない。石柱のそばに一本の樹木が有り、すくくと高く生えている。上の洞窟の庇にぶつかつたところですぐに外に曲がっている。その木の緑は巖を覆い、黒い岩肌と映え合つて明らかである。

その南に、幽洞がある。この二洞は並んで口を開けており、その中間の岩肌は、桃の花のような淡い紅色をしている。洞口は高いところにあり、その入り口は閘門が空に向かって傾いているかのよう。洞内に向けて呼声を発すると、ずっと響いていてなかなか消えない。おそらくその中は空洞で、底なしに続いているのであろう。

（さらに進み）二十丈も行かないうちに、たちまち北へ南へと一転している。

北は乾いた洞がある。石段を登るが、まるで楼閣を踏み上げるかのようである。三十丈で、また南に転じ、一軒の小さな楼閣があつた。奥深い静けさを感じる。

南は水を湛えた洞がある。水はひとめぐりすると、すぐに仙人の水田をなし、畦が何層にも整っている。水が水田に満ち満ちており、外に漏れ出ることもなく、かつ干上がることもない。人は畦を踏んで曲がりながら洞に入る。およそ二十丈進むと、忽然として滔々とした水音が聞こえる。小さな門をくぐつて進むと、一本の小川が南から流れきて、ここに至つて谷を突き破つて流れ落ちているのが見える。ぐるぐる廻つて落ちていて、底が見えず、ただ水音を聞くのみである。溪流に沿つて南に進み、また峡谷をひとつ越える。先には小さな門をくぐつて入つたので、（さらに進むためには）水の中を通つて行かない、流れに入つて漕いでいく。

また三十丈ほどで、溪流の中に鍾乳石が生えており、蓮華のように倒れかかり、その先端が象の鼻のように曲がっている。そこは平らな砂地と狭い門口とが次々と連続し、狭まったと思ったら広がっている。それはちょうど荆溪の白鶴洞のようだ。ただし、白鶴洞は山の麓に潜んでいるので、水を得るのも容易だろう。しかしこの洞窟は、山の頂に高く口を開けているものであり、水がたくさんあるのは本当に不思議なことである。

また進むと、洞窟はおしまいになっていた。そこには水が集まり湛えられていたが、それほど深くはなかった。また集まっている水がどこから来て、どこへ流れ落ちているのかは分からない。

洞窟を出ると、半日の間に何十年もたったような感じがした。

〔自注1〕そこはまた靈隠庵とも称されている。

### 〔その三〕

洞山を下り、呉氏の祠で食事を取る。

さらに南から来ている溪流を遡り、二里で太平橋に至る。この橋の西側には高姓の人が住み、東側には呉姓の人が住んでいる。彼らもまた李王橋の呉姓の人々の一派であろう。ここにもまた先祖を祭る祠があり、とても広々としている。

その頃は、まだ太陽が天空にあったが、担夫の家が近くで、帰って休みたいというし、馬嶺あたりには宿泊できるところもなさそうなので、その祠に止宿することとする。

この日は、進んだ距離はわずか三十五里であったが、遊覧した二つの洞窟は、どちらも予定外のもので（すばらしいもので）あった。誠に幸いなことであった。

晩は風が吼えるように吹き荒れて雲が垂れ込めていたが、明け方になって風はやんだ。

◆太平橋の祠に泊。

### 《8》桐廬を経て蘭溪へ

〔五日〕

鶏が二度目に時を告げる頃、召使いを起こし食事を作らせる。食事ができると、自宅に帰っていた担夫もやって来た。ところが、これまですずと随行していた王二という担夫は逃亡してしまっていた。

朝食ののち、あれこれ手を尽くして他の担夫を捜し求め、ずいぶん時間を費やしてからやっと出発する。

南に二里で、馬嶺を上る。一里ばかりで峠に達する。この嶺以北は新城県に属する。川の水も新城県へ流れる。馬嶺の南は於潜県である。呉城はここから西北五十里の地にある。川の水は応渚埠から分水県に流れる。

### 〔浙江杭州府於潜県域〕

馬嶺を下り、南に二里で内楮村塢である。

また一里で外楮村塢である。ここから南は家々は楮を生業としている。

山塢に沿って西南に七里進み、兌口橋を過ぎる。岐路が南北に分かれている。北は於潜県に達する。四十里くらいだろう。南は応渚埠に至る。十八里である。兌口橋を流れる水は、北の於潜県から流れてきて、馬嶺の水は東から流れてきて、ここで合流して南に流れる。道もこの流れに沿う。

八里で板橋を過ぎる。橋の下を流れる水は西の塢から来て、前面の

川と合流する。この川を遡って西に行けば、その道は於潜県から昌化県に達する。

また南に五里進むと保安坪である。

また一里で玉潤橋である。「自注1」ここで山がおおいに開けた。

また東に二里で、唐家拱で停留する。この地は応渚埠の北二里にある。もとよりここには市や店はない。担夫が言うには、応渚埠から桐廬に下る船は、北へまがってここを通るとのこと。そこで溪流の岸に停留したのである。しばらくすると桐廬への船に出会えた。思うに応渚埠は於潜県の南の端で、川の南はもう分水県である。於潜県の川が北の方から玉潤橋を経由して（南下し）、昌化県の川が西の麻汊埠より流れてきて、どちらも応渚埠で合流する。かくしてここで水勢が盛んになるのである。しかし玉潤橋より上流は（水量が少なく）船を浮かべるのに耐えない。一方麻汊埠より上流は、小舟でそのまま昌化県に遡れる。於潜県の川は昌化県のそれには及ばないのである。時に太陽が既に南中しているが、食材を買い求める店がない。（少し上流の）応渚埠で買い求めたいと思ったが、船は待ってくれない。そこで（食材はあきらめ昼食抜きとし）船とともに行くこととした。

船に乗り、東南に十里進むと、嚴州府の分水県である。

#### 「杭州嚴州府分水県域」

県城は川の西岸にある。分水県の地は、川は東南に流れる一水があるのみである。県城の西は山は開けてはいるものの、陸路だけであり、八十里で淳安県に達する。私ははじめはこの道をたどろうと思っていたのだが、召使（担夫）の王が逃げてしまったため、陸行は不便である。そこでやむなく水行を選び、逆の方向の東南へと進む。

分水県を東南に二十里で頭鋪である。

#### 「浙江嚴州府桐廬県域」

また十里で焦山である。店舗や市場が賑やかである。巳に日が暮れたが、食材を買うことができない。そこで水主の残りを借り、飯を炊く。

水主は流れに沿って夜も櫂をこぐ。

五十里で桐廬県城の旧県に達する。夜も半ばを過ぎていた。

◆旧県に泊。

#### 【第二部】遊金華山日記

#### 《9》蘭溪

【六日】

鶏が二度目に時を告げるころ、船を出す。明け方に富春江へ出る。

ここはもう桐廬県城のエリアである。

従僕を起こして食材を買いに行かせ、この船に載せる。

十五里で灘上に至る。穀物を運ぶ船が百艘あまりもあり、荷物を登載するのを待っている。そのため私が乗った船も停泊せざるを得ない。速やかに食事を求めて食べる。食べ終わると、別の船を求め、得られたのでそちらに乗り移って行く。時に巳に午前になっている。

また三里で、清私口を過ぎる。

また三里で、七里籠に入る。東北の風がとても航行に便がある。うたた寝をしていたら、嚴子陵釣台を通り過ぎていた。

#### 「浙江嚴州府建德県域」

四十里で、建德県の烏石関である。

また十里で、建德県城の東関の宿屋に宿泊する。

◆建德県城に泊。

〔七日〕

霧がたちこめていて何も見えない。水主が食事を終えてから出発する。

午前に再び晴れる。

七十里で香頭に至り、ここで暮れてくる。〔自注1〕

月が明るく、風も便がある。

〔浙江金華府蘭溪県域〕

二十里で、金華府の蘭溪県に宿泊する。

◆蘭溪県に泊。

〔自注1〕香頭は山の北側にある大集落である。張と葉という姓のもので、高官になるものがたくさんいる。

〔八日〕

早朝に浮き橋に上陸する。橋の内外にたくさんさんの船が鱗のように並んでいる。(西の)衢州からの朝廷の軍隊が到着しようとしており、浮き橋を封鎖して船を繋ぎ留め、通行させないようにしていたのであった。そこで荷物を顧従者にまかせて南門の旅館で保管させ、私は静聞君とともに、金華山の三洞への遊覧をしようと考えた。

思うに、金華の山々は、東西に横たわって聳え、金華府城はその南にあつて、浦江県がその北にある。山脈の西の端は蘭溪県で、東の端は義烏県である。婺水という川が東南の永康県から流れてきて、金華市の南門を経由して西北に向かい、蘭溪に至って衢江と合流している。

私ははじめ、陸路で金華山へ行こうと考えていたが、婺水を遡って東へ向かっている船があるのを見た。そこでそれに乗って行くことに

した。

川は砂地の岸辺の間を流れ、周囲の山々は遠景である。赤い楓の花が粗密様々に咲き乱れ、錦のカーテンを集めたり彩霞を裁断したかのようである。それが重なる山々に映えて、まことにすばらしい風景である。その前に金華山が天に向かって聳え立ち、あたかも屏風を背負っているかのようである。そして私たちは、それらに背を向けて東南に進んだ。

(そのうちに、同舟の人に)「三洞はどこにあるのですか」と質問すると、「ここから北にあります」という答えが返ってきた。

(重ねて)「金華府城はどこにあるのですか」と問うと、「南にあります」というではないか。

そこではじめて、三洞に行くには必ずしも金華府城まで行く必要はなく、(蘭溪県から)半日も陸行すれば、(金華府城への)道の半ばで山に行けた、ということが分かった。しかしすでに船に乗ってしまったので、どうしようもない。

四十五里で小さな溪流に至った。已に日も暮れ、月が洗ったかのようには輝いている。

さらに十五里行つて陸にあがる。下馬頭の旅館に投宿しようとしたら、深夜であることから門を閉ざして入れてくれない。(ちやうどそこへ)王という姓の人〔自注1〕が、月明かりの中を家に帰ろうとしているのに行き会った。旅人(つまり徐霞客ら)が泊まる場所がないのを見て、金華府城の西門まで連れて行ってくれて、一緒に旅館に泊まらせてくれた。

◆金華府城に泊。

〔自注1〕号は敬川といい、高橋埠の人であった。

「九日」

## 《10》金華山

### 金華山「その一」―鹿田寺まで

早朝に起きる。空が清らかでまるで洗ったかのようなのである。王敬川と一緒に金華府城の西門から城に入る。金華県の役所の前を通り過ぎる。そこは人々がまるで川の水のようにたくさん流れている。どうやら県の長官が無くなったばかりだからのようだ。「自注1」

さらに東に進み、蘇坊嶺に登る。この嶺はなはだ平坦で、市街地に挟まれている。東に嶺を下れば、四牌坊である。蘇坊からここまで来ると、商店がたいへん賑やかである。蘇坊嶺を南に行けば、金華府の役所である。

王敬川と一緒に歙人のやっている麵食堂に入る。麵がとてもおいしい。そこで一人で二人分を平らげた。

そして(再び)西門から城外へ出る。そのまま城壁沿いに西北へ進む。王敬川はなお残惜しげにしてしばらく同行したが、やがて別れた。

まもなく低い丘を登り降りしながら進み、十里で羅店に至る。

「三洞はどこにあるのですか」と問う。

すると「前に傾いた尖峯が西側に見えてきたら、その東側にあります」と言う。

(よく分からなかった)土地の人をつかまえて詳しく聞いてみた。

(すると)「金華山の中程が鹿田寺である。そこから山脈が東に伸びたものが南に曲がって芙蓉峯となる、これが尖峯です。金華府内の龍脈の起点となります。(鹿田寺から)西の伸びた山脈群が南に集まったものが三洞となります。三洞の西は、すぐに蘭溪との境界です」と

答える。

初めは三洞を経由して蘭溪に取って返ろうかと思ったが、ここから東にも他によい景勝があるのではないかと思ひ、芙蓉峯へと向かって進むことにする。

羅店から東北に五里で智者寺である。そこは芙蓉峯の西にあたり、金華山南麓を代表する寺院である。(しかし)今は荒れ果てている。その中で一殿の中に石碑がひとつ残っている。これは陸游が智者大師のためにこの寺を再建したことを記したものであった。その碑文は陸游の揮毫になるものであった。石碑の背には陸游と智者大師の書簡数編を刻んでいた。碑文は楷書で、書簡は行書であった。どちらも趣があるすばらしいものである。おいしいことには職人がいないため、拓本一通を得て楽しむとすることができない。

智者寺の東には芙蓉庵があり、そこから芙蓉峯に登る道がある。私は、芙蓉峯は確かに円錐形で面白いが、その高さは北山の半分にも及ばない、(だから登るまでもない)と考えた。そこでこの峯は登らないことにした。かくして智者寺から西北へ、山路を登る。峯や窪地を登り降りしていると、五里で清景庵に至った。庵僧の道修が引き留めて食事を振る舞ってくれる。その後、私を引率して北の窪地から楊家山に登る。楊家山は北山が南に伸びているその第二層である。さらに南に下れば芙蓉峯で、これが第三層である。

楊家山の西側を廻り、二つの山が挟んでいる間を通って北に向かう。「自注2」だいたい七里ほどで、北山が後ろに聳え、楊家山が前面に配置され、その中間に窪地が開ける。そこには巨石が横たわり、空に聳える。その岩を重ねて台が作られており、その上には竹が植えられ房が設けられている。朱開府の別荘であった。「自注3」

その東北は石がさらに壘壘と重なり、大きいものは獅子や象くらいもあり、小さいものでも鹿や豚くらいである。いずれも草むらの中に蹲っている。これが石浪である。あの黄初平が石を叱りつけて羊に変えた場所であるが、どういうわけか、また石に変化している。

石の上が鹿田寺である。玉女が鹿を駆使して耕地を耕したので、この名がある。耕地の前に石がある。その形が似ていることから「馴鹿石」という。

「自注1」長官は、歙県出身で項士龍という人であり、辛未の進士であった。五日間の間に、士龍本人の他、彼の父親と彼の三人の息子が相次いで痢病でなくなった。

「自注2」東が楊家山で、山の辺りに民家が数十軒ある。西が白望山で、仙人が鹿を眺めたと伝えるところである。

「自注3」朱の名は大典である。

### 金華山「その二」―鹿田寺から金華山の奥を極める

この寺（鹿田寺）はその来歴は古いが、後に宦官達によってだんだんと食い物にされてしまった。しかし金華府知事の張朝瑞「自注1」が、殿宇を創建し、石の羊の群れを保全した。屠赤水の手になる「遊紀」があり、殿宇の中の石碑に刻まれている。

私がそこに到着したのは、已に午後であった。聞いてみると、鬪鶏巖がその東にあるとのことだった。そこですぐさま、静聞君と一緒に、二里東に進み山橋を渡る。山橋を東に下ると、二つの峯に挟まれているところに出た。小川がその中から流れ出ている。峯の石はすべて切れ切れになっていて、空へ飛び出し、小川に向かって走っているかのようであり、その形は鶏のトサカが怒起しているのに似ている。溪流

がその下へと走り流れ落ちていて、これもまた一景勝である。

鬪鶏巖から東に数里下ると、赤松宮である。ここを下ると金華府城の東門へと連なる道である。思うに芙蓉峯の東の谷に位置するのだろうか。

鬪鶏巖の上に、趙という姓の樵夫が住んでいた。彼は北山の頂を指さして、「北山の頂に基盤石がある。石の後ろに『西玉壺』があり、石から水がそこに注いでいる。日照りの時にその水を取って雨乞いをするれば、とても靈験がある」という。

時に日は已に傾いているが、静聞君とともに急いで草むらを掻き分けて登る。しばらく登ると、不意に呼びかける声が聞こえた。趙樵夫が、私たちが間違って西寄りになっているのを見て、東を指さして深い草むらの中を誘導しているのである。

まっすぐに約二里ばかりで、やっと石の群れのあたりに着く。石の前に平らな台がある。後ろには岩が積み重なって聳えている。その中に一間ほどの小屋があり、仙人の塑像が彫られている。これがこの山の主である。塑像の後ろの石室の下に盆ほどの水たまりがある。おそらくこれが雨乞いの水であろう。そうしてその上の方には小川が流れて、清らかに山頂から下っている。

時に太陽は沈もうとしていた。そこで（急いで）その流れを遡って再び進むと、門のように石が並んでいるところがあり、そこから水が注ぎ出でていた。門の上流にさらに浅く平坦な溝があった。これがそが西玉壺であろう。

聞くところによると、ここから東にさらに東玉壺があり、どちらも山の頭から水を出して谷をなしていると。西玉壺からの水は、南に下

るものは棋盤石を経て三洞に浸潤していき、北に下るものは裏水源を経て蘭溪の北に出る。東玉壺の水は、南に下るものは赤松宮を経て金華府城に出、東に下るものは義烏県に出、北に下るものは浦江県に出る。おおむねここが、金華府の分水嶺であるという。

玉壺は昔は盤泉とも呼ばれていた。その上に先が分かれて聳えているものを、今は三望尖と称している。飾って言う場合は、金星峯とするが、総称すれば北山である。やつと峯の先端に至れば、ちょうど落日が深い川に沈むところであった。峯の下を眺めやれば、一筋の水が残光を受けて光り、滔々と水を湛えて姿を一定にしていなぬものが見える。思うに衢江が西から流れてきてひとたび曲がっているところが、そこなのであろう。

夕陽は已に沈み、次いで月が輝いてくる。天地の間の全ての音は消え去り、紺碧の世界は洗ったかのようだ。まことにこの玉壺は人を骨髄から洗浄するものであり、私たち二人は、身体と影とが別物であることを覚るものであった。思うに下界の世界はこせこせしていて、誰がこのような清らかな光りの輝きを理解してようか。仮に高殿に登って長く吟じたり、うま酒を用意して大江を眺めたりしたとしても、われわれがこうして万山の絶頂を踏み、道を窮め尽くしていつて、塵埃にまみれた世俗世界から遠く離れることが、天と地との間ほどもあることは、比べものにならないのである。たとえ山の精霊や怪獣が、群れをなして近づいて来たとしても、恐るるに足りない。ましてや静寂の中、万物が動かない中で、天空・宇宙とともに遊ぶのであれば、その愉しみはまたとないものである。

しばらく彷徨し、やがて二里下り、盤石に至る。

さらに草藪の中を二里下り、鬮鷄巖に至る。趙樵夫が私たちの声を

聞きつけ、戸を開けて出てきた。そして「自分がこの山に住んでから、あなた方のような方はいませんでしたよ」と言う。

さらにまた西に一里上って山橋に至り、さらに西に二里で鹿田寺に至る。寺僧の瑞峯と従聞が、私たちが中々帰ってこないもので、二手に分かれて遠くから呼びかけてくれている。その声が、谷を震わせていた。

鹿田寺に入り、入浴して就寝する。

〔自注1〕海州の人

〔十日〕

### 金華山「その三」金華三洞遊へ

鶏が時を告げるころ起きて朝食を摂る。空には已に曙光がさしている。鹿田寺の僧の瑞峯が私たちのために数本の松明を用意してくれて、寺僧の従聞に担がせて同行するよう手配してくれた。

朱荘の後ろから西に一里行き、北に山路を登る。道は甚だ険峻であるが、一里ほどで、尖った岩が峯の頂で突出しているのがあった。その石の辺りから北山に沿って東に行けば、玉壺に到達できる（これは昨日の道）。（今日は）石の辺りから峯を越えて北に行く。そこが朝真洞である。

洞の入り口は高い峯の上であり、西に向かって高く曲がっている。下は深い谷に臨み、その谷の中には住居がぐるっと取り巻いている。あの秦を避けた桃源郷の人々かと疑うが、どこからやって来たのかは分からない。これを問えば、双龍洞の外に住んでいる人達だという。

### 金華山「その四」——金華山と三洞の概要

思うに、北山は玉壺から西に伸び、その中頃の支脈はここで一旦終わる。その後さらにまた一支脈を生み、西に進んで蘭溪まで走る。

後に生じた支脈が幾層かをなしており、第一の層が廻って龍洞場となり、第二の層が廻って講堂場となり、第三の層が廻って玲瓏巖場となる。金華府の境域はここで終わりである。

玲瓏巖の西は、また廻って紐杭となるが、ここは蘭溪県の東の境である。その第二層が廻って白杭となり、第三の層が廻って水源洞となる。ここに至って、高い崖や深い谷といったダイナミックな地形も終わりとなる。

さてその後を生じた支脈だが、層をなして中頃の支脈を取り巻いている。そこで中頃の支脈は西で止められて、どっと下へ崩れ落ちていくことになる。陥った第一層に朝真洞が口を開ける。その洞窟は高いところにあつて、洞底も乾いている。陥った第二層に冰壺洞が窪んでいる。この洞窟は縦に奥深く、滝がその中に懸かっている。陥った第三層に双龍洞が穴を開いている。この洞窟は変化に富んで幻影的で、水が水平に流れている。これがいわゆる「金華三洞」である。

三洞ともいわずれも口を西に向け、重なりあうように層をなしている。それぞれの距離は一里ばかりであるが、山の勢いが険峻なため、俯瞰して一度に目に収めることはできない。しかし洞を流れる水は、上の洞から下の洞へ、層をなして下っている。

中頃起きる支脈が尽きたところで、南へ下る支脈が生じていて白望山となる。その東の楊家山ともども、北山の前に並んでいる。鹿田の門をなしている。

## 金華山「その五」―朝真洞

朝真洞の門口は広く開けており、その内は次第に下に下がっている。松明を手にして深く入っていくと、左側に脇部屋のような小さな穴がある。そのままにぐねぐねと進む。穴の行き止まりに水がしたたり落ちているところがある。けれども岩の隙間の底部は乾いている。水がどこへ流れていつているのかは分からない。

脇室の穴を戻り、洞窟本体を底まで探求しようとする。そこは巨大な岩石が高低様々に聳えていて、上を振り上げれば益々高くなり、下を見ればどんどん深くなっている。石の隙間を登ったり降ったりして、再び巨大な脇室に出た。すると忽然と、一筋の光が天から下っているところがあった。思うに、洞窟の天井はとても高い所にあり、そこに円い隙間が空いているのであろう。そこから下へ天光が差し込み、あたかも半月のようである。ほの暗い中でその光に出会うと、美しい真珠や寶石でできている灯火を見るようである。

内洞を出ると、左側にまた二つの洞がある。下の洞は、入ってみると少しで行き止まり。上の洞はぐねぐねしていたが、これも脇室程度である。右側に縦穴がある。覗いてみるが底が見えない。内洞の最深部なのだろうと思われる。

## 金華山「その六」―冰壺洞

朝真洞を出て、ついで石が突出している峯頭から南に下る。

一里ほどで、西北に曲がり、また一里ほどで冰壺洞に出る。思うに朝真洞から下ってくる第二層の山である。

冰壺洞の洞口は、空に向かってくちばしを開いたようである。先ず洞に杖を投げ入れ、ついで松明を紐でつるして下ろすが、水の流れる音を聞くばかりで底は見えない。そこで岩の隙間に手をかけ、虚空の

中を通るようにして、洞の咽喉に入っていく。すると忽ち、轟々たる水音が聞こえた。そこで松明を手に取り、そろそろと進むと、洞の中央に、一筋の滝が空から落ちているところがあった。氷の花か玉のかけらのような水しぶきが上がり、暗黒の中で銀白の輝きを見せている。その滝の水は石の中に注いでいるが、その後どこへ流れていくのかは分からない。

再び松明を手にして、四方を探索した。洞窟として縦方向に深いことは朝真洞よりも勝っているが、屈曲ぶりは及ばない。

### 金華山「その七」―双龍洞

冰壺洞を出て、真つ直ぐ一里ばかり下ると、双龍洞である。洞は二つの門がある。「自注1」一門は南向きで、一門は西向きである。どちらも外洞である。中は大きく広々としていて、大きな建物が高く聳え、四方に門を開いているかのようなのである。小さな部屋や脇室のような感じは全く無い。しかし内部には石の柱がぐねぐねと曲がり、鍾乳石が垂れ下がり、様々な不思議な景観をなしている。これが「双龍」の名の由来である。

内部にとても古い石碑が二つある。立っている方には「双龍洞」の三字が刻まれ、横たわっている方には「冰壺洞」の三字が刻まれている。どちらも燥筆によって飛白体で書かれているが、揮毫者の姓名を記さない。きっと、近代のものではないのであろう。

流水が洞の後ろから内門を通って西に出て、外洞を経由して流れ去る。うっむいて、水が出ているところをじっと見たところ、岩がその上を覆っていて、わずかに一尺五寸ほどの隙間しかない。まさしく洞庭山の左の裾野の丘と同じで、地面に這いつくばるようにしないと、

中に入れない。ただ洞庭山の場合は、地面が土であったが、ここ双龍洞では下が水であるのが異なっている。

瑞峯が私のために潘姥の家から浴盆を借りてくれた。「自注2」姥が茶菓でもてなしてくれる。

そこで、衣を脱いで盆の中に置き、裸で水の中に伏して入り、盆を手で押して狭い口に入る。隘路を五六丈ばかり進むと、たちまちぐんと広がっている。

一枚の平らな石板が洞の中に置かれている。地面から数尺離れており、大きさは数十丈、薄さは僅かに数寸しかない。その石板の左側からは鍾乳石が垂れ下がっている。その色はつややかで形は幻想的で、宝玉で作られた柱や旗竿のようで、洞の中に縦横に並んで立っている。その石板の下の方は、門を開き隙間を空けているように分かれていて、曲がりくねり、表面は冷たく輝いている。流れを遡って更に進むと、洞がだんだん低くなっていて、とうとう進めなくなった。この洞の側面の石の辺りに水が流れ出している小さな穴がある。その大きさは指を入れられるくらいしかなく、水はその中から流れ出している。私は口でその水を受けてみたが、甘く冷たいことが得も言われぬものであった。おおよそ内洞の広さ深さは外洞よりも勝るものであった。

まとめると、朝真洞は「一つの隙間から天光が注ぐ」のが奇勝で、冰壺洞は滝がもたらす「無数の珠玉」が特異な光景、双龍洞は外洞には二つの門があつて、内洞には重なる帳が垂れ下がるという、水陸を兼ねていて、暗さと明るさの両方において不思議な光景を現出しているものである。

「自注1」瑞峯が言う「この洞は初めは門は一つであった。南に向かつている門は、万暦年間に、水の流れが崖の石を押し倒してできたも

のである」と。

「自注2」この姥は洞口に住んでいる。

### 金華山「その八」―金華山の残りの名勝を経て蘭溪の上洞寺へ

双龍洞を出ると、太陽が既に中天に昇っていた。潘姥が黄梁を炊いて食事の用意をしていくれた。彼女の好意に感謝して頂いたが、御札に杭州で購入した傘を一張り進呈した。

かくして鹿田寺の瑞峯・從聞の二人に別れを告げ、西に山嶺を一つ越える。その山嶺の西側には窪地がある。北から中へ入り、そのまま東へ曲がる。双龍洞から五里の地である。

さらに山を半里上ると講堂洞である。この洞にも二つの門があり、ひとつは西北に、もうひとつは西南に向かっている。広々としていて清潔であり、その高さは双龍洞に勝るが、幽冥さにおいては双龍洞には及ばない。そこに居住したり休んだりするのにふさわしい場所である。その昔、劉孝標が弘子を揮った所である。今は観音菩薩の塑像がその中にある。思うにここは、北山の後ろの支脈で南に下がるうちの第一嶺が、その南に向かつて金華三洞をめぐり、また北に開いてこの講堂洞を形成しているのである。

山嶺の下の盆地の人々は石灰を作るのを生業としている。そこを流れる小川は涸れ果てていて一筋もなく、村人はわざわざ山を登って講堂洞まで水を汲みに行く。

(その涸れた)川底を渡り、ふたたび西に向かつて第二の山嶺を越えると、北山の後ろの支脈が南に下る、第二の層である。嶺を下ると窪地がぐぐつと迫ってくる。その窪地ではさらさらと水が流れる小川が北から流れ込んでいる。またその小川を涉って西に進み、再び山嶺に

沿って北に上ると、石橋が口をあけたようなところがあって、水が湧き出している。ここが北山後支脈の南下した第三の層である。外側は狭まっていて、内側は曲がりくねっている。ここは玲瓏巖と名づけられており、講堂洞から約六里である。

この山嶺に隣接する窪地には、民家がたくさん並んでおり、自然と一つの郷村世界を形成している。あの陶淵明が描いた桃源郷とて、ここには及ばないだろう。ここから転じて西に進み、山嶺を一つ越えれば、蘭溪県との境界である。山嶺を(南に)下れば紐杭である。ここもまた民家が数十軒ある。さらにまた山嶺を(西に)一つ越えたところを思山祠と言う。つまりそこが、北山後支脈下の第四の層である。玲瓏巖からは西に六里くらいである。

この時、太陽が沈もうとしていた。洞源寺への路を尋ねると、ある人は「十里」と言い、またある人は「五里」という。速やかに山嶺を下り、小川に沿って南に五里進むと、暮れに白坑に至った。ここも村人は多く、石灰作りを生業としていた。

さらにまた西に進み石塔嶺を越えると、そこが北山後支脈下の第五の層である。洞源寺はその山嶺の後ろの高い峯の北にある。この山嶺から脇道の小道を通って上れば僅かに一里ばかりであるが、正面から登る道は、一旦山を下りた麓の洞の傍らにある。そもそもこの地にも三洞がある。下にあるのが水源洞で「自注1」、上にあるのが上洞、「自注2」真ん中が紫雲洞である。このあたりは総称して「水源」という。だから同じ寺を「水源」と言ったり、「上洞」と言ったりする。そこで洞源寺と水源洞とは異なる場所にあるのである。

山嶺上の小道から寺に至ることができる、だから先ほど「五里」と言ったのだ。そして水源洞まで嶺を下り、そこから再び上ることもで

きる、だから別の人は「十数里」といったのだ。

時に真つ暗となり山道も分からなくなった。しかも道を尋ねられる地元の人も見あたらない。そこで大きめの道に沿って山を下る。しばらくすると西へ分かれ、下る小道があった。私は静聞を説得してその小道を進むことにした。しかししばらくしても寺に行き着かず、石灰を焼くかまどが眼前にいつぱい見えるばかりであって、小道が複雑に入り組んでいる。ちようどうろろしている内に、かすかな灯火が遙かに見えた。速やかにそこに走ったところ、粉挽き小屋であった。その住人が言うには「この地は水源という所である。この窪地から北に行つて洪橋を渡り、右の尾根道に従つて三里上れば上洞寺である」と。深夜であり、行き着くのが難しいだろうと思つて、小屋に泊めてもらおうとした。ところがその人は「月が昼のように明るく、この山の小道には分かれ道もない。行くのに支障はありません」と言う。そこで初めて、洞源寺は北山第五の層の北側にあることが分かった。そこで渓流を遡り、西北に進んで洪橋に至る。白坑からおよそ四里であった。橋を渡つて北に向かい、尾根道を踏みしめて一里ほど上り、東に曲がつて更に一里ほど進み、漸く洞源寺に行き着いた。無理を頼んで投宿する。

寺に「靈洞」について話す僧侶が宿泊していた。そこで趙相国に「六洞靈山」に関する刻石があるのを思い出した。それはこのことだろうか。しかしはつきりしないうちに寝てしまう。

◆洞源寺に泊。

〔自注1〕一名湧雪洞である。

〔自注2〕一名白雲洞である。

〔十一日〕

### 金華山「その九」―洞源寺の石碑の考察

黎明に起きると、(昨夜会話した)僧は既に出立していた。

私は寺の前殿を過ぎ、黄貞父の碑を読んだ。そこでいわゆる「六洞」とは、金華の「三洞」とこの山の「三洞」とをあわせて、「六」としたものだを知った。

前殿を出ると、趙相国の祠がちようどその前に当たっている。高く聳える楼閣がある。趙相国の「靈洞山房集」や「六虚堂記」で称される「靈洞山房」とはこのことであろう。私は久しくここにあこがれていたのだが、今思いがけずそれに出会うことができた。自然(偶然?)がもたらす成果は、人があれこれと作為するよりも、遙かに靈妙な働きをするものではないか。そこで朝食を待たずに、静聞とともに、寺の後ろから石畳を踏んで北に登り、先ず白雲洞を尋ねることにする〔自注1〕。

〔自注1〕洞は寺の北二里にある。

### 金華山「その十」―蘭溪の洞めぐり

一里で山嶺の頂に達する。そこを越えて北に進む。嶺はへこんでいて突然ぐるつとまわりながら下り、鉢型に窪みを作っている。草藪を掻き分けながら下ると、深い洞が一つあり、漆黒の闇へと落ち込んでいる。これこそあの白雲洞ではないかと思つたが、あまりに狭いため疑念の念がぬぐえない。すると突然一人の樵夫が洞の上を通り過ぎた。仰ぎ見て彼に質問した。すると「白雲洞はさらに北にあります。これは洞の窓です」と言う。そこで再び上り、北に向かう。しかしそ

の間、水は全くない。

二つの山に挟まれる間に、ぐるっと廻って一大窪地を形成している。広さは百丈に近づき、深さも数十丈あり、螺旋状に下っている。もし水がそこに湛えられていれば、仙遊県の鯉湖と同じだ。しかるにここは水が無い。私が見てきたところで、四方を頂に囲まれていて、しかもそこに水が注ぐ裂け目が無い窪地は、ここだけである。

また下り、左への分かれ道沿って、西へ山の狭間へと転ずれば、そこが白雲洞である。

(白雲洞)は洞門が北を向き、門の頂部分に横様に裂けた石が懸かっているようにになっている。洞の中から仰ぎ見れば、ぐっと曲がった様は、天台山寒巖山にあった「鵲橋」が空に横たわっているのと同じ景色である。

洞に入り、左に曲がり、だんだんと下っていくとだんだん暗くなる。高く聳える門があり、内側はとても深い様子で、門の外には石の屏風と遙かに対峙している。(そこを通り過ぎて直進し、)暗黒の闇の中を杖で地面を探りながら数十歩行くと、洞窟内はだんだん広くなっている。しかし灯火が無く、あたりを見渡しても何も見えない。そこで歩みを返して引き返す。途中まで引き返し、先ほどスルーした高く聳える門に入る。はじめは暗黒の闇しか見えなかったが、ここに至って光線が安定すると、歴歴として色々なものが見えてくる。そこで更に門と対峙していた石屏風の所を廻って洞を出、山嶺を越えて寺に帰る。

朝食後、寺を出発し、元の道をたどって西に下る。二里で洪橋に至る。今度はこれを渡らず、橋の左側の民居の後ろを半里行き、紫雲洞に上る。

洞門は西に向いている。洞口は高いところにあり、上下とも平らで

整っている。其の間に四五本の鍾乳石の垂れ下がった柱があり、門や窓を開いたようになっていて、洞の内と外とを二つの層に区切っている。玉の窓や緑の旗竿のような石が洞内にはどこにでもある。洞は広くまた奥深く、岩石の表面も十分に美しい。

洞の北の隅にまた奥深い洞がある。曲がりくねって深いようだが、松明が無いのでやむなく引き返す。

洞から下って(洪橋へ戻り、今度は)この橋を渡り、溪流沿いに東へ進む。山の石が半分程削られていて、掘削されたような絶壁をなしている。その麓は石灰焼きのための柴が積まれ、道を縦横にふさいでいる。ここが昨夜、道を尋ねることができなかった所であろう。石の梁を渡ると、水源洞はその傍らにある。

洞門は南向きで、ちょうど小川の上を跨ぐようである。洞口には鍾乳石が乱れ下がっているが、その中の一柱は、下から上につながっていて、手に持って持ち上げたみたいである。その上には透き通るような美しい鍾乳石がおびただしい数で下がっており、さらにまた一つの小さな洞が開いている。幻想的で蜃気楼のような景観をなしている。

洞の内部は上下二層に分かれている。下層は小川の水が流れ出てくるところであるが、洞内では川は涸れていた。しかし洞を数歩でると、小川にあふれ出るばかりの水がある。思うに、洞内の水は、水碓によって洞の側面に引き出されているのであろう。

洞の上層は洞門から石畳を踏んで上る。奥に入るに従って次第に下っていく。下りきると無限の広がり場所に来たような感じがした。とても遠くで滝の音が聞こえる。しかし明かりが無いので、奥を窮めることはできない。

## 「その十一」―金華蘭溪の洞の評価

洞を出て、洞口の柱を持ち上げたようなところの内側に座り、古老のような奇幻な石の様を眺める。この二日間を振り返るに、金華において四つの洞を、蘭溪においても同じく四つの洞を尋ねることができた。この地では六洞をもって、靈妙さを集めたものだとしてきたわけだが、私は八洞の景勝を極め尽くしたのである。ここで洞の優劣を評価せずにはおれない。

双龍洞が第一位、水源洞が第二位、講堂洞が第三位、紫霞洞が第四位、朝真洞が第五位、冰壺洞が第六位、白雲洞が第七位、洞窗が第八位、これが金華八洞についての順位である。これに新城県の山を加えるならば、洞山がある。ここは二つの洞口が並んで開き、左は明るく右は暗い。明るい方は色鮮やかな霞を見ることができ、暗い方は水洞と陸洞とに分かれていた。洞の中には仙人の耕地に穀物が繁茂しているかのように、畦が重なり波紋が平らに広がり、宝玉のような扉が次々と続き、狭い門が分かれ立って洞穴が曲がりくねる。この洞山の洞窟の余剰部分でもってしても、洞窗の魅力の不足を補完できるものがあるほどだ。この点によって金華八洞の中に位置づけてみれば、双龍洞と水源洞の間に相当するものであり、他の第三位以下の洞の及ぶところではない。しばらくあれこれと品評をし、やがて静聞と一緒に洞源から離れた。

昨夜来、道を尋ねた水車小屋を通り過ぎ、西の山嶺に従って窪地を出る。

西南に十五里行って、蘭溪県の南門に達した。

## 金華山「その十二」―下山し蘭溪から船に乗る

宿屋に入る。顧従僕はまだ食事の用意をしていなかった。せき立てて用意をさせ、急いで食べて乗船を探し求めた。この時、政府軍の援軍が北に向かっているところであり、船は借りあげられていて待機をしている状態であった。しかし援軍は中々到着しない。するとそこへ北からやってくる小舟があった。すぐさまそれに乗り込むと、布を運ぶ運搬船だった。船頭は出発するつもりはなかったようだが、そこへ船を徴発しに来た人がやってきた。そこで船頭は竿を刺して出発し、五里進んで、横山頭で停泊した。

◆横山頭に泊。

### 【第三部】

#### 《11》衢州をへて常山へ

【十二日】

黎明に出発する。

二十里行くと、溪流の南岸が青草坑である。「自注1」その時既に太陽は中天に昇っていた。川の水が極端に少なくなり、船は重くて喫水が低く、中々進まなくなった。

#### 「浙江金華府蘭溪県域」

さらに十五里で裘家堰に至る。船頭が卸船を捜し、それと一緒に停泊する。この夜、小雨が降った。東の風がとても強い。

◆裘家堰に泊。

【自注1】ここは湯溪県に属す。

【十三日】

朝が明けると、空の雲も散開した。船頭は船室一室分の布を取り出

して卸船に渡す。風がやがて次第に航行によいものになってきた。

〔浙江衢州府龍遊県域〕

（そこで出帆し）二十里で胡鎮に至る。

さらにまた二十里で龍遊県に至る。日はわずかに午後に入ったくらいであった。別の卸船を待つことになり、ここで停泊する。

◆龍遊県に泊。

〔十四日〕

朝が明けると、この船に乗船していたものたちは、船足があまりに遅いので、みんなして船賃を払い戻させ、陸に上がって行ってしまった。おかげで船の重量は軽くなり、また船内も広々となった。だから船足が遅いとは言っても不快ではないのである。早朝からの霧は既に晴れ、四周の山々が遠望される。ただし、風が次第に少しずつ逆風となってきた、帆を操るのに苦労して浅瀬に乗り上げないのが精一杯である。

四十五里進んで、安仁である。〔自注1〕

〔浙江衢州府西安県域〕

さらに十里進んで、楊村に泊まることになる。〔自注2〕

この日はトータルで五十五里進んだ。先に行っていた船に追いついて一緒に停泊する。そこで船足が遅れていたのはわれわれだけではなかったことが分かった。

川面は清らかで月は白く輝き、水と空とが一体となって一つの世界をなしている。もろもろの憂いや雑念が、さっぱりと洗い流されるのを感じた。我が身一身と村落の樹木や炊ぎの煙とが渾然と溶け合って、全体で大きな水晶の球となったかのようだ。その表面には僅かの隙間

もなく、いささかの不純物もなく、眼前の全ての景物は軽やかに飛翔するかのようであった。

〔自注1〕ここが龍遊県と西安県の境界である。

〔自注2〕ここは衢州からなお二五里の地である。

〔十五日〕

払暁に連続して二つの灘を遡る。政府軍の援軍は既に撤収しており、貨物を載せた船が湧くようにして下ってくる。しかし灘の口が狭く混み合って、上りも下りも焦ってひしめいている。先には船を得るのが難しかったのに、ここでは船が多すぎて困難に陥っている。旅行の困難さとはこのようなものだ。

（やつと抜け出し）十里行って樟樹潭を通過し、鶏鳴山に至る。風を受けやすいと軽やかに流れを遡っていく。

十五里で衢州府城に至る。正午になろうとしていた。

浮き橋をくぐり、さらに南に三里進み、西へ折れて常山溪口に入る。

風が良好で帆を高く揚げる。

さらにまた二里で花椒山を通り過ぎる。兩岸には緑なす橘の木や赤い楓の葉が次々と現れ、ゆっくり眺めて楽しむ暇がないほどである。

さらにまた十里で、北に曲がる。

また五里進むと黄埠街である。果実がなる橘の木が千本ほどもあって、どの家でも籠に果実をどっさり盛っている。橘の実を売ろうという船が、川いっばいに並んでいる。私はちよつと上陸して橘の実を買おうと思ったが、船頭は風向きがよいことを優先させ、再びさつさと帆を揚げて西に出発してしまった。

五里で日が没した。

(さらに) 月明かりに乗じて十里進み、溝溪灘のほとりで停泊となった「自注1」。

「自注1」この西は常山県の境域となる。

「十六日」

朝日が鮮やかで明るい。東風が益々強くなる。朝起きると、焦堰を通り過ぎた。山は廻り川は曲がつて、すでに常山の境内に入っている。西安県には山に橋が多く生えているが、常山県には山が多い。西安県の草木は明るくつややかで、常山県では山の樹木が黒っぽく色彩豊かでない。

流れを四十五里遡り、昼過ぎに常山県に至る。(このようにたくさん進めたのも) 風のおかげである。

ここで上陸し、常山県の東門で担夫を捜し求めて傭う。

県城を一里ばかりで通り抜けて西門から出る。

十里進むと辛家舗である。山の小道は寂しげで、一軒の農家も無い。

さらに五里で寂れた数軒の小屋があった。太陽はもう西に沈んでいる。前途に泊まる場所がないのではと考え、そのままそこに泊めてもらうことにする「自注1」。

「自注1」この地は十五里という。

## 徐霞客遊記卷二下

### 楚遊日記(1)

丁丑の年 崇禎十(一六三七)年

#### 【第一部】

〔湖広長沙府茶陵州域〕

〔正月十一日〕

《1》芳子樹下から雲嶼山へ

この日は立春である。空模様は晴れてきた。急いで朝食を取り、静かに荷物を託して舟行で衡州まで下らせる。十七日後に衡州の草橋塔の下で再会する約束をする。私は顧僕に命じて輕装で陸路をたどり、茶陵州と攸県の山岳を探訪することとした。

町の城門を出たところで、雨が霏霏として、しきりに降ってきた。

溪流を渡って南の涯に上がり、流れに沿って西に進む。ほどなく溪流は西北に折れ、道は一座の崗を通過する。さらに平行すること三里で、再び道は溪流と遭遇した。ここが高隴鎮である。ここで道はさらに溪流を北に渡って北に進み、また二座の崗を通過、五里平行して進んで、盤龍菴に至った。

北の龍頭山より流れてくる小さな溪流がある。主たる溪流を越えて、更に西に流れ去っている、これが巫江である。これがすなわち茶陵へ向かう大道である。また山勢に従って流れのままに南へ転じて去る流れがある。これが小江口である。これが雲嶼山へ向かう道である。このふたつの道は盤龍菴の前で分岐する。小江口は、蟠龍・巫江という

二筋の溪流が北の方の龍頭山からこの地に流れてきて、さらに南に流れて黄霄大溪に入るところである。

#### 《2》雲嶼山探訪

雲嶼山は、茶陵州の東五十里の、沙江のほとりにある。その山は深く険しい。万暦年間のはじめごろ、孤舟大師という人物が山を開き寺を建て、遂に寺院伽藍を形成した。ところが今や孤舟大師は亡くなってしまった。二年前、老虎が寺の傍らから僧侶を一人さらって行ってしまった。そこで雲嶼寺の僧徒たちはみな逃散してしまい、今や狼や虎が昼間でも横行するありさまである。寺の所有であった山田も荒れ果て、伽藍は空寂としていて、中に入ろうとする人もいない。

私がへの道を探ねると、どの人も山に入っては行けないと戒めるのであった。くわえて雨や霧が深く立ちこめており、案内を引き受けてくれる人はいなかった。しかし私はそうした状況にも阻まれず、盤龍菴の小路に従って進んだ。南に進み、小さな溪流に沿って二里進むと、再び大きな溪流と遭遇した。さらに南に下って小さな溪流を渡り、雲嶼山に入った。雨が益々激しく降ってきた。

山に夾まれた小路に沿って西南に二里進むと、北から流れてくる大きな溪流があった。それは真っ直ぐに山麓に迫り、山の峽谷をくねくねと曲がりながら流れている。溪流の兩岸の石の崖は、水流に浸食されて、礫岩に覆われた磯(岩だらけの水辺)を形成している。この流れに沿って二里進む。この河は沙江である。つまり雲嶼山からの流れが大溪に入る場所である。

途上で、傘を持ってこれから外出しようとしている人に出会った。私が道を探ねると、すぐにこう言った。「このあたりはたくさんの人と一緒にでないといけません。私は家に帰り、あなたのために

先導してご案内しましょう」と。私は彼の申し出に大いに感謝し、そこで彼について彼の家に行った。その人は私のために三人を雇ってくれた。彼らはみな武器を身につけ、松明を持ち、雨をもとせず山に入るようになった。

山に入ると、溪流に沿って東に一里進む。一筋の溪流が西の溪谷の隙間からしみ出しているのが見えた。石の崖が層を成しており、外側は門のように狭まっている。案内人が言うには「これは虎の棲処である。従来から炭焼きも薪拾いも決してここには入らないのだ」と。

時に雨勢が次第に盛んになってきた。さらに大溪を遡って行く。二里ほどくねくねと曲がると、溪流の底に、石が平台のように向かいあっているものがあつた。その中を一筋の道が通っており、水が石の間を流れ下っている。とても麗しい景観である。ここで山を上り、山の間を回って下り、平らな田畑のある谷地に出た。ここは和尚園という。四方を重なる峯々に囲まれている。田畑が尽きるところから、およそ一里、さらに一座の小山を逾え、前にであつた溪流の上流にそつて溪谷をまがりくねつて進み、さらにまた一里で雲巖寺に至つた。

この地は山の奥深く、霧が黒くたちこめ、寂として一人の姿も無い。寺院の殿上の如来像は冷たい雲気にさらされており、厨房の竈からも一筋の烟も出ていない。しばらくあたりをうろろとしたが、雨がよいよいよ激しくなり、帰るように促された。かくしてようやく案内人たちとともに寺から退出した。

### 《3》舟航で茶陵州まで

溪流の入口に出てみると、案内人が、舟が遠くにいるのを見つけた。急いで呼びかけこれに乗ることになる。急流に乗り、さらに權を飛ばすように使うので、舟はとても早く進む。私の衣服も履き物もびつし

よりと濡れ、寒気が肌を刺すようである。しかし、衣服を乾かす暇も無く、兩岸の崖や石についてこれは何かと質問する暇もない。溪谷も溪流もうねうねと曲がりくねっている。午後に舟に乗ったが、約四十里進んだところで暮れてきた。船頭はさらに三十里夜行し、茶陵州手前の東江口で宿泊した。

〔十二日〕

### 《4》茶陵州城から靈巖へ

暁、とても寒い。船頭が江口から舟を引いてきて酈水に入った。さらに茶陵の州城にそつて進み東城を經過し、南關に停泊した（ここで上陸）。

南関をくぐり、州の役所の前に至つた。ここから大西門を出て、西の方、紫雲雲陽の名勝を尋ねようと考えた。ところが、靈巖という名勝が、南關の外十五里にあると聞いた。そこで、まず市場へ行って、元氣づけに酒を飲み、再び南関の門をくぐつて外へ出て、酈水を渡つて東へ進む。

時に小雨が舞い降り、北風が吹き付けてとても寒い。東南に進み、坂道を上り下りすること五里で、平坦な土地に出た。ここにある河を欧江という。東南の方角から流れてくる溪流がある。そこでこれを遡及して進む。すると霧の中から、東方の山に石が高く聳えるのが見えてきた。非常にふしぎな気持ちが出た。

### 《5》靈巖探訪

また五里進み、溪流のほとりに山脈の突端が至つているところに出会つた。これを沙陂という。溪流の中に坂があるからこういう名がついた。この溪流の源は東四十里の百丈潭である。坂の上の、最も高い

ところが会仙寨である。会仙寨の内側にはカーブをなすドーム状の崖や裂け目をなす洞穴がある。それを学堂巖という。ここから更に東に進むと、山峽がくねくねとしている。その中を石梁巖という。ここは沙陂の上にあたったのだが、そのとき私は気がつかなかった。

更に又た東に一里進み、そこで北にまがって峽谷の中に入る。一里で、碧泉巖と対獅巖に至る。この二洞はともに洞口が南向きである。さらに又た東に進み、嶺を越えて下り、北に進路を転ずれば、靈巖がある。この洞穴は、東向なので、曾守「自注1」が、月到巖という名をつけたといわれている。

会仙巖より東側は、どの山もそれほど高くはない。すべて石崖が曲がりつながついて、堆積してめぐり、谷を形成している。三面が囲われていて一面だけ欠けていてちょうど「缺一」のようなものがあり、両側から向かい合っていて門のような形のものがあり、高く聳える岩が対峙しているものもあり、洞穴のように中が空いているものがある。どこもかしこもこのような感じである。但だ石の質は粗で色は赤く、水気がしみ出して湿潤であるような景観はない。そこに石梁が横ざまに跨がり、その下部は穹然と曲がっている。こうした景観の中で、次にあげる八景が第一の景勝といえるだろう。

### ● 靈巖八景

（一）靈巖 靈巖は、洞口は東向きである。洞前に連続する崖があり、南北に廻っている。洞の深さは数十丈、高さは数丈余ある。洞の中には仏像がある。洞の外には門戸のような小さな穴が並んでいるが、岩の頂には至っていない。洞内の壁は固く乾いており、鍾乳石のような二次生成物に覆われてはいない。唐の時代に陳光問が書を読んだところである。陳は巖塘「自注2」を住まいとしていた。陳の後裔で、今も

なお洞穴で書を読んでいるものがある。

（二）觀音現像 自然の觀音像は、伏獅峯の東、廻る崖の上に石が自然に觀音様の姿をなしたものの。像の顔色は、赤と黄色が混ざった様子。

（三）對獅巖 對獅巖は、一名小靈巖ともいう。靈巖の南嶺の外にある。南の方は獅峯に相對している。上下二層あり、上層の洞は大きくまた高くドームを成している。下層の洞は小さいが、ふたつの洞が對峙している。

（四）碧泉巖 碧泉巖は、對獅巖の西にある。この洞もまた南向きである。洞穴は、深さ三丈、高さ一丈余。洞内に一筋の湧き水がある。洞穴の壁の半ばからしたり落ちており、その下に水滴を承ける石盤がある。その水の清冽さは、他とは大いに異なるものがある。さらにまた、小さな洞の間に別の湧き水がある。

（五）伏虎巖 伏虎巖は、清泉（碧泉巖）の後ろにある。

（六）石梁巖 石梁巖は、沙陂や会仙寨のある東谷にある。この谷には乱立する山崖が分かれたりつながったりして、集まり並んで山塙を形成している。さらに東西に分岐して、その下にひとつの穴を開く。岩の中ばは梁のようにアーチ状をなしており、その梁の下から北を望むと、そこに別天地が広がっているのが見える。梁をくぐってそこに入る。梁の上には復た一層の崖が開けている。東の坂道から登れば、そのまま梁の中に至る。これを登るのは、幾層もの樓閣を踏み登るようである。

（七）会仙寨 会仙寨は、沙溪を見下ろす。（そのあたりは、）峯の頂はつながっていて、重ね磨いたようであるが、ただ会仙寨のみは、多くの峯々から突出している。羅洪山「自注3」が寺院をその麓に営んだ。これが六空上人が棲んでいるところである「自注4」。

〔八〕学堂巖 学堂巖は、会仙寨の北にある。高い崖の間に一穴を吹き出している。仙人が学を授けたところと伝える。

これが靈巖八景である。

私が靈巖に至るころ、風雨は治まらなかつた。先ず碧泉巖と對獅巖の二巖を訪ね、次に靈巖に入った。そこで僧侶の暁霞和尚が留めて飯を出してくれた。そのころは既に午後になっていた。するとちよつど一人の僧侶がやって来た。聞くとこの山の六空上人という僧侶であつた。その時、暁霞和尚は寺の諸雑務〔自注5〕を司つていた（ので多忙であつた）。そこで食事を終えると、六空上人にお願ひして、案内してもらふこととした。道をめぐりながら、獅峯に至り、さらに觀音現像を見た。さらに沙陂に至り、石梁にも入つて遊行し、六空上人の菴で休憩した。さらに暮になつたがものともせず会仙寨に登り、学堂巖を探訪した。八景の中で、ただ伏虎巖のみが未踏で、その他の七景は全て訪ねることができた。この日は、雨が降り続け小雨がけづつている状態が続いていたが、そうした天候の中で遊行をさまたげられず実行できたのは、ひとえに六空上人のおかげである。日が暮れ、六空上人の方丈に宿泊した。

〔自注1〕諱は才漢である。

〔自注2〕洞の北二十里にあつた。

〔自注3〕羅の名は其綸、瓊州の司理であつた。

〔自注4〕彼の師匠の號は涵度である。

〔自注5〕茅を結つたり、豚を飼つたりしていた。

〔十三日〕

#### 《6》靈巖から茶陵州へ戻る

朝食ののち、とても寒くなつた。雲が暗く空を覆っているのは昨日同様である。六空上人に別かれ、前日来た道を逆にたどり西北に行く。三里で欧江に至り、北にまがって山に入る。この道は茶陵から来た以前の道である。ここから南に向かい、沙陂江に沿つて西に去る別の道もある。欧江を渡る、溪流は小舟を浮かべるに耐えるだけの水量がある。西北に進み二座の小嶺を過ぎ、茶陵の南關の外に渡る。城壁に沿つて江を溯り、大西門を通過する。

#### 《7》雲陽山へ

さらに西に行くこと三里にして、橋とその背後に畝が開けているところを過ぎる。ここに来て始めて始めて東北から大きな川が流れてくるのを見た。かくして黄土坳を越える。又た三里進み、新橋を過ぎる。ここではじめて、霧の中に雲陽山の半面が姿を現した。又た三里で、紫雲山の麓に至る。ここは沙江鋪である。大江はここで真つ直ぐに山の麓に迫る。沙江鋪から西に行く道は、攸縣・安仁に至る大道である。

#### 《8》雲陽山探訪

南に進み山に登る。これは紫雲仙である。上ること一里で、山の半ばに至ると真武殿がある。その上に觀音菴がある。どちらの場所からも、東北方面に向かつて眺めると、大きな川が流れてくるのが見える。

#### ●松巖和尚が語る雲陽山の概要

觀音菴の松巖和尚は、老僧である。私が雲陽への道を探ねると、次のように答えた。

「雲陽山は、紫雲仙の西十里にあたる。その頂には老君巖がある。雲陽仙は雲陽山の東の峯の中腹にあたり、頂から三里の距離である。赤松壇というのも雲陽仙の麓にあり、雲陽仙から三里の距離である。」

思うに紫雲山は雲陽山が尽きるところにあたり、赤松壇は雲陽山の真東の麓にある。紫雲仙の下から、北上して江岸に沿って西に三里行くと、洪山廟がある。ここが頂上に登る北道になる。紫雲仙の下から南に進み、山麓に沿いながら西に四里行くと、赤松壇である。ここが頂上に登る東道である。頂上からはどちらとも十里以内である。二道の間に羅漢洞がある。紫雲仙の西にあたる。つまり観音菴のそばの小徑を一里ほど横に過ぎると、この菴（観音菴）に達することができる。観音菴から頂上に登るのにも、到達できる間道がある。紫雲仙から一旦降りる必要はない（今いる観音菴から紫雲仙に下り戻り、洪山廟經由の北道や赤松壇經由の東道を通るという手立てを取る必要はなく、ここから直接山頂へ至ることができる」と。

●雲陽仙へ、下って赤松壇の菴に泊まる

私はこれに従うことにした。かくして真武殿の側から進み、西北にふたつの小さな窪地を渡る。すると西北から一筋の谷川が流れてきた。これは紫雲山と青蓮菴の「自注」後ろの山とに挟まれてできたものである。この水は北に流れて大江に入るが、紫雲山を区切るものとなっている。

谷川を渡ると青蓮菴である。菴は東向きに出張っていて、あたりの土地は幽婉で、菴は清浄である。六澗和尚という僧侶がいた。彼もまた親切で、私をそこに留めて食事を提供しようとしてくれた。私は登嶺に心を引かれていたので、ついに菴の後ろから西に向かつて山を登り始めた。その時、濃霧がなお山の半分を覆い隠していた。しかし私はそうした事態をも顧みず、登攀を続けて真つ直ぐに三里上り、二重の峯を越えた。足が踏み出すたびに、足下の霧が開けていく。又た二里上ると、峯の背に生える樹木の枝に氷の塊がびっしりとついていた。

寒気が凝結したもので、大きいものは拳骨ほど、小さいものは卵くらいである。枝に付着してできて、風に吹かれては地に落ち、堆積しては地面を覆うほどである。

この時、私のいる山峯は霧気が全く消え、山の南と東の二面は、歴史として目に入った。ただ北と西の二面は、なお半分くらいは霧によって視界がふさがれている。（目に入った景観では）鄆江は東南よりし、黄雱江は西北より流れている。くねくねと湾曲しながら甚だ遠くまで続いている。ここで始めて分かった、雲陽山の峯々は、いずれも西南より東北に走っており、幾重にも重なり並んでいることを。

紫雲山は、北面の第一重である。青蓮菴の後ろで、私が上ってきたものは第二重である。雲陽仙は、第三重である。老君巖がその上にあつて、これが絶頂である。所謂「七十一峯」の主峯である。雲峯は南にあつて、私が上ってきた峯は北にある。ふたつの峯は横に並ぶ。地脈は雲陽仙の下から窪地を渡って立ち上がり、私が上っている第二重の頂となり、東に走って下り、青蓮菴を経由して東に進み、茶陵州治で結実する。

私が登ってきている第二重の絶頂は、小路が錯綜していてわかりにくい。西南の方角に雲峯の絶頂を望んでみると、その中間にひとつの窪地を隔てている。だが絶頂は尚お濃霧につつまれている。山の背が通り過ぎるところを見下ろしてみると、峯の下一里くらいのところがあり、その上は山を隔てて竹樹に覆われた谷があり、両辺が乳房のように隆起してその地を廻り覆っていて、天然の洞府のようなところがあった。これこそ雲陽仙に間違いが無いと思つた。そこで路らしき路はない中を、速やかに墜ちるようにして下り、山の脊を渡って上ることさらに二里で、小さな窪地をひとつ越え、雲陽仙に入った。こ

この菴は北向きである。

ここから山頂へ登る路は、左より上り、五里にして老君巖に至る。ここから山を下る路は、右より下りて三里にして赤松壇に至る。菴の後ろには飛び上がるような大石が重なっている。空に飛び上がるようであり、石と石の間には空隙がある。石の上には竹樹が懸かり綴っており、積み重なる美しさを極めている。石の間に静止した深い池沼がある。碧に澄み切っていること尋常に異なるものがある。名を五雷池という。雨乞いに甚だ靈験があるという。ここから上は層をなす巖が上に突出しており、登攀する手立てがないし、上の方は黒々とした霧がたちこめている。

思うに第二重の頂では、風に吹かれて樹木は舞いおどる。だから枝に着した氷は枝の伸びる姿に従って落下して堆積する。しかし菴は山が囲み峯が挟む場所にあたっており、竹樹が鬱蒼と覆っており、まわりついた霧が氷を形成し、樹木にびっしりと鈴なりになること、玉の花が谷を覆っているかのようなのである。北風がこれを揺らすと、妙な響きを鳴らす玉歩揺のように、金石のような清冽な音を奏でる。そしてたまたま揺られて地面に落ちることは、まるで玉の山が崩れるようになり、二三尺も積み重なることがある。このため道が阻まれてしまうこともある。

また、ここから上は、登攀するには更に難しい、ということだった。その時、既に午後になっていた。そして「赤松壇が下にある」と聞いたのだが、菴の僧は湖南方言がきつくて、「石洞」と聞きまちがえてしまった。私は、頂上の右後から登ってきたので、頂上の北から下山すればよいと考えていた。しかしそうすると「石洞の奇勝」を見損なうのではと心配になった。さらに「もう少しすると天気が晴れるで

しよう」とも言われた。(そこで北から下るのではな、東へ下ることにした。)菴僧の鏡然に食事の用意をしてもらい、(喫してから)東へ山を下る。路の側に谷川が流れ、石に注いでいる。その中に、「子房煉丹池」「搗葉槽」「仙人指跡」等の諸勝があることを案内の僧侶が指し示して教えてくれる。つまり赤松子のごとに附会して、張子房留侯のことが持ち出されているのだろう。まっすぐに三里下って赤松壇に至る。そこで始めて、「赤松」であって「石洞」ではないことに気づいた。そのままその菴に宿泊する。神殿は極めて古く、真ん中に赤松子、左に黄石、右に張子房を祀る。殿前に松の古木が一株あるが、その他には見るべき景勝はない。この僧の葛民も、人なつっこく親切である。

〔自注1〕これが羅漢仙である。

〔十四日〕

#### ●雲陽仙登頂断念

朝起きてみると、とても寒い。そして濃霧がまたあたりに立ちこめている。

これまでは、昨日遅くに赤松廟に到着し、すぐさま黄石公や張子房の位牌に黙祷を捧げ、半日後の明朝の朝、天気がよくなるのを仮託し、私にとって、頂に登って景勝を楽しむことができるようお願いしていた。しかし、ここへ来て、山頂を望んでみると濃い霧に覆われており、静かに降る細かい雨が、四面に降り注いでいる。山頂へ登る望みは絶たれたのである。

#### ●洪山廟へ

そこで朝食後、葛民に別れて山を下る。山麓に循って北に行き、小

澗二重を越える。さらに四里にして、紫雲仙の麓を過ぎる。川が東北から流れてきて、ここで峡谷に入る。路もこの河に沿っている。ぐるっと回って雲陽山の北麓に出る。さらに二里で、洪山廟である。風雨が交じりながらやってくる。しかたなくこの廟に逗留することにする。薪を買って衣を乾かす。ほだぎを埋めた灰の中に、一日中突っ込んでおく。

廟の後ろには南へ向かって絶頂に登る大道がある。この時、廟の下の川岸に数隻の舟が停泊していた。いずれも、逆風がはげしく、流れに沿って川を下ることができないでいる、船頭がしばしば私に声をかけ、明朝舟を利用しないか、と持ちかける。私は、雲陽山の山頂に未練があり、決することができないでいる。

「十五日」

### ●再び雲陽山探訪

朝、起き出す。停泊していた舟がまさに出帆しようとしており、私を招いて早く舟に乗せようとした。(しかし) 私は、四方の山々の霧が晴れているのを見、朝食を取ってから、山に上るといふ選択肢を選んだ(舟に乗って川を下る選択肢は捨てた)。

### ●雲陽山の頂へ

路は廟の後ろから南に向う、これを登る。三里で、ふたたび高い峯が北側向かって聳えているのに対面する。道が二手に分かれている。一岐は峯の南を進み、一岐は峯の西南を進む。私ははじめは(東)南の道を選んだ。この道が、以前に羅漢峽中にとどまるときに辿ったことのある道ではないかと思つたからである。ところがこの道は雲陽仙に向かうもので、老君巖に至る小路ではなかった(ことが分かった)。そ

こで道を転じて、西南の道を取る。一里行かないうちに、高い峯の西側の峡谷を進んでいるところで、顧僕が南の方の峽の頂に石梁飛駕があるのが見えたという。私は眺めてみたが見当たらない。そこでさらに西に進み、嶺の側にとどまると、大江が嶺の西をめぐり、大路が西北へ去っているのが見えた。そこで嶺の頭を望み見ながら、南へ上って行く。その時、嶺の頭では樹木が花が咲き乱れるようにあたりを覆っていた。径路は見当たらないが、たとえ路が無かつたとしても、(道なき道を行かなければならないとしても)石梁の景勝を得られるならばそれでよい、と思つていた。嶺の頂きに至り、あたりを見回してみるのが、飛駕石は見当たらない。ただこの嶺の背が東南に延びて高い頂に接続しているのが見えた。これが頂に登る路であることは間違いないだろうと考えた。そこで東南に進み脊を渡った。首をあげてどんどん上ることまた一里で、再び一つの脊を越える。振り返って背の南を見下ろすと、雲陽仙がすでに下の方になっていた。

思うにこの嶺は東西によこたわっているのだ。西は絶頂が北に伸びて尽きるところであり、東は前に登った雲陽山東側の第二層の嶺に属するものである。

ここへ来て、始めて路を得た。更に南に向って頂へ登る。路の上は冰雪が積み重なっており、体は樹氷に覆われた玉樹の中を進んでいくかのようなのである。さらにまた一里進み、ふたつの峯を連続して通過し、やっと最高頂に至った。

この時、太陽は光を陰らせていたが、垂れ込めていた霧は静まり消え、遠近の諸峯が尽くその真形を露わにした。ただ西北の遠峯のみ尚お一抹の霧痕をまといっていた。

### ●山頂での思案

そこで峯脊から南に下り、また一里進み、ふたつの峯を過ぎると、「十」の字をなす小さな小路が、峯と窪地を区切っているところがあつた。ここを南に上れば再び山頂に登り、東に行くとも山の中腹から真っ直ぐ上る道で、西に行くとも山の中腹から横に行つて山を下る道だ。ただし、脊の北に伸びた頂は高いけれども土質が泥土で石は無い。脊の南に伸びる峯はやや低い。東面の石崖は高く隆起して、峯や筈のように尖つた切つ先が離れて立っている。

そこで顧僕とともに、荷物は窪地に置いて、南の嶺の東側から、崖の隙間を使いながらよじ登り石筈に腰をおろした。下のほう、盆地を見下ろすと、一軒の茅屋がある。思うに、これこそ老君巖の静室であろう。いわゆる老主菴である。

ここで考えるに、ここからまっすぐ落ちるようになれば、一里ほどである。しかし一旦嶺を下つて再び上れば、その路程は遙かに長いものとなる。ましてもう既に石崖の頂におり、あたりを仰ぎ見たり見下ろしたりして、このあたりの景勝は全て見ている。なので山脊を越えて西路から下るのがよからう。便利ならばそのまま西の秦人洞の探索をすればよいし、もし不便ならば北へ向かつて川に出て、そこで舟を求めて流れに沿つて下れば、たやすく(秦人洞へ)到達できるだろう、と。かくして西路を取つて行く。

### ●西へ下るも道が途絶、再び山頂へ

山の北側は氷と雪が積み重なつて地面を塞いでおり、茅と棘が交互にまとわりついていて、歩行が次第に困難になつてくる。二里進むと、路が途絶してしまつた。四方をすべて茅茨で囲まれ、氷が凍結して固く結ばれている。上は頭をあげることもできず、下は足の踏み場も無い。加えて、茅の中に時折ふせつた穴がある、どうやら虎の穴らしい。

さらに山中とて濃霧が四方から湧き上がり、視界がまったく塞がれてしまつた。考えるに、ここから再び下ることは難しいだろうと。そこで再び山頂を望んで上る。地面は氷ですべり、草が進むのをはばみ、一步上つては一步滑り落ちるありさま。嶺は険峻だが草が覆つているので、そこへ到達できれば、虎口を脱することができようと思ふと念じ、益々勇を鼓してまっすぐ上る。二里で、再び山頂に至ることができた。

### ●嶺の東西で分かれる景観

北の方へ以前に西に下つた脊を眺めると、二つの峯を間にはさんでいる。この場所は、嶺の東側は茅棘が尽く燃やされており、西側は茅棘が山肌を覆っている。どちらも嶺頭の痕跡を限りとしており、まるで境界線が引かれているようである。この時、嶺の西側は黒い霧が垂れ込めており、東側は陽光が明るく輝いていた。西側の霧が立ち上つて東へ向かおうとしているが、その都度風が吹き散らして西へ押し返している。この点でもまた、東西で境界線をなしているかのようである。

### ●困難な嶺頭の歩行

さらに南に一里進み、再び二峯を下る。嶺は忽然として乱雑に石が並び立ち、きれぎれになつて刃を集め、戟をぶつ違ひにしているかのようである。嶺の西側では霧が尖つた石の切つ先をつかむように立ちこめ、東側では風が石の middle に激しく吹き付けている、その中を人(すなわち徐と顧僕)が足を溜らせながらまっすぐ下るのである。無理矢理崖に手をかけてよじ登り跨ぎ越す。益々自分自身無理なことを押し行つていくと自覚した。路に出会つたかと思ふと忽然と無くなつたり、既に霧がかかつているのにさらにまた霧が出てきたり、下ろうとしているのにいつのまにか上つていたことなどがある。これらは皆、山の

精霊がこうした奇勝を我々にまだ見せていないため、わざとわれわれの足取りを迂回させて、この素晴らしい景勝を体験させようとしているのであろう。

### ●道なき道を下る

石峯を下ると、窪地の中にまた「十」字の路があった。この地より再び西に向い、尾根を下る。いずれも濃霧の中を行く。はじめの二里は、氷が靄となっていたが草の中に路があった。次の二里は、石や樹木が覆ってきたが、微かに路はあった。ところが次の二里は、石が空に懸かり、樹木は密生して、路が途絶してしまった。思うに、尾根を越えて西へ進む道は、茶陵の人が東から来て、山を焼き炭を作るために通った道であり、ここまで来て皆茶陵に帰るのであろう。(だからここで道はなくなるのであろう。)ここから先は、崖は窮り樹木は益々深く、一度上ったら下ることはできず、一度下ったら二度と上ることができない行き止まりだ。

そこで私は考えた、引き返して別の下る道を捜すのは遙かに遠くになってしまった。ここからがんばって三四里下れば、山麓に着くに違いない。どうしてわざわざ引き返し、上ったり下ったりするのがよかろうか、いやそれは選択できない、と。ついに顧僕とともに、石に手を掛け崖に身を投じ、藤蔓にぶら下がったり枝に逆さまにぶら下がったりして、中空を何段も飛び降りたりしていき、ようやく遙かに水音を聞いた。しかし、人世からのくらしい離れているかは分からなかった。ほどなく霧が忽然として一瞬だけ開け、飛び出した峯や峡谷が姿を現し、深く濃い樹木が見えた。さらにふたたび一瞬霧が晴れ、谷の口二重の崖の外に、平坦な窪地が広がっているのが見えた。

そこで草むらの様子を調べながら石段を踏んでいくことは、鄧艾が

陰平を下るときのようにした。谷を転げ落ち、崖を転がるのに、できる限りの技を使ったが、素手で抜き身であり、鄧艾のように体をつつむ毛氈があるわけではなかった。夢中で崖を下ると、突然、枯れた谷川に出た。かくして安定した石を踏みながら進むことができた。思うに、これまで枝をつかんでつかまりながら下りてくるのには、樹木の力を借りてきた。しかし、衣服や履き物をついたりひっかけたりして行動を邪魔をしていたのも樹木であった。谷川に出て、樹木がやや開けてまばらになった。しかし谷川には草が生えることから、草が谷川を覆っている。はびこる草の下が、はたして石なのか、水なのか、水のか、草のか、判別つけ難い。足をおろすのが難しいところで、草がつきていて石が露出しているところもあり、そうすると石のとげや出っ張り、衣服や履き物をつつきひっかけること、樹木に関わった前と同じである。

### ●ようやく大道に出る

こうしたところを三里進むと、下って瀑布のある崖に出た。草の間に微かに路の痕跡が見える。けれども見えたり、見えなくなったりする。さらに一里進むと、崖の隙間から峡谷を破るようになって流れ出る川に出会う、兩岸は壁のように切り立ち向かい合っている。中でも北の崖が最も険しい。南崖から嶺を越えて出て行く道があった。さらに一里進むと、北からやってくる大道に出た。

### 《9》雲陽山から南部の洞穴へ

### ●窰裏村から棗核嶺へ

ここで始めて村居があった。聞くと、窰裏村であった。思うにここは雲陽山の西側の窪地なのであろう。この地からより東北に転ずれば、洪山廟までは五里あまりである。南へ東嶺に至るには十里あまりである。東嶺から南に更に五里で、そこが秦人洞である。

その時、霧が次第に開けてき、遂に南の方へ山裾に沿って峡谷を進む。小嶺をひとつ越え、五里進んで、棗核嶺に上る。これら嶺は皆、雲陽から西に延びて来て、北に転じて峡谷を形成するものである。

#### ●絡絲潭から東嶺塢へ

下ること一里で、谷川を渡る。この谷川は、南の方の龍頭嶺から下つてきて、上清洞に出るものである。谷川の傍の山の西麓を、谷川を溯りながら南に半里上ると、絡絲潭である。深碧色で底が見えないほどである。潭の両崖は、石を積み上げたような壁が多くある。

さらに半里でして、復た澗を渡る。今度は谷川の傍の山の東麓より山に登る。この場所は、東は雲陽の南峯で、西は大嶺の東嶺である。

大嶺はその高さは雲陽に並び、龍頭嶺は脊を渡り過ぎるところである。その嶺は東南では西嶺に尽き、東北では麻葉洞に至り、西北では五鳳樓に対峙し、西南では古爽冲となる。

大嶺の東北から流れてくる溪流がある。これは洪碧山からの川である。龍頭嶺の北から流れ下る溪流がある。これは大嶺・雲陽で脊を過ぎるところに発する川である。この二水は合流してさらに北へ流れて把七「自注」に出る。龍頭嶺に発する川は南北に分かれている。このうち南に下る流れは、東嶺塢を経由して、秦人洞を源とする川と合流して、大羅埠に出る。

さらに二里進み、尾根を越えたところで平地に出た。これが東嶺塢である。盆地の内側は水田が平に広がり、村落が稠密である。この東は雲陽山で、西は大嶺である、北はつまり龍頭嶺の脊を過ぎるところで、南は東嶺が繞り囲うところである。

#### ●新菴で泊

私は、この地に至ったはじめは、平地だと思った。しかし、ここか

ら更に東嶺に下つてみた後には、まだ山々の上に位置していることが分かった。

盆地に沿って東にさらに一里進み、新菴に投宿した。

「自注」鋪の名である。

「十六日」

#### ●東嶺塢を出発

東嶺塢の住人で段姓の者が、私たちを引導してくれることになった。南に行くこと一里で、東嶺に登る。すなわち嶺の上沿いに西に行くのである。

#### ●九十九井・甌穴

嶺の頭のところ、水流が回旋して甌穴(ポットホール)のできた川が多くある。そのひとつひとつは、仰向けにした釜のようで、釜底が穴を形成してその底に水が溜まる。あるものは深く、あるものは浅く、またあるものは底が無い。これが九十九井である。始めて知った、この山の麓はみな玉石のような岩石でできていて、ひとつひとつの岩は、上部に穴を開き、それぞれに水が打ち付けて甌穴を形成する。比較的真っ直ぐな穴の場合は、水が下り墜ちていて底が無いほど深い。湾曲した穴の場合は、勢いによって深かったり浅かったりしている。今は甌穴は枯れており水が無いが、全山どこもがこういった景觀をなしている。これもまた一大奇景といえよう。

#### 《10》秦人洞探訪

さらにまた西に一里進み、西南の方角の山谷の中を望見する。谷は四方を群山が取り囲み、グルッと繞って巨大なオーブン型の穴を形成している。これもまた仰向けにした釜のようである。釜の底に澗水が

流れている。澗水の東西辺はいずれも秦人洞である。生い茂る灌木の中を真っ直ぐに二里下り、くだんの場所に至る。その澗水は秦人洞の西洞から出て、東洞から洞に入る。澗水は窩の中を横切ること、東西に長さ半里である。その中程には流れが一穴に流れ込むのがあり、中で繞って穴を通って東へ出るものもある。それはそのまま石の峡谷の中を流れる。

その峡谷は、南側と北側とどちらも石の崖が壁のように切り立ち、南北から夾んで横に長い飼い葉桶の形を形成している。水は飼い葉桶の中を流れて、東洞に至ると、南に向きを変えて洞口に突入する。

洞は二門ある。北向きで、川の水が先で分かれて小さい門に入流し、峡谷を通過して傾き下って行く。(流れが早いので)人がそのルートを通ることはできない。やや東側に南に向かって大門に入る流れがあるが、こちらは河底に石がたくさんあり、流れがやや緩やかになっている。ただ洞内は水が集まって潭を形成しており、洞の両崖を深く浸しており、洞口との間に身を入れ込む隙間も無い。崖にそって下ろうとすると路が無くなり、水に入って行こうとすれば、底が深く足が届かない。張鷟が天の川を渡り支磯片石を求めたときに乗ったという浮槎(いかだ)が無いのが残念である。ただ小さい門から入った水は、峡谷に入った後にまた亦た大洞にも旁通している。その流れもなんとか衣服を着けたまま入れるようだ。この穴は曲がっていて流れを抜いている。その穴の中に、さらに窓のような穴が啓いている。振り返って、水が突入している形勢を観察する。これもまた甚だ奇勝である。

西洞を出でて、東洞の前を通過する。あわせて一里で、嶺を越えて東を眺める。東洞の水が出てくる場所が見える。さらに復た一里進

み、南の方へ向かって塙の下に至る。東洞の水が、東に向かって山麓から湧出しているさまは、黄雱江が石下から出ているのと似ている。土地の人々が石を廻らせて堤防を造り、水を溜めてため池とし、山の水田を灌漑している。その池の東から、南に流れて谷に出ている小川がある。ここからの路は北の方へ上って嶺を越え、さらに二里で始めて東嶺の上に達する。この道は、茶陵州からこの盆地に入る大道である。

#### ●東嶺塙の導者の家に泊まる

嶺に上がり、往路を引き返すこと一里で、導者の家に帰り着き、ここに宿泊する。

「十七日」

#### 《11》上清潭・麻葉洞探訪へ

朝食の後、新菴から北へ龍頭嶺を下る。五里で、以前通った道をたどって絡絲潭の下に至る。

以前、《志》には「秦人三洞、上洞は惟だ石門があるだけで入れない」とあった。私は、昨日誤導されたことをきっかけに、ふたつの洞を訪ねることができた。ここでいう上洞については、どうやって訪ねたらよいか分からなかった。土地の人は「絡絲潭の北に上清潭がある。その門は甚だ隘く、水が中から出ているが、人は入れない。入ることができれば奇勝があるはずだ。この上清洞と麻葉洞とは、どちらも神龍がいますところである。ただ入りにくいというのではない、決して入ってはいけないものだ」と。私はこの話を聞いて、とてもうれしくなった。

絡絲潭を過ぎるが、澗を渡らないで、そのまま山の西麓沿いに下る。

思うに、澗を渡れば山の東麓である。そこは雲陽山の西であり、棗核嶺へ向かう以前通った道である。澗を渡らないでいけば山の西麓である。ここは、大嶺・洪碧の東であり、把七に出る道である。

北に半里行ったところで、樵者に会う。彼に案内を依頼して、上清潭に至る。

### 《12》上清潭探訪

この洞は、路の下、澗の上に位置している。洞門は東に向き、掌を合わせるように両門が覆い被さっている。小川が洞から流れ出している。二筋ある。洞の後ろから出ているものは、そこにわだかまって池をなし、流れ出していない。洞の左から出ているものは、洞の南の支洞をなして、その流れは甚だ急である。洞の左の急流を越え、すぐに水中に潜って入洞することができる。

案内人は、松明を提供し、火をつけてくれたが、そこまで、先に立って入洞し案内するようなことは決してやってくれない。そこで私は衣を脱いで水中に入り、蛇のように身をくねらせて進んだ。しかし、洞の入口の隙間は低いところにあつて狭く、加えて入口の大半は水に浸かっている。体全体を水中に潜め、手に持った火炬を水上に出して、そこで初めて入洞することができそうだ。西に二丈ほど入ると、入口の隙間がようやく高さ一丈あまりに広がってきた。南北にも三丈ばかり横裂している。しかし、いずれにしても身体を入れ込む隙間はない。真西の支洞は、横に一尺五寸、縦に二尺ばかりである。しかし縦のうち一尺五寸あまりが水中に没しており、水面より上は五寸のみしかない。ここで考えてみるに、水中を匍匐して進めば、きつと口と鼻が両方とも水に濡れてしまうだろう。かつ松明を用いて洞穴を探索しようとするならば、水面との隙間ぎりぎりを洞頂をこするようにして持

ち込まなければならぬ。そして松明の半ばは水に浸かってしまうだろう。その時、顧僕は洞の外で荷物の番をしていた。もし私自身が水に入って泳いでいくならば、誰が松明を私に渡してくれるだろうか。

いや渡してくれる人はいない。自分の体は水をくぐることはできるが、松明はどうして水をくぐることができるか。いや、できはしない。まして、秦人洞では、私は膝まで漬かり服も濡れたが、水がわりあいと暖かだったので寒さを感じることはなかったのだが、この上清洞の水は溪流の水とかわらない冷たさであった。さらに洞は風の出入り口となっており、ひゆうひゆう、びゆうびゆうとした風が激しく吹き付けている。風と水とが代わる代わる迫ってきていて、しかも松明の問題も阻害要因となった。ついに入洞をあきらめて、引き返し、洞を出ることにした。

洞を出て衣を開いてみると、寒さ冷たさのために、全身に鳥肌が立っていた。そこで洞門で火を起こし体を暖めた。しばらくして（体も暖まったので）、再び山の西の麓に沿って川の流れに沿って北に進む。ここはもうすでに、棗核嶺の西である。

### 《13》麻葉洞探訪

#### ●周辺の地形

上清洞から三里で、麻葉洞である。洞は麻葉湾にある。湾の西は大嶺で、南は洪碧山で、東は雲陽山と棗核嶺の支脈で、北は棗核嶺の西の端である。

大嶺は東に転じて、溪流の下流部分を狭くし、門のように両側から聳え立つ。そして門に相当する峯のひとつに、石が崖のように高くそびえ立っている。これが將軍嶺である。溪流はその將軍嶺の西側に突

き当たっているが、棗核嶺の支脈も西に進んでここで尽きている。溪流の西に南向きの石の崖がある。鳥が翼を広げたように溪流を囲んでいる。東の方に溪流の中程を見下ろしている。大嶺の支脈も、東に進んでここで尽きている。

めぐる崖の下にも、洞穴が口を開けているが、浅くて入れない。石崖の前に小溪があり、西から東に流れ、石崖の前を經由して大澗に入っている。

#### ●案内人確保の困難

小溪に沿って進み、崖の西側の石が乱雑に林立している所に来た。小溪の水は崖の下に消えてゆき、穴が上向きに口を開けている。これこそ麻葉洞である。洞口は南向きで、大きさはわずかに一斗くらいで、林石中何段か下った石階段の下にあった。

最初に松明を求め引導者を雇おうとした。すると松明については皆提供してくれたが、引導しようとするものは全くいなかった。彼らと言うには「この洞穴の中には神龍がいる」と。またあるものは「この穴の中には神霊怪異がいる。法術を身につけたものでなければ、それを恐れさせ屈服させることはできないのだ」と。それでも最後には謝金を積んで一人を雇うことができた。ところがいざ衣を脱いで洞穴に入ろうとする段になって、そのものとのやりとりの中で「私は儒者であり道士ではない」ことが明らかにになった。すると彼は驚いて言う「私はあなたが法力のある道士だと思っておりました。だからあなたと一緒に洞穴に入ろうと思ったのです。あなたが法力など無いただの儒者だとするならば、どうして私は命を捧げてあなたに同行することができのでしょうか。いやできません」と。

#### ●案内人を断念

そこで私は、前に通過した村に戻り、荷物をその家に預けて、顧僕とふたり、松明の束を持って洞穴に入ることにした。

その時に村民で洞口に集まってくるものが数十人いた。樵夫は鎌を腰にさげ、農民は鋤を肩にかつぎ、食事の支度をしていた婦人は調理を停止し、機を織るものは杼をほったらかしにし、牧童や行人も足の踏み場もないほど集まってきたが、私たちに就いてきて洞穴に入ろうとするものは一人もいなかった。

#### ●入洞

我々ふたりは、まず足から入り、石段を踏み、穴を廻り、松明を持って下る。何度か廻って洞底に至る。そこで洞はやや広くなっている。体を斜めにし、首をすくめ、そこで初めて前に松明を掲げて進むことができる。東西に避けている隙間は、全く入れそうところがない。ま北にさらに一穴がある。高低は僅に一尺で、広さも同じくらい。そうではあるが、穴の底辺部分は全く乾燥していて平らかである。そこで先ず松明を差し込み、次に我が身を蛇伏させて進入する。背中は洞頂をこすり、腰も地面をはう。下半身を少し高くし、尺取り虫のようにしながら、やっとこの内洞の第一関門を通過する。

その内側に出ると、裂け目の高低は更に高くなり、東西に貫通していたが、そこから更に入るところが無い。さらに第二関門を通過する。その狭さと高低は前の関門と同じで、進む方法もまた同じである。

第二関門に入ってみると、内層が横様に裂けている。その西南に裂けるものはそれほどは深くない。東北に裂けるものは、上部に陥没した石があり、忽然として縦に裂け目をなして起立している。その上部は湾曲しており、下部は狭くなっている。石の背が高いので頂上部分は見えない。この場所に至って、玄妙な形の異なる石があり、岩肌

の紋様もめまぐるしく変わっており、一片の石、ひとつの竅ごとに、  
靈妙さを感じさせる。

西北に伸びる峽道は、入るに従いだんだんと狭まってゆき、最後には一筋の縫い目ほどになり、松明を差し込むことすらできなくなった。そこで転じて東南に伸びる峽道を選択する。

そのままひとつのくぼみを下る。その底部は砂石が覆っている平らなところで、潔浄でなめらかな溪流の河底のようである。ただここは乾燥していて水は無い。だから、水を渡るために衣を掲げようかそのまま渡ろうかと悩む必要がただけではなく、衣服や体が濡れたり汚れたりすることからも免れるのである。

峽道の東南での行き止まりには、乱れる石がたくさん重なっており、層疊をなす楼台のようである。石の隙間に手をかければ、よじ登ることができそうである。上部の石の表面に一筋の穴が開いていて、まっすぐ洞穴の頂上部にまで伸びている。光がその隙間から下り射し、明星や三日月のようで、眺めることはできるが、手に取ることはできない（まるで手で摘むことができるかのようなのである）。

積み重なった石の下からは、溪流の河底が南に通じているが、覆い隠す石が圧力を掛けて低くしており、高さは僅か一尺くらいになっている。この河底はおそらく前に見た洞外に通じており、溪流が流れ込むところのものである。ただ、昔は湧流していたのが、今はなぜ枯洞になっているのかは分からない、理解できないことだ。

層をなす石のところから下り、北の方へ澗底に沿って中に入る。狭い入口はとても低く、これまで通った二つの関所と同程度である。やや西よりのルートを取り、石の隙間に手を掛けてよじ登る。北に転じ、さらに東へ進む。馬の鞍を乗り越え、嶠（尖って高い山）を踏み越え

るような感じだ。両側の壁の石の質や色について言えば、光り輝いており、水滴がしたり落ちるかのようだ。石柱が蓮の花を逆さまにしたかのように上から下に下がっており、雕琢を施したかのような紋様が走り、飛び舞うかのような躍動的な形をなしている。東に一段下れば、ふたたび河底にであう。さらに転じて狭い関所の内側に入る。

### ●二次生成物

ここはひとつのミニ空間を形成している。広さが二丈、高さが一丈半あり、カーテンが覆ったような平らな石があり、河底が大道のように平たく広くなっている。ここから北に半里いくと、下に石がひとつある。榻（ベッド）が置いてあるかのように、楞（角）と辺（へり）が整然としている。ベッドの上には鍾乳石が蓮の花のように垂れ下がっており、隣とつながってカーテン上をなし、結びついては寶石箱の蓋のような形を形成している。四周に幔幕が垂れ、その覆う範囲はベッドと対応している。幔幕の中段は円形に透かしており、上へ向かって広がり、最上部はアーチ型をなして天井となる。幔幕の後ろの西側の壁には、円形の玉柱がすくと立っている。その円柱は大きいものから小さいものまで形は多様であるが、色は皆白く輝いていて、刻み込んだような紋様が表面を被っている。これこそこのミニ空間における第一の奇勝である。

### ●引き返す

ここからさらに真つ直ぐ北に半里に至って、洞穴は上下二層に分かれており、下層にあたる河底は東北の方角へ進んでいる。上層の洞穴は西北に上昇している。その時、私が携帯してきた松明は、七割ほどを使用していた。帰途で松明が尽き道を判別できなくなるかもしれないと考え、（ここで引き返すことにする。）た。そこで往路をたどり、

幾たびか角を曲がってふたつの関所を通過し、光がさしかかっているところに至った。そこでちょうど松明が尽きた。狭い洞口から外へ出た。まるで生まれ変わって再び世に出てきたかのようなこころがした。

#### ●洞外の村人達

洞穴の外で見守っているものたちが、さらに数十人増えていた。我々二人が挨拶をしながら出てきたのを見て、不思議なことだと称し、かつこう言った「前から長い時間待っていたわけだが、あなた方はきつと怪物の口に吞まれてしまうだろうと考えていたのです。だから我々は洞穴に入ろうと思ったものさうすることができず、かといってあなた方を見捨てて立ち去ることもできませんでした。ところがいま、あなたがたは安全であって無事でした。神霊の助けが無かったならば、どうしてこのようなことができたでしょうか」と。私は人々に一一感謝の念を示し、かつこう言った「私は私の道を守って行動するだけです。私は私が探求したい景勝を探求するだけです。しかし、あなたがたが長い時間私たちを待っていてくれるという労をかけたことについて、どうやって敬意と謝意をお伝えしたらよいか分からないほどです（心から感謝しています）」と。

そのように応えたのだが、この洞穴は入口こそとても狭いものの、その中は清らかで乾燥している。私がこれまで実地で探求した洞穴の中で、この洞穴に及ぶものはない（この洞穴は最高だ）。それなのに、土地の人々がなにゆえに、かくも入洞することを恐れるのか、さっぱり分からない。

#### 《14》麻葉洞を出て衡山県へ

そこで荷物を前村に取りに行き、將軍嶺をたどって出発し、溪流に沿って北に進む。十里あまりで、大道に出た。この場所は、東の方へ

は把七までさらに七里で、西の方では還麻までで三里しかない。私は初めは把七に道を取り、舟に乗って西へ向かおうと考えていた。しかし、この地点で考えてみるに、把七からの舟行は流れを遡及する逆行になり、望ましいことではないと思った。また把七にいつでも舟があるとは限らないことも考えた。空もいい天気になった。そこでついに陸路を取り、西の還麻に向うこととした。時に太陽はすでに傾いていた。まだ御飯（昼食？）を取っていなかったが、（還麻の？）市場で酒を買って飲んだ。

#### ●黄石鋪で泊

さらにまた西に十里で、黄石鋪に宿泊する。ここは茶陵から西に四十里にもなる。

この晩、空は洗ったかのように碧暗く、月は白く輝き霜が寒々しく空气中を満たしている。これぞ、旅先における奇異なる光景である。昼間の行程の疲労から、すぐに寝てしまった。

#### ●黄石鋪あたりの地形概観

黄石輔の南には、大嶺と北に対峙している峯がある。その石は切り立って突き出ている、空に刺さっているかのようなものである。西南の一峯が最も突き出していて、五鳳樓と呼ばれている。そこから十里あまりで、安仁に通じる道に出る。

私はこの日、さつきと寝てしまつて、この山のことを尋ねなかった。翌日、出発してからこのことを聞いたが、もはや引き返して五鳳樓に行くことはできなくなっていた。

黄石輔の西北三十里に高暑山がある。他に小暑山というものもある。どちらも攸県の東にあたる。おそらくここが司空山なのであろう。高・小暑の二山の西では、高い峯が次第に低くなっている。茶陵江の川

筋が北にカーブをしており、高暑山の南麓を経由して西に流れる。攸水という川が高暑山の北を流れている。この山は、茶陵江と攸水とを区切るものになっていると言われる。

〔十八日〕

● 黄石鋪から珠璣鋪へ

朝食の後、黄石鋪から西行する。花が咲いているような霜が大地に満ちており、澄み切った青空に太陽が輝いている。十里で了塘鋪である。さらに十里で、珠璣鋪である。ここが茶陵県と攸県との境である。

〔長沙府茶陵州域から攸県域に入る〕

● 攸県城へ

さらに西北に十里で、斑竹鋪である。さらに西北に十里で、長春鋪である。さらに十里で、大江を北に渡ると、攸県の南門である。

攸県の県城は川の北岸にあり、東西の両門と南門とが川沿いに並んでいる。茶陵から流れてきた川は北に曲ったのちに西に廻り、攸水は安福の封侯山より西に流れ、さらに南に転じて流れる。このふたつの川はともに高暑山を挟んで下り、攸県城の東で合流し、県城の南西を流れて去る。

この日は、ずっととても晴れていたが、長春鋪に至るころには、雲が空を覆ってきた。攸県城に至ったのは、お昼を少し過ぎたころだった。ここからの船便を工面しようとしたが得られず、結局学校の門の前の宿に宿泊することとした。〔自注一〕

〔自注一〕南門である。

〔十九日〕

● 攸県城から衡山県域まで

朝食の後、大気中のつちぐもりが散らずに漂っている。

攸県の西門から北に道を転じる。西北に進み坂道を上る。十里で、水澗橋である。北から南に流れてくる小川がある。橋を越えて西に進み、ふたつの嶺を続けて越える。その西側の嶺を黄山という。嶺をくだって五里で、黄山橋である。ここでも北から南に流れてくる小川がある。その川は先の水澗橋の川よりもやや大きく、平野も大いに開けている。西の方へ田畑を三里行き、牛頭山に上る。さらに山上を二里行くと、長崗沖と言う場所である。嶺を下ると清江橋である。橋の東岸は赤い崖が鳥が翼を広げたように展開している。ここでも北から流れてくる小川があり、その大きさは黄山橋をくぐる小川と同じくらいである。橋の西は平野が開けていて、その規模も黄山橋の西に開けたものと同じである。ただ、この場所は四方が山に囲まれており（展望が悪く）、黄山橋での南北に果てしなく展望できたものには及ばない。平野の中に平らな田畑があり、村落が遙かに見える。ここは漢田と言う。さらに五里で、西に山峽に入る。ここはすでに衡山県の境域である。

〔長沙府攸県域から衡州府衡山県域に入る〕

● 龍王橋などを經由して太平寺へ

県境の北の諸山はどれも石炭を産出する。攸県の人々は石炭を燃料として用い、柴は用いない。攸県の人々は争うようにして石炭を市場に運び、路に運搬人が絶えない。

山に入り、小谷川に沿って、西に上る。路が二股になっている。西北の道はそのまま山に入って衡山へ向かう小路で、西南の道は太平寺に行つて、そこから舟を利用する道である。ここでは西南の道を選択

する。

五里で荷葉塘である。盼兒嶺を越え、五里で龍王橋に至る。橋下の水は北の小源嶺から流れ来たり、南に向って流れ去る。(龍王橋のある)村落の居民は蕭という姓で、大族である。北に望むこと二十里に、小源嶺の上に、高山が屏列しているものがある。名を大嶺山と言う。これこそ北のかた湘潭に通じる道である。

橋を過ぎ、西南に行くこと三里で、長嶺を上る。さらに西に下ると窪地がある。三里すすみ、葉公坳を上る。さらに四里で、太平寺の嶺を下る。ここでは大江がその下を流れている。江を隔てた向こう岸は芒洲である。この太平寺は攸県城東部から四十五里にあたる。

この日、長嶺を上っているころは、日が少し差し添っていた。真夜中にしたたり落ちる雨の音が聞こえ、明け方によくやく止んだ。

〔二十日〕

#### ●前夜の回想

先晩、太平寺の水辺で舟を待っていた(が得られない)。そこで停泊している舟に宿を取った。夜半に、東西の山に、火の光があかあかと輝き、まるで百尺もの楼閣の上に提灯をつるしたかのようなありさまだった。光焰が空を照らし、月が上ったか、太陽が落ちてきたかのような感じがした。そのあと、山焼きだと聞かされた。寝床に伏せつたのちに、したたり落ちる雨の音が聞こえ、明け方によくやく止んだ。

#### ●太平寺から楊子坪へ…舟航

午前に(ようやく)舟便を得、流れにそって西北方向に山峽を通って進む。二十五里で、大鵝灘である。十五里で、下埠を通過する。廻郷灘を下る、とても険阻である。ここを過ぎると山峽が始めて開け、

川は真西に向かう。行くこと二十五里で、北へ向きを変え横道灘を下る。さらに十五里にして、暮になり楊子坪の民家に宿を取る。

#### 【第二部】遊衡山日記

〔二十一日〕

#### 《15》衡山県城へ…舟航

ときは四更、月が明るく出ている。船頭がすぐに促して乗客を乗船させた。

二十里で、雷家埠に至る。ここで湘江に出る。雞が始めて鳴く。さらに東北へ、流れに順って五里進み、衡山県城に至る。湘江の流れは、衡山県城の東の城壁の下に至る(そこで上陸する)。

#### 《16》衡山県城から南岳廟へ

県城の南門から入城し、県の役所の前を通り過ぎ、そのまま西門から城外へ出た。

三里進み、桐木嶺を越える。ここで始めて、路の側に大きな松の木が立っている。さらに二里で、石陂橋である。ここで始めて路の両側に松林が続く。さらに五里で、九龍泉を過ぎる。ここには頭巾石がある。さらに五里で師姑橋である。山が始めて開け、祝融峯が北に聳えているのが初めて見えた。しかし、路の両側にあつた松林は、師姑橋に至って無くなった。橋下を流れる小川は、東南の方角へ流れ去っている。

さらに五里で山に入る。ここで再び松林に入る。さらに五里で、路の北に「子抱母松」がある〔自注〕。さらに二里で、仏子坳を越える。さらに二里で、俯頭嶺を上る。さらに一里行くと、南岳市である。

#### 《17》水簾洞探訪

司馬橋を渡り、南岳廟に入って拝謁する。廟を出て廟前で食事にす  
る。

(地元の者に) 水簾洞について質問したところ、「水簾洞は山の東  
北隅にあつて、祝融峯に登るメインルートの上にはない」ということ  
であつた。時に午後になつたばかりで、祝融峯に登る時間はあるよう  
だつた。現在雲がかかつてはいるが、それほど陰つてはおらず、明日  
晴れるかどうか分からない状態で、本日頂上に登るのか、明日にする  
のかで、しばらく迷っていた。

しかし、ここまで登ってきたからには道を転じるのももつたいない  
と思ひ、水簾洞を優先することとした。遂に岳市を東に出て、路端の  
亭の北側を通つて、山なりに分かれ道に入つて行く。

初めのころ、路は甚だ広かつた。この道は湘潭から南岳へ入る道だ  
である(だから割合と大きい)。東北に三里進むと、南岳東部の高峯  
から流れてくる小さな溪流がある。樵者に行き会つたので案内を頼む。  
彼は我々を小徑に引き入れた。三里進み、山峽を上る。水の簾が石崖  
の下に広がっているのが見えた。二里で、その場所に至つた。こここ  
そ瀑布が崖の間に注いでいるものであるが、「水簾」とは言えても、  
「洞」と言えるものではなかつた。崖の北の石上に「朱陵大瀝洞天」  
及び「水簾洞高山流水」の文字が大書されている。それらは皆な宋元  
人が書したものだろうが、落款は摩滅しており誰のものかは弁別でき  
なかつた。

#### 《18》九真洞探訪を断念

案内の者がさらに言う「この東に九真洞がある。これもまた山峽の  
間にあつて、峽谷から出ている瀑布である」と。

山を下り、さらに東北に二里進み、山を登り山峽に沿つて、狹隘な

出口を越えると、その中は山峯が周りを囲み、水が廻つてるところ  
だつた。案内人は、ここが九真だという。

たまたま山焼きをしているものがやつてきて次のように言つた、  
「これは寿寧宮の址である。九真洞の下流にあたる。そもそもここで  
いう“洞”というのは、山が周囲を囲つていて窪地を成しているもの  
をいい、その点で、九真洞はこの場所と似ている。そこは紫蓋峯の下  
にあたる。山を越えて北に行くと別の洞があり、また窪地がある。ほ  
んど湘潭との境に近い」と。

もう日が暮れようとしているので、私は(九真洞を探索するのはあ  
きらめて) 山を出ることにした。十里進むと、僧房が近くに見えた。  
そこで引き返して南嶽廟に宿した。

〔自注上〕大きい方は二抱えの太さがあり、小さい方は先がふたつに分かれて  
いる。

二十二日

#### 《19》南岳登山、上封寺まで

南岳廟から十五里で、半山庵である。ここから五里で、南天門であ  
る。

〔乾隆本〕

力をこめ迅速に山を登る。南岳廟の西側で將軍橋を渡る。南岳廟の  
東西はどちらも溪流が流れる。北の方へ山に入り、一里で紫雲洞であ  
る。ここも洞穴は無く、山並みがぐるっと囲つていてひとつのエリア  
を形成しているものだ。ここから嶺を一里上り、大石の後ろを通つて  
山筋をひとつ越える。一里許りで、路の南に鉄仏寺がある。その寺の  
後ろから石段を登ること一里。この間路の両側は細竹が乱れ生えてい

る。嶺に上ると、丹霞寺である。さらに丹霞寺の側から北に上り、絡絲潭の北から嶺をひとつ下る。さらに絡絲潭の上流の澗に沿って一里進むと、宝善堂である。この場所は、東西の谷から溪流が流れてきている。宝善堂の前に断ち斬ったような大石がある。西から流れてきた溪流は、この大石の下をめぐり、玉板橋をくぐって、東から流れてきた溪流と合流し、南へ流れる。宝善堂はふたつの溪流の真ん中にあつて、南岳廟からはもはや五里の距離である。

宝善堂の後ろから再び石段を一里上り、さらに西から来た溪流に沿った東側の嶺に沿って、平行して二里進むと、半雲菴である。菴の後ろから溪流を渡り、西の方角に石段を踏みながら真つ直ぐ上ること二里で、一峯を上げれば、茶菴である。ここからさらに真つ直ぐ三里上り、一峯を踰えると半山菴である。この間、路は極めて険峻であつた。半山菴の丹霞寺側から北に上る。竹と樹木がこもこも映えており、青や翠が衣に滴っているかのようなのである。竹藪の間からさらさらとした水音が聞こえる。半雲菴からこの溪流を越えるまで、まったく水流とはであわなかつた。山が高いので水が無いのだなと思つていた。ところがここに至つて水音を聞くことになり、とても快適な思いをした。

この時は、とにかく頂上に登ろうと思つていたので、寺院を多く通過したが、中に入つて訪ねることはしなかつた。丹霞寺から三里上ると、湘南寺である。さらに二里で、南天門に着いた。平行して東に向う二里の道がある。南に一里で、飛来船・講経台である。そこを訪ねた後、引き返して元の道に至り、さらに東に半里下り、さらに北へ尾根を渡り、西北に三里上ると、上封寺である。上封寺の東に虎跑泉があり、西に卓錫泉がある。

## 《20》上封寺滞在

二十三日

上封。

二十四日

上封。

二十五日

上封。

二十六日

## 《21》祝融峯めぐり、西から下り福敵寺へ

晴れ。

観音崖に至り、再び祝融会仙橋に上る。不語崖から西に下る。八里で、分岐点である「自注1」。北への道を選び、二里進むと九龍坪である。ここで分岐点に引き返す。南に一里で、茅坪である。東南方向へ山の中腹を進み、四里でかき乱れた溪流を渡り、大坪の分岐点に至る「自注2」。西南の小路を選び、真つ直ぐ上ること四里で、老龍池である。山の窪地にある池で、それほど澄んではない。僧侶達の居室は、多くは山の外側にある。この西南は、側刀峯の西側と雷祖峯の東側の分岐点である。東に二里進む、側刀峯に上る。山頂と平行に二里進み、山頂を下り、甚だ狭い山の脊を渡る。赤帝峯の北を行き、一里の間、赤帝峯の東側をめぐる、分岐点である。そこで南を選択し、窪地の中を東に進み、一里で、天柱峯の東に出た。さらに南に下り、五里で、獅子山と大路とが合流するところを通過する。さらに分岐点か

ら西へ進み福厳寺に入る〔自注3〕。明道の山房に宿泊する。

〔自注1〕南は茅坪への道である。

〔自注2〕東南は南天門に上る道である。

〔自注3〕寺の本殿は傾いている。僧の仏鼎が再建計画を検討していた。

二十七日

## 《22》南岳西南部周遊

### ●福厳寺から方広寺まで

早朝、雨音を聞く。朝食ののち、出発すると、まもなく雨は止んだ。

福厳寺の西から、天柱峯にそって南に一里進み、また西に一里上り、天柱峯から南に分かれてくる山脊を越える。ここで北へ向きを変え、天柱峯に沿って西に一里進み、西から伸びてきている山脊に上る。そのまま山脊の上を西南に行く。

ここで華蓋峯の東面に沿って行く。一里で、華蓋峯の南面を向きを変え、西に行くこと三里で、華蓋峯の西面に沿って北に下る。風雨が大きいに至ったので、ここからは傘を持って行く。北の方へ小さな平地を通過し、復た嶺に上り、あわせて一里で、転じて西に嶺の脊の上を進む。連続して三つの山脊を渡り、あるときは嶺にそって北に向かい、あるときは嶺にそって南に向かう。あわせて三里で再び嶺に上る。この場所からまっすぐ（南に）二里上ると観音峯である。（しかし観音峯には登らずに）観音峯の北側の樹林の中を三里行くと、雨がやっと止んだ。しかし、空気中にただよう靄が甚だしい。さらに西南に下ること一里で、観音菴に至る。ここで始めて道を間違っただけでなかったことが分かった。ここからさらに一里下ると、羅漢台である。北の山塙から伸びてきている道がある。これこそ南溝から来ている道である。

ここから、再び南に二里上る。連続して二つの山脊を渡る。あたりは叢木がなくなり、峯の上は草や茅で覆われている。高い頂きを越える、南に一里下ると、叢木が覆った丘が有る。ここに雲霧堂がある。老僧がいて、東窓と言った。年は九十八で、いまなお客人とともに拝起しているという。この時に霧はようやく消えた。さらに南に一里半下ると、東から来る大道に出た。そこでそのまま転じて西に下ること、一里半で谷川に至った。架かっている橋を渡り、西に向かえば、そこが方広寺である〔自注1〕。

### ●方広寺を取り巻く地形

思うに、大嶺の南側は、石廩峯の支脈が西に伸び下って、蓮花峯の諸峯となる。大嶺の北側は、雲霧頂より伸びた支脈が西に下り、泉室峯や天台峯の諸峯となる。このふたつの支脈が挟む形で窪地を形成し、方広寺はその窪地の中にある。この寺は梁の天監中の創建である。窪地から西に川が流れ去っているが、両側から閉ざすようにして山が迫っていてとても狭く、ここもまた形勝の地と言えよう〔自注2〕。

### ●天台寺へ

方広寺の西に洗衲池がある。補衣石が溪流の旁らにある。（窪地を出て）水口橋を渡り、すぐに北の方へ山を上る。西北に登ること一里半、さらに又た平行すること一里半で、天台寺である。この寺に全撰という僧侶がいる。名僧である。適々外出しており不在であった。その徒弟の中立というものが若芽のお茶でもてなしてくれた。

### ●天台寺を取り巻く地形

思うに、泉室峯はさらに西に伸びて高い頂を起し、それが突出して天台峯となる。西に垂れた一支脈は、南の方へぐるりと回ることが、まるで大きな尾をふるったかのようにであり、（泉室峯から）南下する

支脈とほとんど接するばかりである。南に流れる川がわずかな渓谷を通過しており、内側に窪地を擁する塊のような地形が、高い平原の上でできている。下の方廣寺と上の天台寺とで、上下の二大奇勝と評価できるだろう。

引き返して方広寺の慶禪と寧禪の房に宿す。

### ●南岳西南部の総括

そもそも、私ははじめは南溝から羅漢台に行き、方広寺に至ろうと考えていた。ところが古龍池に登るあたりで、東の側刀峯に上ろうとして、道を間違え、天柱峯の東に出た。そこでそのまま福巖寺に宿泊することになったが、たまたま仏鼎和尚が木材を運搬するための道を通じようとして、あらたにも羅漢台へ至る道を開いた(のが分かった)。私はそこでこの道を通って西に行くことができた。

くわえて天柱峯・華蓋峯・觀音峯・雲霧頂といった諸峯や大きな盆地に至るまで、すべてが衡山から派生した山脊であり、これらを全てあますところなく見ることができた。まことに願ったり叶ったりのことであった。南溝から羅漢台に行くのは迂遠でもあり、直接天台峯に登るのには及ばない。かくして南嶽の名勝は見尽くした。

〔自注1〕方広寺の正殿は、崇禎の初めに被災した。三仏はともに雨中にさらされている。

〔自注2〕宋代の朱熹と張栻に関わる遺跡があったが、すべて被災して消失している。

### 《23》南岳西部を衡陽県へ

#### ●方広寺から馬跡橋へ

早朝に起きる。風雨はおさまっていない。

寧禪・慶禪の二僧が固く留めたが、私は無理を言って出立し、彼らと別れることとする。慶禪が見送ってくれて、補衲台で別れた。

かくして溪流に沿って西に行く。溪流と小路を南北にはさむ両側の山はすべてうっすらと芽が生えている、のっぺりとしたはげ山である。五里進んで、始めて石崖に樹木が生い茂り、溪流に覆い被さっているところがあつた。崖が水面に影を落とし、溪流の音がして、上下で交互に映えている。さらに又た二里で、溪流を隔てた前の山に、東南から峡谷(とそこを流れる溪流)が流れてくるところがあつた。その水は方広寺からの水と合流して西に流れ去る。

北に向つて崖に登る。崖の下は石崖と樹木とが愈々密になっている。澗水が深い壑を流れており、その中に黒・白・黄の三龍潭がある。両側の崖壁はそそり立っていて古い道が折れ曲がりながら上っている。(そこを上っていると)澗水の音だけが聞こえ、川面は見るべきでない。山の中腹を平行に進むこと三里で、鵝公嘴を過ぎ、龍潭寺に至る。

龍潭寺は天台西峯の下にある。その南は双髻峯である。おもうに天台峯と双髻峯とが西から挟むように伸びていて、その間に龍潭の流れを形成している。龍潭を北に上れば、すぐに龍潭寺である。寺の西は獅子峯である、切り立ってとがって直立している。天台以西の峯は、ここで尽きている。そこから溪流を南に隔てているのは双髻峯の西峯である。蓮花峯以西の峯も、ここで尽きている。

九龍を過ぎ、山の中腹あたりを平行に進むこと五里で、獅子峯の南からその西を繞る。山を下ることさらに五里で、馬跡橋である。衡山の西面の山はここで全く尽きる。橋は東の方は龍潭寺から十里、西の方は湘郷の境界から四十里、西北のかた白高から三十里、南のかた衡

陽の界の孟公坳から五里である。

### ●衡山西側を南下、衡山衡陽県境の界頭へ

馬跡橋から南に澗水を渡る。この澗は、方広寺・九龍から白高に流れるものである。

すぐさま東南に行き、四里で田心に至る。さらにひとつの小橋を越え、一里すすんで、ひとつの小さな山坳（孟公坳）を上る。ここが界頭であるのに気づかなかつた。坳を通過してさらに五里で、東北方向の山間の懸崖から下ってくる水（瀑布）があつた。その高さは数十切あつた。これが小響水塘である。思うに、これもまた衡山から伸びている余波であろう。さらに二里で、北の山の懸崖からくだってくる水があつた。これが大響水塘である。前の崖に懸かつていた小響水塘より規模が大きい。こちらの瀑布は二段に分かれており、転じて峡谷の間に流れ落ちている。まず上段の流れだけが見え、その後で下段の流れが見える。だからはじめは、真つ直ぐに流れ落ちている小響水塘よりも規模が小さいと誤解をしていた（上下段の流れを見て、こちらの方が規模が大きいことが分かつた。）

すぐ前が、寧水橋である。その水がどこから来るのかと質問したことから、南に流れて唐夫沙河を経て衡州の草橋に下るのであることが分かつた。

### ●南岳衡山の地脈の考察

思うに馬跡橋より南に五里にある孟公坳は、衡陽県と衡山県とを分かつの境界に位置するが、ここから北に下る川は、そのまま白高（白果鎮）を経由して一殞江に下る。南に下る川は、そのまま沙河を経て草橋に下る。つまり孟公坳は、ただ両県の境界をなすのみではなく、まことに衡山から西に伸びてきた脈なのである。ただこの山坳は甚だ

平らかなので、西来の山も甚だしくは高くない。だからそれが脈であることが分からなかつたのである。

それがここへ来て始めて分かつたのである。衡山からの山脈は南から来るのではなく、とりもなおさずこの山坳から発している。東では双髻として聳え、さらに東に伸びて蓮花峯の後山となり、さらにまた東に起ちて石廩峯となり、そこで始めて南北の二支に分かれる。南への支脈は岫巖・白石の諸峯となり、北への支脈は雲霧・観音となつてさらに天柱峯と対峙している。

衡山の西側の経路によらなかつたならば、おそらく岫巖峯や白石峯は、衡山から直接延伸してきた山脈だと勘違いをしていたらう。

### 「湖広衡州府衡陽県境」

### ●衡陽県を南下…国清亭、界江を経て、横口へ

寧水橋で昼食を取り、そこから南下する。五里で、国清亭を過ぎる。一小嶺を越えると、穆家洞である。

この洞は（洞穴ではなく）、周囲を山がぐるりと廻り円形をなしいる場所である。川が東南からめぐつてきて東北へ至っている。これが石廩峯の西南の峽中から流れ出ている川である。山筋も同様で東南からめぐつて東北へ至っており、東の方は、衡山の西部につながっている。

洞内を二里進み、再び南へ一嶺を越える。さらに一里進むと、陶朱下洞である。この洞は甚だ狭く、川が真つ直ぐに西に流れ去っている。道筋は南に向かって峡谷に入る。

二里進み、再び一嶺を越えたと、陶朱中洞である。ここでも川が西に流れ去っている。さらに又た南に二里進み、一嶺を上る。この山坳はとても狭い。陶朱三洞であるこの洞は前の二洞よりもやや広いが、

穆洞が周りをぐるりと山々に囲まれていて広々としているのには及ばない。

二里進み、さらに又た一嶺を越えると、界江である。ここでは川が東南から西北に向かって流れ去る。界江の西は大海嶺である。川を溯つて南に一里行き、一山坳を上る。これもとても平かである。つまり衡山の山脈は、西に渡ってきて大海嶺となったのである。この山坳の北面の川は、ただちに西北に流れて唐夫まで下る。南面の川は、ただちに東南に流れて横口に下る。

山坳を越え、あわせて一里で、傍塘である。ここから川に沿って東南に行く。五里で、黒山である。さらに又た五里で、水口である。ここでは川の両側から山が迫ってきていて、その山の壁を破るようにして川が流れ込んでいる。路筋はその川の上を越えて行く。一里で、川ははじめて峡谷から外へ出て、路も平坦になった。さらに又た一里で、横口である。傍塘・黒山と流れて来た川は南に下り、岫嶼峯からの川は西南へ流れてきて、この地で合流する。この地から北のかた岫嶼・白石諸峯を望むととても近くに見える。

南のかた衡州まではなお五十里である。遂に旅店に止宿する。この日進んだ行程は六十里であった。

### 【第三部】

二十九日

#### 《24》横口から南下し、衡陽県城へ

早朝に起きる。雨が注ぐように降っている。そこで泥濘の道を苦勞しながら進む。

溪流に沿って南に行く。一小嶺を越える。ここが上梨坪である。さ

らにまた一小嶺を越える。五里進むと、下梨坪である。ここで道が再び溪流とであう。さらにまた溪流に循って東南に下る。十里で、楊梅灘である。

溪流の上に南北に跨がる石橋がある。溪流は梁の下から東に流れ去り、路は梁を越えて東南に伸びる。五里で排衝に入る。さらにまた排衝に行くこと五里で、南の青山坳を越える。

排衝というのは、譚碧嶺の東南から青山まで崗が伸びており、そこで二筋に分かれ、両方とも西北に転じ、両側から崗が門を開いたように伸びて、長い塙を形成する。そして内側はぐるりを囲まれた耕作地をなす。路はここから入っているが、山塙は青山で極まる。

そこで山坳を越えて南に進む。山道は上ったり下ったりしており、泥濘んで滑りやすく足を留めることができない。着物は汗でぐっしょりと濡れているが、疲労が激しいために、寒さを感じることがない。

十里で、望日坳に下る。(向かいが) 黄沙湾である。蒸江が西南から山沿いに流れてくるのが見える。路はその蒸江にそって東南に下る。さらにまた五里で(青)草橋である。こここそ衡州府である。

#### 《25》衡陽県城

静聞を捜して、暮に緑竹菴天母殿瑞光師のところにいるのにたどり着いた。

速やかに緑竹菴に至り、火に就いて濡れた衣をあぶっていたところ、衡山の古太坪の僧である融止がここにいることが分かった。実は以前、私が古太坪を過ぎて、古龍池に上ったとき、山の中腹あたりにある静室で道を訪ねたことがあった。それが融止とその師兄の応菴「自注1」で、彼らはねんごろに私を引き留めてもてなそうとした。しかし私は急いでいたので誘いを断って辞去した。それがなんと既に私よりも先

に静聞と出会っており、私の行跡を知っていたのであった。思うに、融止は応菴を助けて、南の桂林の七星巖を訪ね、その帰りであったようだ。そこで衡州府に立ち寄ることになり、私と再び出会うこととなったのだ。これもまた一縁である。

#### 《26》 緑竹菴

緑竹菴は衡州府城の北門の外にあつて、華嚴・松蘿といった諸菴の間に位置している。八つの菴が連なっており、全てが幽静明潔であり、唄誦の音が聞こえる。こここそ藩王府が焼香をし、修行する場所である。

思うに桂王府は皇室関係の藩であることから善行を積むのを楽しんでいる。そこで仏教の教えを伝えるのに、熱心なのであろう。

〔自注1〕 両目を失明していた。

三十日

#### 《27》 衡陽遊覧

衡州城外の河街に遊びに行く。泥濘が甚だしい。暮に、天母殿に返り宿す。

〔楚遊日記（1）〕 以上

## 楚遊日記(2)

丁丑の年 崇禎十(一六三七)年

### 【第一部】

〔湖広衡州府衡陽県域〕

〔二月一日〕

#### 《1》衡陽府城探索

早朝に緑竹菴で食事を取る。

城市は泥濘なので、山行がよいと判断した。遂に東南へ一小嶺を越え、湘江のほとりに至る。あわせて一里、湘江を溯り、蒸水が湘江に入る場所に至った。「江を隔てた向こうは、石鼓山と合江亭である。」

#### ●湘江東岸、湖東寺

湘江を渡って東岸に上陸し、東南に行く。この地は坂道が上下している。四里で、把膝菴を過ぎる。さらに又た二里で、把膝嶺を越える。嶺の南は平坦な耕作地が広がっており、耒水が東南に流れてきて、湖東寺の門につきあたり、そこで方向を転じて北に流れ去るのが望見される。湖東寺は、把膝嶺東南三里の平らな耕作地の中にある。寺門は耒水に面している。万暦年間の末年に無懷禪師が建てたもので、後に愍山禪師もやって来てともに棲んでいる。寺域内には静室がある。私に到着したとき、たまたま桂王府の役人が来ていて、齋醮を提供していた。ふたりの宦官により無理矢理に齋醮を挙行させられていたのである。

#### ●南門外の廻雁峯と雁峯寺

そこで西行すること五里で、木子・石子の二小嶺を過ぎる。丁家渡

で湘江を渡れば、そこはもう衡城南門の外であった。

崖を登って廻雁峯に上る。峯はそれほど高くはないが、東は湘水に臨み、北に衡州城を見る。いずれも足の下にある。雁峯寺が廻雁峯の上を覆うように立っていて、隙間がないほどである。しかしあちこちが壊れかかっている。僧がいる千手観音殿で中食を取る。

#### ●城内

食事後、北の方へ市街地に下る。泥でぬかるんでおり、脛が没するほどである。一里進み、南門に入る。四牌坊を経由する。城中の市街地と城の東部の河沿いの市場とはどちらも賑わっている。さらに又た一里進み、桂府王城の東を経由する。さらに又た一里で、郡の役所の西に至る。さらに又た一里で、北門を出る。そして北のかた石鼓山に登る。

#### ●北門外の石鼓山

石鼓山は臨蒸駅のうしろ、武侯廟の東に位置する。湘江が南に流れ、蒸江が北を流れる。この山は地脈が二筋の川の間から渡ってきて、ここで東に突出して峯を形成しているものである。山の前に禹碑亭がある。大禹の《七十二字碑》がその中にある。その刻文は以前に摹写した《望日亭碑》に比べてやや古風である。しかし文字がかすれ、ぼんやりしている。字形についても碑文の内容についてもとても異なるものがある。禹碑亭のうしろは崇業堂である。

石鼓山をさらにのぼると、宣聖殿が中央に対峙している。宣聖殿のうしろには高い楼閣が高く聳えている。下層は廻瀾堂といい、上層は大観楼という。

(その上に登ると)西には延伸する山脊を俯瞰し、衡城には同じ高さの目線で臨み、廻雁峯とは南北で向かい合う。蒸江と湘江とが左右を

夾んでいて、まるで窓や欄干の下を流れて近づいてくるかのようである。ただし、東側の二江が合流するところは、楼閣の背後になっていて、全景を目にすることはできない。

しかし、残りの三面は高いところから形勝を取り集めてみわたすことができる。近景では、市中の一万もの家々から立ち上る炊飯の煙で、あたりは烟り、湘江・蒸江・耒江の川面には真つ白な帆牆が青々とした水面に映えている。「湘江は南から、蒸江は西から、耒江は東南から流れてくる。」遠景では、南岳衡山にかかる雲煙や、嶺の上に茂る樹木などが、盛んになって見え隠れし、重なりあっている。

(石鼓書院がある。) 書院そのものの規模や大きさは、吉安の白鷺大観に及ばないが、この地はとりもなおさず名賢たちが後輩の教育を樂しんだところであり、滕王閣や黄鶴楼のような景勝を兼ね備えており、「韓愈・朱熹・張栻が学門を講じたところである。」白鷺書院がおよぶべくもないものである。

#### ● 生生閣

楼のうしろは七賢祠である。七賢祠のうしろは生生閣である。生生閣は東に向いており、眼下に二江「蒸江と湘江」が合流するのが見え、北に二里のところ耒江が湘江に入るのを俯瞰する。(生生閣は)大観楼と東西向きをかえている。思うに、大観楼は山頂にあつて、南北西三面の奇勝を兼ね収めており、この生生閣は東側の湘江と蒸江の二水が合流する景勝を見尽くすのである(大観楼と生生閣とで、東西南北四方の景勝を味わい尽くせる)。

#### ● 合江亭と六尺鼓

生生閣からさらに東には合江亭がある。この亭の土台あたりはさら

に下の方にあり、川の流れにより近づいている。亭の南の崖の側に、高さ五尺ばかりの穴があいており、合掌しているかのようである。東に向いて開いており、肩を傾けて入れば、二人入ることができる。

これが朱陵洞後門である。いうところの「六尺鼓」を探したが、見つけれなかった。亭の下の、水辺に瀕したところに豎婢のような石がふたつあった。これが乱に遭遇したらそのたびに鳴るといわれているものであるうか。

#### ● 緑竹菴に帰る

大観楼に登ったところから、夕陽に向き合っていたが、黒雲が太陽を次第に覆い始めていた。再び雨が降ってくる兆しであろう。

楼を下り、ぬかるみを踏んで、暗くなってきた中をおして青草橋を過ぎる。東北に二里進み緑竹菴に入った。

晚餐を終えるころには、台風のような強い風が怒号を叫んでいた。この風は、明け方になってようやくやく止んだ。しかし雨はまだ瀟瀟として激しく降っている。

#### 《2》衡州城の地誌

#### ● 衡州城の概要

衡州城の東面は湘江に面している。四門は通じており、残りの北西南の三面は鼎の足のように鼎立している。そして北面は蒸水に夾まれている。衡州城はとても狭い。(地勢として)南へは伸びるが北は削がれている(伸びることができない)からだと思われる(蒸江が北を流れているのでそこでせき止められて北へ街が伸びることができないことをいうか)。北の城外では、青草橋が蒸江の上に跨がっている「この橋はまた韓橋とも呼ばれている。韓愈がここを訪れたときに始めて建設した

ものであるという。しかし、文献にはそのことは記されておらず、今の人たちは、ただ草橋という呼称のみが伝わっている。】。

### ●衡州城を囲む河川

そして石鼓山が湘江と蒸江とを隔てている。思うに（湘江について述べれば）、城の南では、廻雁峯がその上流にあたり、城を北へ洗って行き、石鼓山がその下流に屹立している。そして湘江が衡州城の東面に沿って、城南から城北に至っているのだが、石鼓山において先ず蒸江と合流し、ここで東に転じて、西南から東北へ流れて、次には耒江と合流する。

### ●蒸水

蒸水は、湘江の西岸から合流している。その源は邵陽縣耶薑山に発する。東北に流れて衡陽県の北部を経て、唐夫・衡西三洞の諸水と合流し、また東に流れて望日坳に至って黄沙灣となり、青草橋に出て、石鼓山の東で湘江と合流する。一名を草江といい「青草橋にちなむ名。」、また沙江と言う「黄沙湾にちなむ名。」。蒸と言うのは、川面からもやが蒸気のように立ち上るからである。舟で青草橋から入り、百里で水福に達し、さらに又た八十里で長楽に至る。

### ●耒水

耒水は、湘江の東岸から合流している。その源は郴州の耒山に発する。西北に流れて永興・耒陽県の境域を経由する。さらに又た郴江がある。源を郴州の黄岑山に発する。白豹水は、源を永興県の白豹山に発する。資興水は、源を鉅錫泉に発する。いずれも耒水と合流する。耒水は、さらに又た西に進んで湖東寺に至り、耒口に至って廻雁塔の南で湘江に合流する。郴州・宜章に向かう船は、いずれもここから北流する耒水に入り、（遡っていき、分水嶺をなす）五嶺のひとつであ

る南嶺を通り過ぎ、南流する武水を下って、廣州の滇江に入る。

### 《3》衡陽付近の地脈

来雁塔は、衡州から下へ流れた第二重の水口の山にある。石鼓山は州城の東北に特起して湘江に垂れている、第一重である。一方来雁塔は、蒸水の東、耒水の北に対峙している点で、第二重である。

この来脈は岫巖峯から発し、大海嶺で転じて、青山坳を渡って、望日坳に下り、東南に下って桃花冲となる「ここが緑竹・華嚴の諸庵が、あるいは高くあるいは低く庵を構えているところである」。さらに又た南は湘江に面し、ただちに来雁塔となり、石鼓山とともに、蒸江を左右から差し挟む。

（一方）衡州城を通る地脈は、南の廻雁峯より起り北の石鼓山で尽きている。思うに、この地脈は、邵陽県と常寧県との間を、くねくねと曲がりながらやってくるのだ。東南を湘江にはばまれ、西北は蒸江にはばまれる。南嶺岫巖の諸峯は、この地脈の下流でわだかまっているものであり、同一で通貫している脈ではない。

徐霊期は「南嶺は周廻八百里、廻雁を首とし、嶽麓を足とする」と言い、そこから廻雁峯は南嶺七十二峯の一とみなされてしまった。この衡州城の地脈は孟公坳を経由していないものであり、衡山の地脈が、双髻峯から起こっていることが分かっていないのである。嶽麓の諸峯が盛んに充実していることから見れば、衡州城の地脈は、遠くから延びてきていることが分かる。

### 《4》衡陽滞在。雨のため無為に過ごす。

「二日」

早朝に起きる。

衡陽州城に入り、さらに城南の花薬山に遊ぼうと思った。しかし、雨勢が止まず、結局天母菴に引き返した。

天母菴は丈の長い竹藪の中にあつて、門戸に背の高い松の木が一株ある。庵の外には幾重もの崗がめぐりつつんでおり、翠の竹や青い樹木が鬱蒼と茂っており、それらすべてが庵の窓の格子から近くに見えるている。

庵の前の池は緑色に染まっており、仰ぎ見る緑色の竹木が、池の水面に逆さまに影を落としている。庵うしろの坂は紅のとばりがかけられていよう、桃花が競うように赤く咲き誇っている。「この地の元々の名は桃花冲という」。春の光線が風雨の中に忽然と差し込んできた。どろにまみれた私の靴ではとてもあたりを歩き回ることはず（あたりがぬかるんでいて歩けないことを言っているのか）、雲が晴れることを強く望んだ。

しかし、午後になると、滂沱たる雨脚はいよいよ激しくなってきた。そこでやむを得ず、火爐にあたつてお茶を沸かし、終日ぼんやりとして過ごした。

### 〔三日〕

とても寒い。しかも地面はぬかるんでいて空も曇っている。顧僕が病気になる。そこで菴の中で火爐にあたり、《上封寺募文》を作った。夜中に風の音が再び起こる。朝になつても、風雨は止まない。

### 〔四日〕

雨降りである。菴中で火爐にあたり、《完初上人白石山精舎の引》を作った。

### 〔五日〕

肌を刺すような寒さで、雪交じりの雨が降っている。顧僕に河街「城

東の湘江に面した街で、市場商店が集まっているところである。」に行つて、永州行きの船便の手配をさせる。私は火爐にあたつて、《上封疏》と《精舎引》を清書し、《書懷詩》を作つて瑞光に進呈した。

### 〔六日〕

雨止むも、地面のぬかるみは甚しい。衡州城に入り郷人の金祥甫に挨拶に行く。そのまま河街に出て、暮になつて菴に返る。雨が復た霏霏として降つてきた「金祥甫は江陰の金斗垣の息子である。桂王が封地の衡州に移るのに従つてきて、ここへ来たのである。彼の弟は東華門の牆の下で荆溪壺を扱う店を開いている。」。

### 〔七日〕

#### 《5》桃花冲散策。

午前中に雨が上がる。

静聞は顧僕と一緒に、再び河街に行つて、改めて永州往きの船便を確保することになった。私は（緑竹菴のある桃花冲を探索することにした。）

### ● 桂花園

先ず緑竹菴の東側に沿つて行き、桂花園「ここは桂王府が新たに慶桂堂を構築したところであり、桂を鑑賞する場所として作られたものである」に入る。園の前に並ぶ三株の丹桂は、いずれも幹が高く聳えて天に交わらんばかりであり、枝葉が重なつて蔭をなし、太陽の光を遮っている。その北にある五株の宝珠茶の木は、丹桂の高大さには及ばないが、これも亦た鬱蒼と茂つていて比類ないもの。

### ● 桃花源

桂花園の東は桃花源である。西のかた華嚴・天母の二菴から（脈が）

来て、ここで南と北に分かれて高い山となって対峙し、その中間は重なりあって池を形成する。池の両側は、山崗によって山塙が分割されている。山塙の中には仏教寺院が建ち並び、藩王府や宦官の亭台がその間に分布している。桃花源の上がとりもおさず桃花沖で、ここは山嶺の中の坳（窪地）である。その桃花源の南の最も高い場所に、新しい二つの亭台が設けられている。ひとつは停雲亭といい、また望江亭とも呼ばれる。ふたつめは望湖亭という。これらは、無憂菴のうしろの長い竹藪の中にある。その時、亭に登って長い時間眺望を楽しんだ。そののち緑竹菴に還って中食を取った。

#### ●停雲亭よりの眺望

食後、再び完初上人とともに停雲亭に上った。

（眺望を述べると）ここから北へ桃花沖の坳を越えようと、その東の方の崗が分かれて池を挟み込む。池を越えてさらに遡ると来雁塔である。塔の前には双練堂があり、西に石鼓山と向かい合っている。

振り返って蒸江と湘江とが交わるところを眺める。これもまたとても素晴らしい景勝である。来雁塔の南には、やや下って湘江に臨むところに、登って眺望を楽しめる巨大な楼閣があるが、残念なことに已に傾き壊れている。その楼閣の東は、すぐに耒江が北へ流れて湘江に入る口にあたる。

時に陽光は明るく輝き、山岳とそこにかかる雲、江水とそのほとりに茂る樹木などが、ことごとくその真の姿を表している。そこで完初上人に催促して塔の管理人の僧侶を捜させて、外から開くかんぬきを開けてもらって塔に入り、五層を登って最上層に至った。そこから四面に諸峯を眺望するに、北には惟だ衡岳が最も高く聳え、その次は西の方の雨母山で、さらにその次は北西方の大海嶺である。その他は、

だいたい高低のある丘陵で、とても高く険しいというものはない。そして東方と南方の二方は、からりと開けていて果てしなく広がっている。湘水が廻雁峯から北に流れて衡陽州城の東側を洗い、石鼓山に至りて蒸江を引き受け合流する。ここで東に転じて、来雁塔の下を経て、東に流れて耒水を引き受けて合流して北に流れ去っていく。この三つの川は曲折しており、長江が一望で果てしないところまで見渡せるのには（雄大な眺望という点では）及ばないが、曲がりくねったその様は、特に心引かれて見とれるのに足るものがある。しばらくの間、眺望を楽しんだ。

#### ●菴に帰る

ふと、静聞が船を予約して既に戻っているのではないかと、気になつてきた。そこでそのまま菴に帰った。（静聞が帰っていたので）聞いてみると、船の出発はさらに二日後ということだった。

この日は、一日晴れで、陽光や光をあびて明るく輝く山々を見た。しかし夜になるとまた雨が降ってきた。

#### ●雨母山

思うに、雨母山は府城の西一百里にある。廻雁峯と衡州城とから伸びる山脈上にあるのだが、いまここで眺めてみると四五十里しか離れていないように見える。見えているのは雨母山ではないのかもしれない。あるいは伊山か。しかし伊山はこのような険峻さはないように思える。「大明一統志」に「伊山は衡州府の西三十五里にある。ここはかつて桓伊が書を読んだところである」とある。また雨母山は大舜が巡狩して經由したところである。雲阜山とも言う（「志」には「伊山」……亦名雲阜山。……湘水記、舜南遊經此。」とある）私は長く雨に苦しめられてきて、今ここで雨母山を望んでいるうちに、曲水の宴をする楽しみが想起されてやまなかった。

「八日」

## 《6》城内探索

早朝に起きる。雨は止んだ。午の刻ごろには日が照ってきた。

### ●桂王府

城内に入り、桂王府の前を通り過ぎる。桂王府は、衡州城の中にあつて、円形で城市の半ばを横に貫いている。朱色の垣根と碧の瓦で、まことに新しげで美しい。前面の坊標には「夾輔親潢（皇帝を輔佐する皇族）」と書かれており、正門には「端禮（端正礼儀）」の語が記されている。

### ●一对の白獅子像

門前に二頭の獅子が対峙している。その色は純白である。耒江の内陸百里のところから運ばれてきたと伝える。その地で、はじめはこの石は存在していなかった。ところが王府を建設する段になって、忽然と大地が裂けて洞穴が開き、ふたつの石筍を得た。どちらも高さが一丈五尺あまりもあり、全身が光沢を帯びた白色だった。そこでこれで獅子を作ったということだ。

### ●花薬山

ついで南門を出る。一里で、廻雁峯の麓から西に転じ、一里で花薬山に入る。山はそれほど高くはない。つまり廻雁峯の西から転じて、ぐるっとまわって府城に下った山である。諸峯は鳥や蝶が羽を広げたように伸びていて、四面を囲んで山塙を形成している。寺院がその中にあり、城壁に囲まれた内側にあるかのような。その寺は高く大きく広大で、そのあたりでは第一である。思うに、城北の桃花沖は、多くの静室が星座のようにつらなっていたが、ここ城南の花薬山は、ひと

つの寺院が独立しているところだ。寺の名は報恩光孝禪寺という。寺のうしろの階段を真つ直ぐ上る。山頂には紫雲宮がある。道観である。この場所は、空高く聳えており、四周を眺望できる。

### ●報恩寺

報恩寺に還り、托鉢僧の覚空に遇う「彼は興道の人である」。彼は私より後にこの地に来たのだが、私よりも先にこの寺に至っていたのだ。そこで方丈でしばらく休息する（覚空とも語り合ったのだろう）。

### ●偽の宝物

宋徽宗の弟の上表文を見る。その弟は法名は瓊俊といい、皇族の身分を捨てて雲水として地方を遊覧したのであった。その当時、衡州の知府であつた盧景魁の子が、寺に酒を持ち込んで宴会をしようとして、瓊俊に叱責されて辱められた。知府の盧は瓊俊をつかまえて牢獄に収監した。瓊俊はこつそりと、この上表文を書き、獄卒の王祐に宮中に入つて奏上させた。事情を知つた徽宗は、盧景魁を斬り、王祐を役人として取り立てた。寺にあつた上表文と徽宗の詔令によれば、以上のようなことであつた。寺僧はこれをもって宗門の一大盛事だとしている。しかし、上表文の中では、衡州とすべきを邢州としており、詔令の盧景魁を斬るくだりでは、邢を改めて衡としており、且つ王祐を衡州の太守としている。このお話はなほだ粗略でいかげんである。恐らくは、このお寺で捏造したもので、当時の事実を伝えるものではないのであろう。

### ●城市の西を通つて緑竹菴へ帰る

寺を出て、城市の西側に沿つて、大西門・小西門を過ぎる。城外には、たくさん大きな池や堤防が城を囲んでおり、市街地が連続している。

七里で、東北に草橋を過ぎる。さらに又た二里で、緑竹菴に入る。已に薄暮であった。

この日は雨はすでに止み晴れていたが、中夜に及んで、雨音が再びしとしととしてきて朝に至るまで止まなかった。

## 《7》船で衡陽を出発

〔九日〕

雨勢が止まない。

静聞と顧僕とを催促して、荷物を舟に積み込ませることにした。そして私自身は緑竹菴で、出発の準備が整うのを待つことにした。

正午になるころに、雨の中、瑞光上人と別れて菴を出た。草橋を渡り、城の東部に沿って瞻岳・瀟湘・柴埠の三門を通り過ぎ、舟に入り、同舟の客がそろそろのを待つ。(しかしそろわないので)下船して再び城中に往き、魚肉筍米などの諸物を買う〔毎月二月三月に、大魚が湘江を下ってきて衡山県に至り卵を産む。土地の人々は、みんなして城東の江岸で、布の袋を使って、産卵で沸き立っているような水面の飛沫を囲い取る。そうして採取した魚卵を孵して稚魚にする。(その稚魚を)大きな舟で各省にまで送って販売するのである。全国にある稚魚は全てこの地の産物なのである〕。

正午過ぎに城を出る。(ところが船着き場に行く)舟はお客を降ろして他の場所へ移動したようで、そこにはいなかった。(そこで)顧僕とともに買い物した荷物を攜えて、雨の中を這うようにして舟を捜す。湘江に沿って遡り、鉄楼と廻雁峯の下を通り過ぎると、そこに停泊していた舟もすっかりいなくなっていた。そこで小舟を雇い、流れに沿って再び下り捜したところ、鉄楼の外で見つけた。

思うに、静聞が舟に残って荷物を見守っていたが、舟が移動したに

もかわからず静聞は全くこれを阻むことをせず、舟が別の場所に停泊した際にも、外をうかがうこともしなかった。我々が声を掛けながら舟で通り過ぎるのが聞こえたはずなのに、たくさん舟が雑多に停泊する中であって反応できなかったのだ。かくして我々はこんな風に何度も行き来するはめになった。

結局この日は雨が降り止まず、舟も停泊したままで出発しなかった。

〔十日〕

夜の雨は早朝まで降り止まない。

初めて湘江を通ることになり、遂にこうした情景の中に我が身を置くことになったが、それもまた悪くないだろう。

午前中に、雨が次第に止んできた。暮れに及んで、乗客達がそろった。雨が完全に止んで、やっととも綱を解いて出航した。

五里進んだところで、水府廟の下に停泊する。

## 【第二部】衡陽遭難記

〔十一日〕

### 《8》舟航で新塘站対岸に泊

五更(午前四時頃)に復た雨音を聞く。明け方に次第に晴れてきた。

舟は二十五里進み、南の方へ鉤欄灘を上りこえる。ここは衡陽南の最初の早瀬である。湘江は深く川幅が狭くなっているが、水勢はとも沸き立っているというほどではない。西(南?)に転じ、さらに又た五里で東陽渡である。この北岸は琉璃廠である。ここは桂王府の工房である。さらに又た西に二十里で車江である「あるいは汨江と書く」。ここから北数里のところ雲母山がある。

車江で曲がって東南に行く。十里で雲集潭である。東岸に小山があ

る。雲集潭で再び南に転じ、十里で新塘站である「もと駅があったが、今は廃止されている」。さらに又た六里進み、新塘站上流の対岸に停泊する。

同舟の者は衡州郡の艾行可と石瑤庭である。艾は桂王府の祭祀官である。石の方は、元々は蘇州の人で、衡州に居住していから既に三代になるという。

その時、太陽はまだ残照があった。この場所には他に穀物を載せた舟が二艘停泊していた。それに続いて舟を止めた。さらに我々と同じように湘江を遡ってきた舟が五六艘あり、それらも我が舟のあとについて停泊した。停泊したところの岸壁の上には村落はなかった。(人里離れたところなので危険かなとは思ったが)、石瑤庭と前の舟に搭乘していた徽州出身の人は、いずれも各地を旅行して旅慣れており、また艾行可も地元の人なので、どこが安全で停泊するのによく、どこが危険でスルーすべきかについては(彼らに従えばよく)、私は意見を述べて関与するべきではない、と考えた。そこでこの地に停泊することを容認した。

暮れに及び、月の光がとても明るく輝いている。私は思った、新春に入ってから、まだ月を見たことがなかった、と。また舟に入った前の晩は、いわゆる「瀟湘夜雨」の状況であり、「夜雨」の情景を楽しみ、今日の夕べは「湘浦月明(湘江のほとりの月明かり)」の状況で、「月明」の情景を楽しめた。二晩は、それぞれ別の景勝をほしのままに楽しめた。このためところが踊るのを禁じ得なかった。

### 《9》強盗の襲撃

#### ●対岸の怪しい泣き声

しばらくして、ふと、岸のほとりの水辺あたりでむせび泣く声がす

るのが聞こえてきた。幼児のようでもあり、女性のようでもあった。一更(二時間)あまりしても止まない。停泊している舟はシンとして置いて声なく、事情を問おうとするものはいなかった。私はこの声を聞いて眠ることができなかった。

床の中で、詩を作ってこれを憐もうと考えた。そして「簫管孤舟悲赤壁」「琵琶兩袖濕青衫」の句や、「灘驚廻雁天方一」「月叫杜鵑更已三」といった句を作った。

しかし、泣き声については、人をだます策略があるのではないかと心配し、だれか他の人が、泣いている者を憐んで舟に導き入れれば、策略をたくらむものがそのあとに続いてやってくるだろう、と考えた。しかし、それが強盗であるとは予測もつかなかった。

#### ●静聞のやさしさが仇に

午後十時頃になると、静聞は(泣き声を無視するという)我慢がでさなくなると、小便を理由に岸に登った「静聞は戒律を大変厳しく守る人で、痰を吐いたり小便をしたりするのに決して川にはしなかった」。静聞が泣くものに声をかけて問うと、それは童子であった。年の頃は十四五才で、まだお下げ髪だった。

その子が嘘をついて言った「王宦官の家から逃げてきました。年は十二才になったばかりです。王は酒乱で、酔うと大きな杖をふるって虐待するのです。そこで逃げ出して暴力を避けようとしているのです」と。静聞は王の家に帰った方がよいと勧め、加えて彼を優しくいたわり慰めた。その子は、また岸辺で眠ってしまった。

#### ●強盗の襲来

静聞が舟に戻ってから、あまりたたないうちに、群盗が「殺すぞ！」と叫びながら舟に乗り込んできた。松明と刀剣とが乱舞し、刺したり

斬ったりした。

私はそのときまだ眠っていなかった。急いで、寢床の板の下から旅費の入った函を取り出し、他の場所へ移そうとした。艾行可の船室を通りすぎ、船尾から川に向かおうと思ったが、船尾は盗賊がちょうど剣を振り回して塞いでおり、そこから出ることはできなかった。そこで力をこめて船の屋根に隙間を拡げて、早々に函を川へ投げ込んだ。再び寢室に走り、衣服を探して身につけた。静聞と顧僕、艾氏石氏の主従たちは、あるものは裸身で、あるものは夜具にくるまって、みんなして船の一角に集まり固まっていた。

盗賊は前方からは中程の船室から侵入し、うしろからは後門を破って乱入し、前後から刀戟をめちやくちやに振り回して殺戮を行い、船の人々は裸身に近い状況であり被害を受けないものはいないというありさま。

#### ●必死の脱出

私は考えた、このままではきつと盗賊になにもかも、命も執られてしまうだろう、と。持っている絹織物などは逃げるのに邪魔になるので、すべて捨てた。

人々は跪いて命だけはと請うも、盗賊どもは殺戮をやめない。私たちは、遂に船室から外へ飛び出し、船の屋根をかかげ拡げて、そこから川に飛び込んだ。飛び込むのは私が最も遅れ、しかも足が船具に絡まり、ついに壊れた屋根と一緒に、逆さまになって転落した。頭が先に河底にいたり、耳も鼻も水でいっぱいになった。急いで躍り上がって立つと、幸いにも水深は浅く、腰くらいであった。そこで流れに逆らって川を遡及し、こっそりと逃げて別のところに避難している隣船にたどり着いた。

そこで飛び込むようにしてその船に乗り込んだ。その時長く川に浸っていたので、ひどく凍えていた。その隣船の客が、船人の夜具を私に掛けてくれ、私はその船の中に臥せった。船は流れを三四里ほど遡り、香爐山の麓で停泊した。思うに、湘江の対岸であろう。

#### ●事件の振り返り

振り返って襲われた船を眺めてみると、炎が赤々と燃えていた。群盗たちは一斉に怒号（ときの声）をあげ、それを合図に立ち去った。まもなく同じところに停泊していた他の船もこちらに移動してきた。そして「南京の大夫である徐霞客さんが、身に四つの創を受けた」と言うものがいた。私はこれ聞き、そのでたらめさに苦笑した。しかし考えてみると、幸いなことに、刃物が乱暴に振り回され交錯するところに身をさらしながら、結局一創すらも受けなかったわけで、これは本当に天与の僥倖と言わざるを得ない。

ただ静聞と顧僕についてはどこでどうしているのか、分からない。けれどもこう考えた、一緒にドボンと川に飛び込んだはずなので、きっと虎口を免れることができているにちがいない、と。荷物についてはどうしようもなからう。

#### ●書籍の亡逸を嘆く

ただ張侯宗璉が著した《南程續記》一帙は、とりもなおさず張侯の手筆で、オリジナルがひとつあるだけのものであり、その家に二百年あまり珍藏されていたものだ。それが一たび私の手に渡ったところで、遂にこの災難にあったのである。嘆き、憤らないわけにはいかない。

#### ●被害を受けた人々

この時、船人の父子もみな盗賊に殺された。隣の船には悲しみ泣き叫ぶ声でいっぱいだった。他の船はといえば、石瑤庭と、艾行可の下

僕と顧僕らは、皆盗賊に襲われ刺され傷けられ、身ひとつでこの船に逃れてきて、私と一緒に夜具に伏した。そこで始めて分かった、「四創せらるる者」というのは私の下僕の顧僕のことだったのだ。

前の船室にいた五人の徽州商人は皆木材を扱う商人であった。そのうち二人は、この隣船に逃れてきていて、残りの三人についてはその所在（や生死）が分からない。そして私の船室のものではなお静聞が行方知れずである。

うしろの船室では艾行可とその友人の曾姓なる者がいたが、彼らについてどうであるのか分からない。

#### ●荷物の算段

私はその時、大勢の人たちの中で臥していた。隣では顧僕が苦しみの声を上げている。その中で私は考えた、行李は燃やされあるいは強奪されてもはや無くなっているとしても、川に投げ込んだ旅費の入った函は、もしかすると河底にあつて、探し求めることができるかもしれない。ただし、明るくなってからだと、函を回収しようとしているところを誰かに見られ、奪われてしまうかもしれない、と心配になった。そこで明け方になってすぐに取りに行こうかと考えたが、今や私は一糸まとわぬ姿である、どうやって岸にあがったらよいか分からない。

この晩は、初めは月がとて明かだった。盗賊がやってくるころには、已に四面に雲が立ちこめていた。明け方になると、雨が再びしとしと降り始めた。

〔十二日〕

《9》衡州府へ生還

#### ●戴某から衣服を譲ってもらう

隣の舟の客で戴という姓の者が、私をたいそう憐んでくれて、自分の肌着と一重のズボンそれぞれ一着を私に分け与えてくれた。私は身に何一つまとっていないが、髻の中を探ってみたところ銀の耳かきが一本あった。「私は平時は簪を用いない。（ただ）今回の旅行で蘇州に至ったところで、二十年前のことを思い出した。福建（の九鯉湖）から錢塘江の水辺まで返ってきたところで、路銀が尽きてしまったのだ。そのときはたまたま髻に刺していた簪一刺しがあり、それを売って、半分は食費にあて、半分を使って輿を雇い、そこでやっと杭州の昭慶寺の金心月和尚のところへたどり着くことができた。そこで今回の旅遊では簪の代わりに耳かきを一本用意しておき、ひとつには髪に挿して用いるため、ひとつには臨時の緊急事態への備えとしていたのだ。今回、湘江に落下する羽目になったわけだが、幸いなことにこの物ははずれることもなくて、髪もばらばらにならずにすんだ（しかも命を長らえた）。しかし艾行可はざんばら髪になって水中を逃げ回り、結局救われることはなかった。簪という小さな物ではあるが、（その有無によって死生を分けるとは）まことに天意、天命というべきであろう」。そこで、それを報酬として与えた。あわただしく、その姓名だけを問うて（おそらくお札を言つて）別れた。

#### ●ようやく身繕いができる

その時、顧僕も裸で身にもとう物を持たなかった。そこで私は、戴氏から与えられたズボンを顧僕に与え、自分ももらった肌を着た。しかしその肌着は腰までの長さしかなかった（下半身はすっぽんぽんであった）。旁らにいた水主が一切れの破布を私にくれた。そこでそれで下半身の前部を覆った。そうして身繕いができ、やっと岸に上がった。

●助かった一行

上陸した岸は、まだ湘江の北東の岸だった。そこで岸に沿って北に行く。

その時、一緒に上陸したのは、私と顧僕、石瑤庭と艾行可の下僕、及び徽州からの客が二人、合計六人の一行で、みな幽囚の鬼怪のようで、およそ人間らしからぬ「餓鬼」のような姿であった。

●ポロポロの体で行方不明者の搜索

裸の体には明け方の風が骨にしみ通るほど冷たく、靴もない足を砂礫が突き刺さって裂く。寒さと痛みで、前に進むもうとするがそれはならず、かといって止まろうとするがそれもならない。(それでもよろしなから) 四里進むと、空が漸く明るくなってきて、強奪されて燃やされた舟が、湘江を隔てたところにあるのが見えてきた。川上や川下にもたくさん船がもやっていたが、われわれのひどい姿を見て、だれも渡江してくれようとはしない。繰り返して泣き叫びながら頼んだが、われわれを信じてくれるものはだれひとりいなかった。艾行可の下僕は川を隔ててその主人を呼び、わたしは川を隔てて静聞を呼び、徽州の客もまたその同伴の仲間呼んだ。それぞれ呼びかけたが、一人としてこれに応じるものはいなかった。

●静聞との再会

そうこうしているうちに、私の名前を呼ぶ声が聞こえた。わたしはこれは静聞だ、と分かった。心の中でひそかに喜び、「われわれ三人はみな無事だった」と言った。速やかに静聞と会いたいと思っていると、湘江の対岸にいた地元民が、船を出してくれて私を渡河させてくれた。

燃えている船に至り、遙かに静聞の姿を認め、喜びを更に増した。

そこで川に入って、昨日川に投じた竹の箱を探し求めようとした。静聞は私の行動を眺めて、何をしているのかと問い、遠くから私に呼びかけて言った。「箱はここにありません。しかし箱の中にあつた資金はなくなっていました。手書きで書写した《禹碑》と《衡州統志》は、まだ濡れずにすんでいます」と。

対岸に登ると、静聞が燃える船から何件かの衣類や竹かごを救出しており、それらを沙岸に置き、側で見守っているのが見えた。私が凍えているのを見て、急いで着ていた衣を脱いで私に着せてくれた。さらに私のズボン一本と足袋一足を救出していた。それらは、火で焦げ、水に浸っていたので、燃え残りの熾火であぶって乾かした。

●なお行方知れずの艾行可

この時点で、徽州の客五人はみな無事であった。艾氏一行の四人は、二人の友人と下僕は怪我はしていたが生存していた。ただ艾行可本人だけは行方が分からなかった。そこで艾の二人の友人と下僕とで、地元の人に船を出してもらって上流下流に手分けしてあまねく探し求めた。われわれは河岸の砂州で衣服を乾かすことにし、消息が伝えられるのを待つことにした。

●やっと粥にありつく

時にとても空腹だったが、鍋釜の類いは全て燃えつきていた。すると静聞が川に潜ってひとつの鉄鍋を見つけてきた。静聞は再び川に潜り、湿った穀物数斗を得た「先に乾いた穀物数斗を取っていたのだが、それらはすべて艾氏の下僕に持ち去られてしまった」。その穀物で粥を煮、遭難した全ての人々に食べさせ、自分は最後の残りを食べるのであった。

●一旦衡州城へ帰還

午後になったが、艾行可の消息は分からないままである。徽州の客

たちは、一足先に船に乗って衡州城に戻った。私は、石瑤庭、艾行可の友人の曾某、艾行可の下僕と一緒に、徽州の客と同様に地元民の船を雇って衡州城に還ることとした。私は「艾行可は先に帰っているだろう」と根拠もなく考えた。

地元の船はたいそう大きかったが、操舵者は一人しかいない。(そのため船の運航がスムーズではなく)川の流れに順って下っているのだが、二十里あまりも行かないうちに、車江のところですでに薄暮になった。さらに二十里で東陽渡に至るころは、もはや深夜であった。そのころ、月が再び出てあたりを明るく照らすようになった。その月明かりの中を三十里進み、ようやく衡州城の鉄樓門に到着した。時はもはや五鼓(あけがた)であった。艾行可を捜す使者が先に衡州城に戻っていたので、消息を聞いたが、結局全く分からないとのことだった。

## 《10》静聞が語る事の顛末

### ●僧侶とお経には手を出さない盗賊

この時よりも前のことだが、静聞は、私たちが裸で川に飛び込んでしまったが、彼のお経を収めていた竹の背負子が小舟の屋根の側にあるのを見て、ついに逃げずにそこに留まることを選択した。命を省みず懇願したところ、盗賊はお経には手をつけなかった。

### ●蹂躪される徐霞客の荷物(旅行の携帯品が分かる)

盗賊は、私の竹籠を壊したが、籠の中には書籍や書類の類いばかりだったため、籠を逆さまにして中身を船底にぶちまけた。それを静聞が懇願しながら拾い集め、壊れた竹かごの中に収納した。盗賊はそうした静聞の行為も禁じなかった「籠の中身は『大明一統志』などの書籍類、及び文滄持・黄石齋・錢牧齋が私に寄せてくれた手紙、そして私が綴ってきた

日記と様々な遊記の下書きであった(これらは無事であった)。ただ劉愚公にあった書簡体の小論の草稿はなくなっていた」。

盗賊は次に私の革製の鞆を開き、中に絹織物があるのを見つけると、すぐにそれらすべてを、(持参した、あるいはそこらにあった)袋の中に入れて持ち去った。この鞆には、陳継儒が麗江の土司木公にあてた敘文の原稿、さらに陳継儒が雲南鷄足山の僧侶弘辨と安仁にあてた書簡、蒼悟道の顧東曙輩にあてた顧の家族からの書簡、すべてで数十通があった。さらにまた、張宗璉が著述した『南程統記』があった。

この書は、宣徳年間の初め、張侯が広東に特使として派遣されたときに作成された自筆稿本であり、張侯の一族が二百年あまりのあいだ珍藏していたもので、私とその一族に懇願して入手したものである。莊昶と陳獻章(陳白沙)の法帖でつつみ、書簡の中にまじえてしまっておいたものである。静聞はそうとは知らず、またお願いして留めてもらう暇もないままに、すべて持ち去られてしまった。どこかにうち捨てられたのではないか、と考えると、まことに痛ましく残念なことである。

盗賊はさらに私の掛箱(鍵つき鞆)も手にした。中に家藏の『晴山堂法帖』六卷、鉄針、錫製の瓶、陳用卿作の壺があった。いずれも貴重な物である。盗賊は鞆を手にしたものの蓋を開けることが出来ず、早々にそのまま袋の中に入れた。

盗賊はさらに私の大型衣装ケースをぶちやぶり、なかにあつた果実や餅を手にとってみんな船底に投げ込んだ。そして曹学佺の「名勝志」三卷、「雲南志」四卷、及び合刻「遊記」十卷は、すべて灰燼に帰したのであった。

艾行可の船艙の各種物品も、ほとんどが燃え尽きていた。ただ石瑤

庭の一つの竹籠だけが、未開封のままに残されていた。

### ● 盗賊の放火と静聞の負傷

盗賊は立ち去るに際し、すぐさま後ろの船室に火を放った。その時、静聞はちょうどその側に留まっていた、盗賊が立ち去るのを待って、すぐさま火を消そうと思っていた。ところが我々の船室の入口からも火の手が上がった。そこで静聞は再び川に入り、水をくんで火に注いで消そうとした。すると盗賊の一人が、静聞が水に入る音を聞きつけ、まだ人がいるかと思ひ（戻ってきた）。そして静聞を見つけると、二度切りつけてから立ち去った。静聞は負傷し、結局火を消すことはできなかった。

### ● 必死で遺留荷物を回収する静聞

その時、もやっていた船たちは遙か遠くに避難していたが、二艘の穀物船はなおそこに留まっていた。静聞が声を掛けたが、その船は（助けに来るどころか）返って遠くに移動していった。静聞はそこで川に入り、落ちていた小屋の屋根で筏を作った。すみやかにお経を収めた籠や、私の燃え残りの物品などを拾い集め、川を渡って穀物船に持って行った。

さらに燃える火をもとめせずに再び船に入り、艾行可の衣服、寝具、書籍、穀物、及び石瑤庭の竹籠を取り、また篷の筏の上に置いて、再び穀物船に運んだ。荷物の回収を行うこと三回目で、私たちの船は沈没した。静聞は川底から湿った衣を三四枚拾い上げ、穀物船に渡った。

### ● 遺留荷物を船人に盗まれる

すると、穀物船の人が、暗闇に乗じて私たちの絹織物等を盗み隠してしまった。残っていたのは粗末な衣服と寝具だけだった。静聞はそ

こで残った荷物を重ね、河岸の砂州に移動した。穀物船も離れていった。そして私たちが川を渡ってくるまで荷物を守って待っていたのだった。

### ● 石瑤庭の非道な振る舞い

石瑤庭と艾行可の下僕は、救出された物品を見て、それぞれ自分のものだと思つて全て持ち去った。そのとき静聞が石瑤庭に「これらはみなあなたの物ですか」と問うと、石瑤庭は大いに静聞を罵つて言った「みんな、おまえが岸に登って盗賊を引き込んだと疑っているぞ」静聞が、泣いている子どもにわけを尋ねたことを言っているのだ。おまえは本当に悪いやつだ。私の荷物を覆い隠そうとしていただろう」と。石瑤庭は全く分かっていない、静聞が彼のために、刃に身をさらし、寒さをものともせず、燃えさかる火をかいぐり、川をおし渡つて、彼の荷物を奪還して保護し、持ち主に返そうとしていたことを。それを彼は感謝するどころか、かえつて静聞を罵るとは。

盗賊ですら、僧侶である静聞に対し情けをかけた。石瑤庭は、盗賊にも劣るやつだ。人心の荒廃、ここに極まった。

「十三日」

### 《12》同郷の金祥甫に救済を頼む

未明に岸に登る。考えたが、どこに行く宛てもない。そこで思つたのは、金祥甫は他郷にいる旧知の間柄である、彼のところに身を寄せ、なんとかしても逗留させてもらわねば、と。鉄楼門が開くのを待って、衡陽城に入城する。急いで金祥甫の寓居に赴き、盗賊に襲われたことの顛末を告げた。金祥甫は悲しみいたんでくれた。

私ははじめ、桂王府から数十金を借用し、金祥甫に保証人をお願い

し、さらに、あとから金祥甫が江陰の家に帰ったときに、(借用した代金を私の実家で用意し、その金を金祥甫が) 受け取って、衡陽城に持って帰るようにお願いした。そうして私たちは西へ向かう大願の旅を終わらせるのがよいだろう思った。すると金祥甫が言うには、「桂王府には貸せるような銀はない」と。そして私に、もしここで故郷に引き返すのならば、送別として、いろいろと取り計らって衣服や装備を整えてあげてもよい、と進めた。私は考えた「困難に直面するたびに引き返していたら、「缺」何度も資金をもとめるようなことになれば、妻子は、私が自由に旅に出るのを行くのを認める理由がなくなるが、かといって私の行きたいとする気持ちを曲げることを望まないだろう、と。そこで金祥甫に、ここはひとつ志を曲げても助けてください、と頼み込んだ。金祥甫は「はいはい(あるいは「はい」)と言った。

### 【第三部】

#### 《13》金祥甫の家での無為の日々

〔十四・十五日〕

ずっと金祥甫の寓居に滞在した。

〔十六日〕

金祥甫が私のために、王府の属官達に対し、揭示物を揭示してくれた。二十二日に属官達による会合を開き、そこで徐霞客を幫助することを話し合うこととする」というものであったらしい。

そもそも、金祥甫はこう言っていた「自分自身にはあなたに貸してあげるお金は無い。そこで広く属官達に募り、皆で共同して支援しようと思っっている」と。私は、それは難しいだろうと考えた。

すると静聞が言うには、彼は久しく、願掛けとして、永続的な僧侶のための田畑を購入したいと思っていた。いま属官達から支援を得られたならば、すぐにそれを私に貸与して西方旅行の資金とする。そして私がここに戻ってきたときに、支援してくれた金額に応じて、彼らのために田畑を買って寺院に寄附し、支援してくれた人の名前を石碑に刻んで残すのはどうか。そうすれば、西方旅行の資金を得ること、僧侶のための田畑を購入することの二つの願いが両得になるのではないか、と。

私はどうすることもできず、彼の話を聞くしかなかった。

〔十七・十八日〕

両日とも金祥甫の寓居に滞在した。

その当時私は、頭の前から足の先まで、衣服類は何から何まですべて金祥甫によらないものはなかった。しかも、願僕はいまだに髪はざんばらで素足であり、衣服は身体を覆いきれないさまだだった。まさに金祥甫の寓居で「株を守る」ありさまだった(成果のあがらないことを、ただ手をこまねいて待っているだけだった)。

衡陽城に戻ってきてから、晴の日はなく、雨が降るか曇りかで、道路のぬかるみは尋常ではない。そこで一步も外にでることはなかった。

#### 《14》好漢劉明宇

〔十九日〕

劉明宇に会いに行く。一日中、彼の家の楼閣の上で過ごす。

劉明宇は、衡州出身で元の兵部尚書であった劉堯誨の養子である。若いころから力持ちで、意気盛んな好漢であった。そこで劉尚書は彼を見込んで養子にしたのである。その劉明宇は今年ですでに五十六歳

で、肉食を断ってはいるが酒は避けない。

劉は、私が難に遭遇したと聞き、すぐに金祥甫の寓居いる私を訪ねてきてくれて、盗賊をつかまえてやろうという。私は辞謝して言った。「持ち物はすでに持ち去られてしまいました。仮に取り戻すことができたとしても、西方旅行の費用になるようなものはありません。ただ残念なことは、張侯の『南程統記』一冊である。これぞ張の家に二百年以上にわたって蔵されていたものである。また陳繼儒達が麗江の人々に宛てた書簡は、盗賊にとつては無用なものであるが、私にとつては二度と手に入れることができない貴重なものである、と。」

すると劉明宇は、神に誓いを立てて言う。「金銭は取り戻すことができないとしても、きつとあなたのために『南程統記』と書簡類は取り戻します」と。私はどうすることもできず、ただ彼の話の話を聞くしかなかった。

〔二十日〕

#### 《14》衡陽散策

晴天。柴埠門から城外へ出て散歩し、鉄樓門から入城した。散歩の途中で折れ曲がった宝珠茶の木を見かけた。花は大きく、花びらも稠密で、陽光のもとで赤く照り映えていた。さらに折れ曲がった千葉緋桃も見えた。今にも開きそうな花弁がとても大きかった。これらの花は、どちらも以前滞在していた、城外の天母庵のある桃花沖の名物である。そこで桃花沖に行つて花を觀賞しようと思った。

しかし昨日の午後に、突然、衡州城の七つの門が早々に閉ざされたことがあった。思うに、東安県で大盗が攻めてきて、県城に迫ったことがあったり、祁陽県でも盗賊が殺戮強奪を働いたりしたことがあった

ためだろう。(そのため盗賊を警戒して早めに城門を閉ざしたのでらう。) 私は(桃花沖まで行つてしまうと、)城外に取り残されてしまうかもしれないと心配し、(桃花沖へは行かず)また城内に戻った。そして明日、静聞と一緒に桃花沖へ行つて遊覧することを取り決めた。

〔二十一日〕

#### 《15》劉明宇がもたらした珍珠を味わう

暗く空を覆う雲がまた垂れ込めている。正午ごろに、雨がしきりに降ってきた。結局外出できなかった。

この日、衡陽城の南門で、盗賊七人が捕獲され、その自供により逮捕された仲間が百人に及んだ。劉明宇は、私のために、罪人を逮捕している捕房に、盗品に関する書類を提出してくれた。

午後、劉明宇が、蕨の芽を用意して私に食事として振る舞ってくれた。これと、先に天母殿にいたときに食べた葵菜とあわせて、精進料理の絶品二品である。私が思い出すところでは、王維に「松の下で清らかな御齋を取ろうとして露をおいた葵を手に取る」の句があり、また黄庭堅に「蕨の芽の開いたさまは子どもの拳のようだ」の句がある。かつてこの葵と蕨にあこがれ、苴蓴(ミョウガ)とあわせて、三大絶品だと思っていた。しかし、私の故郷にはこれらの食べ物はいずれも無かった。それが衡州に至ると、天母殿で葵を食べ、ここで蕨をいただくことになった。風味がとてもよい。思うに、葵はゆるやかでもろく、蕨はなめらかで柔らかい。それぞれに特長があり、すばらしい。

この日の午後に、突然風が吹き始め、とても寒くなった。夜半に至るに風は叫ぶように吹き荒れ、雨も降り止まない。

〔二十二日〕

《16》緑竹園と石鼓山再訪

早朝に起きた。風も雨も止んでいた。

午前に、静聞とともに瞻岳門から城外へ出る。草橋を越え、緑竹園を訪ねる。桃の花は咲き誇り、柳は以前と変わらず緑の色が鮮やかである。思わず、昔と変わらぬ花木と、変わり果てた人々との対比を感じた。

園に入り、瑞光和尚に会おうと思ったが不在で会えなかった。そこで彼の弟子達と桂花園に入ったところ、宝珠が盛大に開いていた。大きな花は盤ほどもあり、色は深紅で花瓣は緊密である。一万もの花のついた枝が、密集する緑の上に浮かび上がっていて、まことに一大景観であった。しばらくそぞろ歩きをして、我が身が艱難の中にあることを忘れることができた。

窪地の中の溪流を隔てたところを眺めると、桃花の紅と竹の色の緑とが、それぞれコントラストをなして鮮やかである。その中に流れに臨んで高殿がある。その高殿の上部に、作られたばかりの亭子があり、亭子についてはかつてはまだ作られていなかった。そこで早速階段を上って高殿に入った。変わらぬ花の美しさ、芳しい香りを感じるにつけ、人世の無常、人間のはかなさを詠嘆した。高殿（山）を上って上部に備えられている亭子で腰をおろした。南の方に湘江の流れを眺め、西の方に落日を見るや、慄然たる、失意の思いにかられた。

そこで引き返し草橋を渡り、再び石鼓に登る。合江亭から東に下って、河沿いで二豎石を見る。これは二つの石柱で、それを支える石がある。石柱の表面に「対句（対聯）」が彫られている。ひとつは「流

れに臨んで任公の釣針を下宋と思い」で、もうひとつは「川を眺めて孺子の歌を長吟する」とある。これはいわゆる石鼓ではなかった。

二度、この地を訪れたが、どちらも落日の時だった。見えている風景は異ならないのに、人のことは多くが変わってしまった。感懐を興さないわけにはいかない。

〔二十三日〕

《17》亡くなった艾可行を弔う

青空が広がり晴れ渡っている。

城市の南郊に出ようと思い、先ずは鉄樓門から城外へ出る。艾可行の家を訪ね、母屋に入って彼の母親に会った。

行可の遺体は見つかってから二日たっていた。おおよそのことでは、遺体は遭難した場所から十里下流の雲集潭にあったという。彼の母親が言うには「昨日、私自身がその場所に行つて、遺体を撫で、一声呼びかけたところ、たちまち、遺体の眼の中の血がほとばしり出て、私に降り注いだのです」と。ああ、死んでしまった者ですら、このように涙を流すのだ。まして生き残っているものはどうして泣かすにはおられようか。

遺体の傷について尋ねると、「顔にふた刺しの刺し傷があった」と言う（つまり刀傷は致命傷ではなかった）。思うに実際には波濤の神である陽侯が、盗賊の暴虐を助長して、艾可行を殺したのであろう（艾可行は水死であったと言っているのである）。しかし「陽侯の手にかかれば肢体がバラバラになる」と言われているのは、でたらめな伝承だ（艾可行も肢体バラバラではない）。

時に艾可行の棺は、衡陽城南の洪鑑の山房の側に留め置かれている

という。洪鑑は、艾行可の友人であり、また親族でもあった。そこへちようど、畢甫が風水師を伴ってやって来た。これから葬儀を営もうというのである。そこで彼らと一緒に行く。

廻雁峯の西麓に沿って進み、南へ向かって山嶺や山塙を越え、四里でその場所に着いた。そこは山峯がふぞろいでぎざぎざになっている山嶺に囲まれており、その間に門を閉ざして仏教修行に励むものたちの精舎がある。そのようすは桃花沖と同じであるが、桃花沖では精舎が軒を連ねていたが、ここではそれには及ばない。しかし、静かで奥深いさまは、桃花沖に勝るものがある。

洪君の精舎は、前面に緑の竹藪があり、後面は高い山嶺が囲んでいる。三棟の室があり、真ん中の室には仏像が安置され、左側の室は読書の間であり、右側の室は炊事場である。そしてそれぞれの前後に休憩できる廊下がついている。庭の中には盆に植えた花がたくさん並んでおり、これまた隠棲のための清浄な世界である。

艾行可の棺は、後ろの山嶺の側に留められていた。すみやかに静聞と一緒に、荆棘をかき分けて行き、これを礼拝し、叩拝した。私は「彼はともに天涯の地で困難に遭遇した人であり、その一死に対し私はこれからの一生を耐えきれようか」の句を唱えた。洪君も畢君も、皆な涙を拭うのであった。

### 《18》水府殿での占い

洪鑑の所から帰り、廻雁峯の南に至る。湘江の上に翼を広げたような神廟があった。これが水府殿である。これより以前、艾行可の弟が私にこう言った「ずっと兄の遺体を探し求めているのですが、なかなか見つかりませんでした。ところが水府殿のお札のお告げにより、遺体を雲集潭で見つけることができましたのです」と。この話を聞いて、私

はたいそう興味を引かれていた。

そこでここに至って水府殿に入り、神を拝謁した。「荊州（湖北）經由」と「粵西（広西）經由」の二つのルートを上げて、どちらがよいかを神様に決めてもらった。すると「粵西經由」が大いに吉である、と出た。「その当時、私は粵西から滇（雲南）に入ろうと思っていたが、盗賊の財産を強奪されてしまい、旅行資金を措置する手立てが無かった。その中である人が「荊州經由を取り、奎之叔という者に資金の援助を求めるとよい」と勧めてくれた。当時、奎之は、荊州の副長官であった。ただここから荊州に至るには、さらにまた半月の旅程が必要であった。さらに時節も事態も予測できない。そこで神におうかがいを立てたのである」。

二箇所からの借金についても神様におうかがいを立てたが、「どちらも満額はないうらう」とのことだった。「二箇所とは、金祥甫と劉明宇のことである」。私は神様の明察にますますの敬意を抱いた。この殿も藩府が新しく建設したもののようで、その神は極めて靈驗あらたかである。道程を尋ねるものはみな、ここで下された靈驗を記録して、それを身につけて旅をするのである。

ふたたび北に向かい、廻雁峯に登り、千手觀音閣の東寮で食事を取る。取り終えろとすぐに觀音閣の西の小道から下り、さらに西に進んで花葉寺に入る。ここで再び覚空とともに、方丈で食事を取る。薄暮に、南門から城内に入る。

この日は、風は穏やかで日も麗かだった。この春一番の好天だという。

### 《18》金祥甫の家に滞在、盜賊騒ぎや流言に惑わされる民衆

「二十四日」

金祥甫の寓居に滞在する。同郷の托鉢僧覺空が訪ねて来てくれた。午後、一人で柴埠門から城外へ出て、蒸酥を買い、鉄楼門から城内に戻る。

夜の十時頃、遠くの城壁のあたりから、ときの声のような叫び声が聞こえてきた。翌朝聞いたところによると、盗賊が西の城壁に穴を開け、ほとんど侵入されそうになっていたが、巡邏者が発見して叫び声をあげて人々を集めることができ、そこでやっと盗賊を追い払うことができた、ということだった。

〔二十五日〕

小西門を出でて、西の城壁の穴をあげられた所を観察した。思うに衡陽城の城壁はとても低い。なかでも西の城壁は最も損なわれている。一方、城市の東側は河街の市場で、城壁に柱をかけているので、それをよじ登って入ることができる。それゆえ穴をあける必要すらないのである。

その後、西華門をめぐり、王府を囲む壁の後門に沿って進み「後宰門外の店舗で、三塊の白石を売っていた。ひとつ目は、指のような尖った部分が三つ突き出しており、長さが二尺である。潔白でとてもすばらしい。ふたつ目のものは一尺四方であり、表面に溝や窪み、突起があつて、水を溜めることができるようになってる。ただ、裝飾に乏しく、ひとつ目のものに及ばない。みつつ目のものは鍾乳石のもので、三番目の評価となる」、金祥甫の寓居に帰る。

この時、衡に「神農」のことを唱える遊歴者がいた。神農と黄帝がこの世に出現すると言う。人民はこぞってこれを信じている。はじめは法輪寺を拠点としていたが、やがて家々に伝播し、どの家庭でもこれを信奉するようになった。この日（二月二十五日）に、神農と黄帝

が下界に下り、人々の善悪を察して裁きを下すという。人民はみな紙銭を買ってそれを燃やして献上し、一時はみんな集まってきて大騒ぎになり、市場から人の姿が消えたほどだった。愚民が惑わされやすいのは、このようなものだ。

### 《19》金祥甫の家に滞在

〔二十六日〕

はじめ金祥甫は、私のために資金の算段をしてくれていた。しかしなかなかかばかしくいかなかった。

この日、金祥甫が互助金融で、あたりを引き当て、百金あまりを得た、という。私は金の寓居でこれを知った。貸してくれるというのを断りがたく、二十金を借りることとした。二十畝分の田祖で借用書を作り、金祥甫に渡した。

〔二十七・二十八・二十九日〕

ずっと金祥甫の寓居にいて、銀が届けられるのを待っていたので、外出できなかつた。

〔楚遊日記〕（2）以上